

勇み進みしかども、黒田美作入道睡鷗物師にて、柵壕きりの守り堅くためらふ中に、黒田市正高政鎗を提げ出會ひ、一三人突伏せ小姓に首取らせ、市正此處に有り、一足も引くな。穢き振舞せば、軍神も照覽あれ。斬つて捨つるぞ、と呼はる聲を一揆聞きて、爰は破り難し、とて寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行く。三宅藤右衛門支へ戦ひ痛手負ひたり。一揆又鍋島勝重の陣所の井樓に火を懸けたりしに、松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介、尼子八郎兵衛、紀州の使者山中作右衛門と打連れて来りしが、山中は銀の冑にて十文字の鎗を持ち散々に相戦ふ。鍋島の軍兵馳集り入れたてじと防ぎけるに、竹把に火燃え附きて白日の如く、一揆叶はで引返す時、四郎矢倉に有りて勝鬨をつくらせ、夫より城中静りけり。其後水野日向守勝成島原に著陣し、黒田睡鷗に夜討の有様語らせ聞きて、昔より四方を固く取り巻かれ、竹把を附け、柵の木二重三重に結ひたる寄手の陣に討つて出たる事を聞かず。古今無雙の武略をしたる一揆なり。されども一揆を一等超えて働かんは我士卒なり、と云はれたり。

○鍋島神原島原城先登の事

同じ城攻に、鍋島のしより堀二三間許に竹把を附寄せ、軍兵犇と押寄せ居けるに、城中殊の外に

静なれば、窃に堀の内を差覗き見るに一揆一人も無し。士大將鍋島安藝是を聞き、堀裏を差覗く其有様、只今攻入るべき氣色なりしかば、あはや、と云ふ程こそ有れ我先にと斷集る。鍋島の陣に附けられし神原飛驒守の士共竹把を附習ふとて、毎日代りぐに來りしが、是を見て、いざと言ふ儘に押寄する。神原の嫡子左衛門佐真先駆けて乗入りければ、戸田左門氏鐵の陣所に諸將集りて軍評定有りし時なるに、井樓より鍋島の軍兵、只今城に攻入り候、と呼はる。さらばとて諸將陣を寄せて攻落されけん。其後勝重に、今度軍令を背き、城攻有りし事を問はるゝに、勝重承り、神原父子先駆して乗入り候上は、目附を討せて叶ふまじと、不意に攻入り候、と申さる。神原に問はるゝに、嫡子にて候若き奴、軍令を忘れ先駆しける故恩愛に引かれ、子を眼前に討たせ候ては生き甲斐無し。父子は同罪と存じ、續いて攻入り候、と申されければ、鍋島も神原も門を閉ぢて追ひ込まれ、三十日過ぎて御許され有り。勝重人に會ふ毎に、筑紫にて卒忽の城攻せし罪許し給はり、忝き由言はれしかば、江戸にて、城攻の卒忽人よ、とて勝重の通らるゝを珍しげに觀けるとなり。又神原申されけるは、若き者共に竹把の附け様習はせ度く候。攻口四五間分ち給はれ、となり。皆苦しう候はじ、と云ひけるに勝重聞入れず。我攻口を人に分くる事や有る。一寸も叶ふまじ、と答へらるゝに、神原強ひられしかば、飛州の士を我士共に差

加へられよ、と言はれけり。此時一丈にても分けたらば領地を削らるべき由議有りけるに、勝重の遠き慮無かりし故に、其事止みたりし、と人々言ひけるとぞ。

○黒田勢天草丸を攻破る事並黒田睡鷗武畧の事

黒田忠之天草丸を攻むる時、本田但馬殿しく防ぎ支へて、先陣攻入り得ざりしかば、忠之素肌にて進まれけるを、黒田睡鷗、物具恃むに足らぬとは申せども、大軍を下知し給ふ身の甲を著されば、狼狽へたりと人の嘲り候べし、と言ひければ、忠之物具取つて肩に懸け、胃をば著す手拭にて鉢巻し走り出で、我士共年比吾家の恩にみちし奴原、今日は如何にして進まざるや。我此處を一足も引くまじ、とて鎗の罅を地に差込み、折敷きて進め者共、と下知せらる。雨の如く打出す鐵炮に打竦められ躊躇へり。睡鷗は是を餘所に見て控へ居しかば、忠之、何とて一方を下知せざるや。年老いて老耄したるか、と大音あけ齒齧して罵られしかども、少しも騒がず。未だ早く候、と靜に言へば、忠之愈怒り罵られしを、弟市正、彼入道は物師にて候。待たせられ候へ、といふ所に睡鷗つと立上り、鷹を取りて懸り候へ、といふ。詞の下より軍兵一同に嘯と進みて天草丸に乘入り攻取つたり。後に忠之睡鷗を近附け、軍兵我下知を用ひずして、汝が一言にて

忽ち城を攻破りたるは如何なる故ぞ、と問はれしに、總て城攻に四方より押寄せ、先陣特と攻詰むる時を見計りて、無二無三に進んで手負死人を顧みず乘入り候へば、攻破り候事を得候。四方の味方未だ押寄せず。一方より攻破らんと急ぎ候へば、城中も外の防ぎを捨てて、先嚴しく攻むる方を支へ候もの故、外の持口よりも防ぎ甚だ強く候。其隙に一方より攻入り候時は、容易く撃破り候。早過ぎたる方は却て手後する事常の理に候。臣此處の辨を知りて靜まらせ候へと申せども、殿急がせられ候故、味方に手負討死多かりき、と申しければ、忠之、高政共に大に感ぜられけり。

○水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論せられし事

島原を攻落す時、水野美作守勝重は、江戸にて賜りたる白川月毛といふ逞しき馬に乗り、戸田氏鐵の陣所より我陣所に乗切つて歸られしに、勝重の軍兵共、金の束熨斗の馬印を見るより我先にと勇みけるを、勝重馬上にて胃を取つて著、武者奉行河村新八、士大將上田女蕃に向ひ、我下知無き以前に懸るならば軍神に賭けて斬棄てよ、と大音上げて呼はり、鷹を拔出し軍兵を進め堀を破り、喚叫んで攻入りけるに、自分馬より鎗を杖にして本丸を目がけて進まる。嫡子伊織十

四歳眞先に駈出づるを、祖父の勝成後陣より見て、本丸を討破れ、と下知せらる。本丸に楯籠る者共數千人、今日を限りと思ひ定め防ぎ戦ひければ、討たる者多し。鍋島の軍兵ひるみて見えし處を、水野父子、横様に面も振らず切り懸りて、三の丸より本丸へ逃入る一揆を討取る事數を知らず。本丸の石壁より打出す鐵炮の玉霰の飛散るが如し。石壁は五間七間許も高く登り兼たる處に、水野父子大音上げて、今日本丸を攻取らば生きて誰にか面を向くべき。死ねや死ねや、と聲々に呼はり、打てども射れどもひるまず。我先にと攻め懸る。旗奉行神谷奎之允、旗十本の内一本持たせ來りて自竿に手をかけ、本丸に入らんとす。纏奉行進藤七兵衛、小野田正大夫、金の束髪斗の馬印を振りかたけ來りて、松の丸に押立てしかば、神谷も旗を入る。水野父子の兵念無く石壁を登り本丸に攻入りたるを、勝成二の丸より見遣りて、我今生の思ひ出なり。美作は大坂にて武功有り。伊織は、今日を始めの軍なるに、本丸を攻取りし事家の面目なり、と悦ばれたり。有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純は、寺澤忠高の後陣なりしが、唯一人從者に鎧を持せ寺澤の先陣を駈脱けて、天草丸の方へ馳入り、本丸に進んで五間許の石壁を登り、今日本丸の一番乗有馬藏人なり。心有る士は能く見候へ、と呼はる處に、勝重の士鈴木半之丞、取つたる首を石壁の上に置きて息を繼居けるが、此聲を聞きて鎧を横たへ藏人に向ひ、只今此處に

來り一番とは何事ぞや。本丸は水野美作守攻入り、旗馬印入れ置きぬ。二番とならば是へ上らせ候へ、といふ。藏人、聞入れられずば唯一鎧にと思へる氣色なる上に、水野の旗本丸に建てしを見て、さらば美作守に續きては藏人なり、と言はれしかば、其時鈴木半之丞、美作守父子の外大將達は未だ本丸には見えす。紛れ無き一番にて候、とて手を取つて石壁に引き上ぐるに、永純つめの丸喰違の處に進み行き、美作守は何處にや、と問ふ。神谷、美作守は腰廓の上に居て、爰に旗を入れ候、と答ふ。永純聞きて、諸は美作守は我より後にてこそ有れ、と言はれたり。永純本丸に押入りたりと勝重聞きて、使を立て、只今攻入れし由廓有る所に在り。若し夜に入りて一揆討つて出づる事も有るべし。爰に一所に有りて下知せられ候へ、となり。藏人聞きも敢ず、作州は我より後に攻入れられしよ。藏人は一寸も敵近き所を好み候程に、後へは引候はじ。一揆打つて出づるとも、藏人爰に在らば危き事候はず、と答へられけり。勝重、よしく、詰の丸より切つて出でば敗北すべし、とて士三十人許鎧を横たへ鐵炮を前に並べたり。藏人は鐵の楯を取寄せ、前に押立てて夜の明る迄待ちかけられしか共、一揆討つて出でず。信綱下知して勝重も鍋島の陣に入りかはられしか共、永純は退かず。使度々に及びて引返されけり。落城の後三月朔日、永純勝重の陣所に行き、本丸の一番は藏人にて候、といふ。勝重、年若くて左宣ふ。本丸

の奴原命を限りに防ぎ候ひしを、美作守父子押寄せ討破りて、旗を一番に入れし事誰か争ひ申すべき、と答ふ。鈴木も進み出でたれば、永純、また鈴木が申せし言も如何で忘れ候べき。作州父子は一番と思ひて、藏人一番と申せしも分明なり。されども旗入れ置かれし所に行きて見しに、夫より遙の後に控へてこそ御座したれ。鈴木も旗を證にして利口を申したれ。兎角に一番は藏人に候、と云はれければ、勝重、陣所に在りたればとて旗を一番に入れしは、是軍の法に於て誰かは一二を論ずべき。父子が兵共身を棄てて力攻に乘取りし本丸を、他の一番に定めん事思ひも寄り候はず。能思慮し給へ、と答へられしに、永純、旗の前後は論ぜず候。將たる者の先駆は藏人が外誰か候。作州は後より使を給はり候へば、一番は藏人なり、と怒られしかば、勝重、只今の争、無益の事に候。軍に慣れたる物師に問ひて一二を定められしかば、永純、打解けて小姓を呼び、茶を飲んで出でられしが、鈴木に向ひ、如何にも詞和に云ひて歸られしかば、藏人も並々ならぬ人なり、と譽め合へり。

○陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事

一揆の長、四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取りけり。二の丸にて鐵炮に中り、倒れし者の首

を斬りしに、忠利前髪有る首を撰り出させ、鞭にて彼首を指し、四郎が首とも覺しきに、誰か見知りたる、と問ふ。須佐美權之允、四年以前に四郎を召使ひし事の候。紛ひ無き四郎なり。左の耳の下に瘤の候。是其證なり、とて牛捕りたる四郎が母に見すれば、吾子なり、とて泣倒れしかば、忠利使を立てて首を石谷十藏の方に送られけり。後陣に千石の祿を與へらる。

○松野龜右衛門鐵炮修煉の事附松野才覺の事

島原の城攻に、細川家の士大將松野龜右衛門井樓より見るに、本丸と二の廓の間に坂有りて人集る。中に大紋の羽織著たる者在り。松野指ざして鐵炮にて打ちたるに、五町許にてたゞ中に中りてけり。夫より空箭無く打ちしかば、彼坂を夫より後たま／＼通る者、身を屈め走り通りけるとぞ。松野は、鐵炮の妙手留刑部一火に學びて妙を得たり。

熊本にて一匁の筒を磨き居しに、庭の南天蜀の實を鶉鳥の來て喰ひけるを、かなものしはめて藥を込み目的を見ず。箸にて火を差して打つに中らざる事なし。島原の前の事なりしにや、細川家の長臣南條大膳、恨を含む故有りて細川家を傾けん事を謀りけるに、其比深く密にする事有りて、泄れなば細川家の禍なる事を知りたりければ、先切支丹の事訴へけ

り。江戸より南條を召す。細川家驚きたれども詮方無し。松野、我に任せられよ、とて囚人なれば厚き板にて詰牢を造り、醫者一人に密謀を云ひ含め熊本より出づるに、天氣を待つとて處々に舟を留め、日を経る内に人參の入りたる藥を與へ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり。南條は氣の鬱したる上人參數百斤飲みたりしかば、心狂亂したりけり。松野江戸に打具し至りて、南條は數年狂氣の者にて候、とて出しけり。切支丹訟の事を問はるゝに、狂言のみなり、疾く熊本に歸すべし、とて松野に返されぬ。此謀唯醫一人のみ知りたりと云へり。

○藤堂高虎阿濃津にて勢揃せられし事

元和五年藤堂高虎、領國阿濃津にて俄に勢揃せられけり。人或は怪しみ、或は、高虎何事に謀叛すべきや。萬に一も叛心有らば事を密にすべきに、顯に人の驚くべき様に爲したるは子細有らん、と言ひしに、福島左衛門大夫領國を削られけり。

○福島正則領國を召放さるゝ始末の事

福島左衛門大夫正則は、關ヶ原の軍功に依りて尾張の清洲より安藝備後を賜はりけるが、物荒く政、悪きのみならず、多く無罪人を殺し、且東照宮に對し奉り無禮多かりければ、元和五年台徳院殿御上京の時、領國を削られけり。本多上野介正純に就きて、廣島の城池を渡すべき旨を申す。申上ぐべき由を答へられしが、御上京の事繁きに紛れて其事無かりしに、廣島の城普請の事を聞し召し怒らせ給ひしに、正純其時驚きて、正則の書翰を出されしに、證文の出し後れとて、聞召し入れられずといへり。

二條の城にて土井大炊頭利勝、藤堂和泉守高虎を召して、此事を仰せ出され議決せり。板倉伊賀守勝重、此事は井伊掃部頭直孝に仰せ聞けられよ、とて直孝を召す。御前に参りて、福島左衛門大夫國を召放たるべき事故召され候や、と申す。其事なり。誰か使にせんと思ふぞ、と仰せあり。直孝、京都よりの御使ならば、江戸に残れる者、是程の事辨へざるやと申す事も候べし。只今江戸に罷り有る者に仰せ出され然るべし。又正則を京に召され、罪の趣仰せ出され申譯有るか、又は國に引籠り思慮せよと仰せられ候ても然るべく候。事に依り直孝罷り向ひ打破り申すべし、と申す。和泉守、若き掃部頭には似合たり。但

福島もさすがの者にて剛の者餘多有れば、小路軍になりて如何に有らんと申す。直孝、和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや。直孝が家には武功の老武者多し。古き戦の軍を聞きしに、今川氏眞の許にて、濱松の城主井伊隼人を氏眞の城下へ召し寄せ誅せられし時、小路軍に成りて殊の外難かしかりきと言ふ唯一事を聞きたり、と云へば、和泉守詞無し。台徳院殿、いはれざる小路軍の論ぞ、とて先退出せられしが、井上主計頭を以て再び直孝を召し、仰には、我思ひたる所も汝が言の如し。人々皆口々に言ひて一同せず。掃部が存する旨に従ふべし。扱誰をか使にせん、と仰せなりにしに、直孝、斯様の使久世三四郎、坂部三十郎、兩人好かりなんと存するなり、と申せば、是も符合せり、との仰にて兩人使たり。斯くて酒井雅樂頭忠世太田善太夫を近附け、福島左衛門大夫領國を召放たるべき由仰せ出されたり。福島は然る者なり。如何なる事をか仕出すべきと危く思ふなり、と語られければ、太田、否何事か致すべき、と事も無けにいふ。酒井、又例の横著なる詞かな。危き事と思ふなり、と申されければ、太田、ならざる事をする福島に非ず候。爲べきを知らざる者こそさは候べけれ。福島は非道不仁の男なれ共、勝負の理を能く知りて候男なれば、何事も仕出さじ、と言ひしが、果して一言にも及ばず、仰の旨を奉りたりき。

六月に福島領國を削らるる旨廣島へ聞えければ、福島、丹波諸士を皆呼集め、預け置かれたる城なれば、公方の仰せなりとも渡し難し。又備後守殿爲なれば渡すべきか、と評論す。上月文右衛門進み出でて、人は如何にもあれ、我は本丸を預りぬる上は、命有らん限は人に渡すべからず、と申切つたり。丹波心得ざる氣色なり。村上彦右衛門聞きて、福島、上月兩人の思ふ所に、同心の面々別々に判形せられよ、とて一通書きて指出す。酒井主膳とて丹波が從子なるが、座を立ち鎌田主殿を呼び、如何に思ふぞ。丹波は伯父なれども上月が言ふ所尤なり、と言へば、主殿も上月に同心して判形をしたりければ、皆是に同心しけり。其時上月、人々皆斯くの如くなれば、丹波が妻子を本丸に入れらるべきや、と言へば、丹波即ち妻子を本丸へ入る。夫より我先にと妻子を籠めけり。城を受取るべき爲に諸將打向はれしかば、丹波、吉村又右衛門、水野治郎右衛門二人を使として、左衛門大夫領國召放たれ候により、仰の旨は謹んで承り候、然れども主君預け置かれし城を、證據とすべき書簡無くて渡さん事は、人々の存する處思ひ遣られ候。次に領國に入り給はん事、田舎の若き奴原無禮の恐れ有り。領國を避けられ候へ、と申し送る。さらば左衛門大夫は程遠し。伏見に有る備後守の書簡を證據にせんや、と云はせらるるに、父子たる事は論無しと雖も、備後守が領國にも城にも非ず。備後守が言は用ふるに足らず、といふ所に正

則が書簡來りしかば、城門の大手にて書簡を受取りぬ。さて廣島は船入二所有り。人多く騒しくて、士共の妻子退き去る時争有るやの恐れも候、とて一方をば人を止め、一方の口より退散す。城中の士は門の左に付き禮服して並び居、城受取の使安藤對馬守重信は、城門の右に添ひて城に入りけり。

安藤城門に入る時、並び居たりし人々に向ひ、左衛門殿事申すべき様も無し。と詞を掛けらる。其時皆禮せしに、獨茶筌髪にしてしかみの撞木杖をつきて、對馬守の詞を聞き傍を見て禮しけるを、山崎甲斐守見て並々ならぬ人なりと知りて、姓名を問ふに、長尾出羽と答ふ。山崎退散の後家族を養ふべし。又他國に行く中寓居せられよ、とて使をもて云はせられしに、出羽、甲州の御事は承り及びたり、忝き旨を謝す。聽て森美作寺忠政禮を厚うして招かれしかば、森家に仕へけるとなり。

丹波と文右衛門とは密に相計りて、初より楯籠るべきと言ひて同心する人無き時は、別にすべき道無き故に、事を一つにして士の心を試みたるなり、と其比言ひ合へり。さて後城を守るに決せし時、丹波、上月に向ひて、吾と文右衛門腹切つたらば、何事も外にすべき事無し、と言ひしとかや。

左衛門大夫罪せらるゝと聞きて、暇を乞ひたる士三十人許有りしかば、狭間潜と言はれけり。妻子を本丸へ入れたるは諸籠と名附け、妻子を城外に出し、其身のみ城を守らんと言ひしは片籠といふ。後に京都耳塚に札を立て、三色に分ちて姓名を書きて世の人に見せし故、狭間潜の面々は餓死に及びぬと言へり。上月は祿五千石、士大將たり。正則、上月が志を感賞し、書簡を與へらる。

今度我等事御預に成り候。是に依りて城を枕と存候由心底察入候。然れども存寄有之候間、早々城相渡し可申候。貴殿志之段不淺過分之至に存候。

とぞ書かれける。大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり。同じ時大崎は備後鞆の城に有り。秋田下總も同じく鞆に有りしが、大崎を廣島に遣りて己一人にて鞆を守り、討死して名を揚げばやと思ひけん、大崎に向ひ、江戸より城を受取るべき使近き内に著陣有るべし。疾く廣島に籠られ然るべからん、と云ふ。大崎聞きて、殿の下知無くて城を出でん事思も寄らずといふ。秋田城中を廻り防戦の支度専らなりしに、大崎は柱に倚りて眠る外無し。人々大崎を誹りたるに大崎嘲笑ひ、秋田は斯く由々しく防戦の用意するなるべし。我は思ひ定めたる事有りて萬事暇なり、と言へば、其子細を問ふに、大崎此城を守り日本國を敵になし、萬に

一つも勝つべきや。可憐人々を徒に殺さんも如何なり。我一人大手の門外へ出でて、城代大崎女蕃と申す者なりとて腹切らん後、城を受取り給へ。城の人々残らず助けられよ、と云ひて、各達の命に換るべし。何の用意の有るべき、と言ひけり。斯る所に正則の證書來り、事故なく城を渡せしかば、大崎と村上彦右衛門、眞鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家に仕へけり。大崎は若き時木村常陸介師春に奉公し、後正則に仕ふ。鬼女蕃と言はれし者なり。關ヶ原の時尾州清洲の城に大崎を置かれけり。石田三成大垣の城に入りて、使を以て、福島家は太閤の恩篤き人なれば、今度無二の味方に候。清洲を明けられよ。兵を入れなん、とぞ謀りける。津田備中繁元は實にもと思ひて、同心すべきに、長行事は如何にもせよ、殿の仰せ無くて他國の兵を城に入れん事、存じも寄り候はず。強ひて兵を寄せられれば一軍せん、と目を見出して使を罵り追返しけり。斯くて大崎門々を固く守り、狹間配して斯くと小山に告げたりしかば、正則悦ばる。東照宮、正則に、清洲の守に誰か有る、と仰せ有り。正則、大崎女蕃を留め置きて候、と申す處に、斯と告げ來りければ聞し召し、大崎は世に譽れ有る者なり。さぞ有らん、と仰せられしが、其後も、清洲を敵に取られざりしは大崎が功なり、と度々仰せ有りしとなり。紀州にて安藤帶刀、大崎、村上、眞鍋に逢ひて武功を問ひたりしに、眞鍋は十四の時

より軍をし、數度の功名を語り、村上も十四竹子の軍より壬生川の先斷等を言ひしに、大崎は、我木村が許に小祿にて有りしが、士大將になり、又福島の家にても士を下知し候へば、左のみ鈍うも候はず、と言へば、帶刀大に感じけるとなり。又一説に、福島正則流罪藝州へ聞えければ、長臣の者共福島丹波が許に相集り、城を渡すべきや否やを論ず。村上彦右衛門通清、殿流罪たり共、御存生に於ては御判形を見て國を引渡すべし。御判形來らば此城を枕にして討死の外他事無し。但本丸は上月文右衛門預りたれば、上月に談合然るべし、と言ふ。上月聞きて、御判形を見ずして争か本丸を渡すべき、と言ふ。備後三次に尾關石見、備中境東條に長尾隼人一勝、備後三原に大崎立蕃長行有りしを、石見隼人をつほませ、廣島、三原の兩城を守り、各人質を城に入れ天守に燒草を積み、大手搦手の持口を定めたり。安藤對馬守、永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ、備中の笠岡に著陣あり。丹波吉村又右衛門、大橋茂右衛門を使として、主君の判形を見ずして城を渡すこと迷惑なり、と竹中采女へ言ひ送れり。上使聞きて、狀を取寄すべし、と返答有りて笠岡に滞留の所、正則の狀到來す。丹波已下是を見て、城を渡すべしと相定む。笠岡より尾道へ八里、初は陸路と定められしを、安藤船にて行くべし、となり。加藤嘉明聞きて、上使は船にて早く、惣人數は陸にて遅からん。上

使より遅くば我等は男を捨てなん。是非陸をと勧めらるれども安藤聞き入れず。船の事を蜂須賀阿波守に相計らる。加藤も船を川意したり。せめて某の船に乗られよ、と勧め、此船に乗りて上使尾道に到り、人数は陸を廻りけり。大崎立蕃使を以て、主君の状廣島に来る上は三原も相違候まじ。然れども三原へ狀來らずして城は明渡し難し、と竹中の許に云ひ送る。安藤聞きて、後先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乗入り、上使討死の時爰に有り。城の門際にて上使討死せば、續く者無きといふ事有るべからず。只今まで笠岡に滞留し、又爰に日數を送るべきに非ず、と云ひ切つたれば、加藤尤然るべし。とて子息式部少輔の先陣を早押出さんとする處に、三原の城へも早や正則の狀來りければ、立蕃事故無く城を渡したり。城に入りて見れば、士足輕の名を書き附けて狭間毎に配り置き、城の隅々まで掃除して座敷には釜に湯を沸し、茶を碾かせ置きたり。翌日廣島に著きければ、丹波、今日渡すべきに城中掃除未だ終らず。下々の荷物も退け兼ねたり。明日迄待たれなんや、と言ふ。永井聞きて、我兼て聞きつる事有り、城和半になり渡すに及びて、下人の荷物を片附け兼ねたり。一兩日待たれよ、と言ひしを、荷物は札を附けて大手搦手より手より出さるべし。相當の價に買ひ取らん、とて城を受取りたりし。其翌日寄手の大將頓死しぬ。城中の謂に任せば、城を持

ち返す變も計り難し。危き事なり、と云ひ傳へたり。唯一刻も早く受取らん、とて大手へ進み行きて繪圖を披き、城内の物主共を呼集め、番所寄口を渡し濟み、城へ入つて飛脚をもて此旨言上有りけるとなり。古き人の詞に、城の受取渡は互に證據を取り、唯今事に臨むが如く心得べし。城主進退窮りたるなれば慎むべきなり、と言へり。

常山紀談 卷之十九

常山紀談 卷之二十

○福島正則信濃國へ赴かれし時の事

正則配流の時、正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷、裏門へは鳥居左京亮打向ひ、皆士卒物具し
 たりけり。芝の邸へは最上源五郎義俊打向へり。蒲生の士共、正則公命を承りたりと聞きて、急ぎ
 邸を出でらるべし、と言ひ入れければ、正則、仰にも及ばず、とて、信州に赴くべきにて候、とて熊
 澤半右衛門守久、上月新八兩人を呼び、奥筋の風俗常にがさつなり。蒲生鳥居の者共門内へ込入
 るに於ては、吾士共無禮を咎めて、事の破れも有るべきなり。汝兩人門内に有つて理を盡すべし。
 夫とも聞入れずば駈け來りて告知せよ。自害すべし、と言はれしに、半右衛門、これは畏り難き仰
 を承りける、と言ひも果てぬに、正則、我今日公儀に背き斯く成果てし故、汝さへ悔るや、と大に
 怒られしに、半右衛門驚かす新八に向ひて、只今仰の如く、出羽奥州の風俗のがさつなるは勿論
 なり。立向ひ如何に理を云ひたりとも聞き入るべからず。其時駈け返りなば、追立てられ逃入り
 たると同じ事にて、末の世迄も恥辱なるべし。さらば込入る奴原腕の力の續かん程切合ひてそ

れを注進なし、其後殿は如何にもならせられんや、と云ひけるに、新八も元より同心に候、と答へ
 しに、正則悦んで打領き、二人が言ふ所尤も至極なり。幾重にも穩に理を盡し、承引せずば志の
 如くにせよ、と言はれしかば、兩人畏り、承り候、とて座を立ちて門内に出向ひけるに、事故無
 かりしかば、正則信州に赴かれけるとぞ。

○正則茶道坊主が義氣に感せられし事

正則常に物暴く、人を誅する事を好めると世の人と言ひ合へり。或時近習の士少の咎有りて城
 内島の櫓に押籠め、食物を與へず餓死せしめん、と言はれしに、其士の恩を受けたりし茶道坊主、
 罪無くて斯る有様を悼み、潛に夜焼飯を携へ行きたり。彼士、我は罪有る故に斯く成りたり。汝
 只今の振舞を殿聞し召されなば、我よりも罪重からん。又飯を喰ひたりとて命助かるべきに非
 ざれば、疾く歸れ、と言ひしに、茶道云ひけるは、同じ罪に行はるゝとも後悔無し。我先に既に
 殺さるべき事の有りしに、君の救ひにて一助り候ひぬ。恩を受けて報せざるは人に非ず。此方
 も又弱けなる心御座して、吾志を空しくし給ふ事こそ口惜しけれ、と言へば、彼士悦んで、さらば
 とて是を食す。夜毎に斯くの如くしたりけり。程經て、死したるならんとて正則矢倉に行かれし

に顔色少しも衰へず。正則、さては飯を送りたる者有らん、と怒られしに、茶道來り、某こそ送られたれ、と申す。正則はたと睨みて、己何故に斯くしたるや、頭二つに切割りなん、と膝立直されし時、茶道少しも騒がず。我昔罪を得て既に水攻に合ひて殺さるべかりしに、彼人の申し開きたりし故、今日まで思ひかけず命存へ候ひき。其恩を報ぜん爲毎夜忍びて飯を運び候、といふ。正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感するに餘れり。斯くこそ有るべけれ。彼士をも許すべし、とて其儘矢倉の戸を開きて罪を宥め、茶道をも深く賞せられけり。されば暴悪の人と世に稱しけれど、斯る義に感ずる事の切なる故に、士の思ひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身を捨てて奉公しけるも、實に故有る事にこそ。

○井伊直孝直諫の事

台徳院殿諸大名を召し、土井大炊頭利勝を以て、來年嗣君に世を譲らせ給ふべき旨仰せ出されしかば、皆祝し奉りたる處に、井伊直孝默然として有りしかば、利勝側に招き、如何なる事ぞ、と問ふに、天下亂の本たりと存すれば、目出度事とは存じも寄らず、と申す。子細は如何にと問ふ。されば其事に候。大坂の亂幾程なく江戸石壁の營み、日光の土木、天下の諸大名以の外に困窮せ

り。又世を譲らせ給ひなば諸大名獻上奉る物に費多く、將軍宣下の饗禮を取行ふべし、愈困窮に及び、下を剥ぎ民を苦むるの外更に詮方無からん。是民の嘆亂の因と存するなり、と申されしかば、利勝、尤なり。此旨有の儘に申すべし、とて直孝を御次の間に伴ひ、利勝御前に参りて、云云の山申したりければ、即ち直孝を御前に召され、汝が申す所尤なり。され共既に仰出されたれば易難し。猶是よの後憚る所無く申せ、と仰せられしかば、直孝、臣が申す旨然るべからずと思召し候により、聞き召し入れられず候か。臣が言尤と思召しなば、御用ひなからん事仰とも覺え候はず、と申されけるに、暫く御詞無かりければ、利勝、臣既に年老いぬ。壯年の者直言を申し候事治世長久の因に候。明日諸大名を召し、掃部頭申旨尤なるに依り、相止めらるべき由を仰せ有りて然るべう候ものを、と申されければ、台徳院殿則ち諫に従はせ給ひけり。其時直孝、臣が申す旨用ひさせ給ひ、辱き旨謝し奉りて退出せられけり。台徳院殿の諫に従はせ給ひし事、直孝の直言美を盡せり、と人申しけり。

又一説に、台徳院殿世上太平と雖も、嗣君未だ幼穉に御座します。總廓を築かるべし、と仰せ出されしに、直孝一人兎角の詞無かりしかば、各退出の後、如何なる故ぞ、と問はせ給ふに、仰の旨心得難く候。嗣君幼穉に御座しませ共、治平の時なれば一廓滅せられ候てこそ人々

安堵致すべけれ。嗣片幼穉により廓を増されなば、人々危む心を生ぜん事必然なり。且御上京も候て過分の財用を費し、五三年も儉約ならざれば償ひ難く有るべきに、又費を多くなしたらんには、廓は堅固に成り候とも武備有るまじく候、と申されければ、翌日諸大名を召し、掃部頭申す旨尤なるにより、昨日の仰せ出されは相輟めらるゝの由を、仰せ出されたりと言へり。孰か是なる事を知らず。

○明の鄭芝龍援兵を乞ふ事並稲葉正勝諫言の事

大猷院殿の御時、國姓爺日本に援兵を乞ひければ、諸長臣を御前に召出され、是を捨て置かれなば日本の恥なり。援兵を遣さるべき旨仰せられしに、小事たらざる故に各兎角を申出で兼ねられし處に、稲葉丹後守勝正、援兵の事然るべからざる旨再三申されければ、色を變じ内に入らせ給ひけり。明日又召出され、昨日申せし處思召に叶はざりしが、熱御思慮有りしに、申す處理なり。援兵に及ぶまじき由仰せ出されたり。

明の末鄭芝龍と言ふ者、萬曆年中日本に來り、肥前松浦の平戸に在り。又長崎にも在りて、崇禎年中に明帝より召返されけり。平戸に在りし時妻とりて子を生む。其子を鄭彩といふ。芝

龍官を得て、長崎の奉行に告げて妻子を迎ふ。公に申して許されを蒙りたり。明滅びし時、大祖忠苗裔を福州に建てて元を隆武と號す。清と度々戦ひに及びて勝ち難き故に、援兵を乞ひたりしなり。明帝朱姓を賜ひければ國姓と稱し、爺は老成を尊むの詞なり。芝龍が事明末の書に詳に録せり。

○大納言頼宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事

正保元年は明の崇禎十七年なり。明朝亂れ、陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり。一揆を起し北京へ攻入り、明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡を獻けて加勢を乞ひけるに依りて、紀伊大納言頼宣卿、異國より加勢を頼み申す事、日本の武威四海に輝くとも申すべし。諸浪人を集め候ひなんには數十萬も有るべし。夫に西國、中國の大名小名差し加へられ然る可からん。拙者に總大將仰せ附けられ候はば、何事の悦びか是に過ぎん。異國に攻入り、思ふ儘に日本の武勇を見せ候べし、と願ひ奉り給ひけれ共、御加勢の事止みければ、兼て仕へ申せし武功の物師共、清兵と一軍して老後の思ひ出にせんと勇みける人々、残り多き事よ、と言ひ合ひけるとかや。

○酒井忠勝直言の事

大猷院殿の御時、晴の猿樂有らんとする前夜に大雨にて、御前に見渡るべき堀の白土壞れしに、一説に、朝鮮來聘使者出づべき夜、櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり。如何せんと人々云ひける處に、松平伊豆守信綱、白き奉書の帟を以て貼らせられしかば、皆其捷智の程を感じ合ひける處に、酒井讚岐守忠勝、一説土井大炊頭、利勝ともいへり伊豆守に向ひて、讚岐守が存する處は、貴人には成らざる事は成らざると知らせ奉るぞよき。仰せ出されんに何事も仰の儘ならんと思召されんには、驕奢を導き奉るにてこそあれ。其時は如何し給はん、と言はれしに、信綱深く心服せられけり。

○墨田川に橋を掛けられし事

江戸の墨田河に橋無かりしを、酒井忠勝申して橋を掛けられけり。要害の爲悪かりなん、と云ふ人有り。忠勝、天下を治むるに人を以て要害とすべし。人苦んで何の益か有るべき。人を苦めて要害とせば、江戸は一日も持堪へ難し、と答へられけり。

○板倉重宗京都所司代の事附板倉勝重器量の事

板倉周防守重宗京の所司代たりしが、江戸に下りける時松平信綱對面し、公方にも政事に御心を盡され候。京都の事も委細に聞し召し度候。是より後は同職に差し越され候書狀、京都の事詳に記され候へ、と言ひしに、周防守、百二十里の行程隔たりたる事、何程に聰明に御座しますとも、及び腰なる事は得知し召されじ。其故に周防守を京に指置かれ候事なれば、申上ぐるに及ばず、と答へたるを、諸は周防守は致身者なり、と感ぜさせ給ひけり。

重宗の父を伊賀守勝重といふ。初は四郎右衛門とて祿五百石なりしに、京都の所司代を仰せ出され、二萬石賜はりけり。是は本多正信が薦め申せし故となり。勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ、重職の任を身に受け候事に候程に、歸りて妻なる者に相謀りて、若し同心せずば職を固辭申上ぐべき由申しけるに、正信打領く。勝重家に歸りて、斯る仰を奉りしなり。重き任なれば内縁を頼み訴する者有るべし。公私に附きて口を添へられずば、仰せを畏り奉らん。若し少しにてもいろはれんとならば、只今其由申して京には赴き候はじ、と言はれければ、こは如何なる事を宣ふぞ。仰を畏らせ給へ。女の身如何で公の御事に携り申

すべき、と言はしければ、さらばとて出づる時袴の腰を振らして著られしを、夫は如何に、と言はれければ、勝重、さればよ。斯く有るべしと思ひしなり、とて重々に戒めて後、仰を奉りたりと世には言ひ傳へたり。勝重、尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長嚴和尚が弟子にて長祐と言ひしが、還俗して四郎右衛門と言ひけり。勝重嫡男を重宗、次男を重昌といふ。二人共江戸に在り。或時大猷院殿訴訟を一つ巧に構へさせ給ひ、二人を召して、判断せよ、と仰有りけり。重昌仰を奉り、理非分明に決定して退出す。重宗稍久しく思慮して後、重ねて決断の旨を申し上げ候はばや、とて退出し、二三日過ぎて後御前に参り、判断の旨を申したるに、弟の重昌が申したるに相同じ。人々、兄に勝りたる重昌なり、と賞め合へり。其後勝重京より江戸に下りし時、大猷院殿彼の訴の判断の事詳に示させ給ひ、重昌が才器を御感あり。勝重承り、内膳正は若氣にて思慮無く候。周防守は國家の政事を取り候とも其任に叶ふべし。其故は、訴を判断する事は政事の一つの條目にて候。政事は至つて重き事にて、一言を以て天下の利害に係り候。苟に極め申すべき事には非ず候。政事は大事と繰り返し思慮致し候へば、重宗は政事を執り候とも仕損すまじく候。只打見たる所を以て己が智慧を人に見せんと存する所は、重昌が若氣と申す物にて思慮無く候、と申しければ、御感淺

からざりしとなり。其後、伊賀守年老いたり。所司代の職に任すべき才を選び候へ。汝が替にせばや、と仰せ有りしに、勝重、子にて候周防守、所司代の任に叶ひ候由申したりければ、内々其如く思召されしと仰有りけり。周防守は斯くとも知らで御小姓にて有りしに、父伊賀守が替りに仰せ出されけり。周防守上京せられしに、伊賀守衣服を改め、左右の職に居る人を並べ置き、記録をも悉く取出し、周防守を上座に招き、謹で江戸靜謐の事を窺ひ、今日より所司代なれば萬事引渡し候、といふ。周防守、只今まで御側に仕へ奉り、世の有様努力存じ候はず。仰にも父を見ならひ候へとの事なり、と申されしに、伊賀守、否々其職に居るべき者なりと擇み出されし故、斯る重任の仰は奉りたりと覺ゆるなり。人の心は面の同じからざるが如し。我に付き添ひ居たればとて、我に離るゝ時は自ら決断するより外の事無し。汝が不才を隠しなば、五畿内は言ふにや及ぶ。西國までも禍有るべし。些とも飾る事有る可からず。只不才と表すを第一とすべし。不才を知召されなば、其任に當るべき人を擇ばれて仰せ附けらるべし。更に恥辱に非ず。今日より所司代の職に居るべし、と言はれしかば、周防守其詞に隨はれぬ。勝重は町家を借り置きたるが、其處に引移り、碁を打ちて口ずさみに、今度の所司は厳しいものよ。我をあひしらひたるが如くならば、必ず罪せ

られなん、とて碁を打つてありしとぞ。

○重宗訴訟を聞かれし心得の事

周防守重宗京都の職に有ること凡三十餘年、人敬ふ事神明の如く、愛する事父母に似たり。父子誠に同じ名臣とぞ聞えし。されば重宗は寵恩も殊に厚く従四位上に昇り、官左近衛少將に進まれけり。重宗職に任じて後毎日決斷所に出づる時、西面の廊下にして、遙に伏し拜む事有りて決斷所に出で、此所に茶磨一つ据ゑ置き、明障子引きたてて其内に座し、手づから茶挽きて訟を聞く。人皆不審し合へりけるに、遙に年経て後問ふ人有りしに、重宗答へて、先決斷所に出づる時、西面の廊下にて遙に拜する事は、愛宕山の神を拜するなり。多くの神の中殊に愛宕は靈驗新なると聞きし程に、所願有りて斯くは拜しぬ。其所願は今日重宗が訴を斷らんに、心及ぶ程私の事あらじ。若過りて私の事有らば、忽ち命を召され候へ。年頃深く頼み奉る上は、少も私心有らんには世に存命へさせ給ふな、と毎日祈誓するにて候。又訴を別つ事の明ならぬは、我心の事に觸れて動くが故なりと思ひなしぬ。良き人は自ら動かざらん様にこそあらめど、重宗夫までの事は及び難く、唯心の動くと靜かなるとを試るには、茶を挽きて知る。心定

りて靜なる時は、手も夫に應じて磨の廻る事平にして、軋られて落つる所の茶如何にも細やかなり。茶の細やかに落つる時に至りて、我心も動かぬと知り、其後漸く訴を別つ。又明障子を隔てて訴を聞く事は、凡そ人の顔形に、打見るより憎さけなると憐ましきと有り。誠しき有り、奸しき有り。其品多くして幾らと云ふ數を知らず。見る所の誠しきと思ふ人の言ふ事は眞實と聞かれ、奸しきと見ゆる人の爲す事は何事も皆偽と見ゆ。憐ましき人の訟は枉けられたる所有るかと思はれ、憎さけなる人の争は僻事ならんと覺ゆ。是等の類は目に見る所に心の移されて、彼詞を出さぬうちに早我心の中に、邪ならん、正しからん、善からん、直ならんと思ひ定むる程に、訴の詞に及びては、我思ふ方に聞きなす事多し。訴のなるに至りては憐ましきに憎むべき有り。憎さけなるに憐なる有り。誠しきに詐有り。此類殊に多し。人の心の測り難き、形を以て定めん事叶ふ可からず。古の訴訟を聞くには色を以てすと云へ共、夫は重宗が及ぶ可きにあらず。又さらぬだに訴の庭に出でんは恐しかる可きに、まして生殺を司れる人を見てはいぶせくて、自言ふべき事をも得言はで、罪にも科にも遭ふ人有らん、と思へば、所詮互に面を見、見られもせぬに如じと思ひて、斯くは座を隔つるにてこそあれ、と答へられしとぞ。

○板倉重矩の事

板倉内膳正重矩の曰く、

重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有りし内膳正の子周防守重宗の從子なり。膳にて長早く、以ての外見苦しき人なりしかども、有徳賢才の聞え有りて、寛文二年祿二萬石増賜はり、大坂の御城代たり。寛文五年大雨にて、雷天主に落ちて火出でて焼上りしかば、大坂の騒ぎ大方ならず。萬治三年雷火有りし時、鹽硝の藏に火入りて、死人多かりし事を聞きたりし故なり。内膳正、町奉行彦坂壹岐守、石丸石見守兩人に、鹽硝は皆濠中へ入れたる由振れさせられしかば、騒ぎ静りけるとぞ。内膳正豫警衛の備固く下知し置かれし故、尼ヶ崎の青山大膳亮、人數を率る大坂に來り、其備を見て深く感ぜらる。此旨江戸へ聞えしかば、御書を賜はり稱美ありければ、内膳正即ち家士を集め、是皆汝等が功なり、と讓られしとぞ。同年の冬江戸に召し、一倍の祿を増し賜はり、執政の職を仰せ蒙られけり。同八年京都所司代牧野佐渡守正親の替仰せ出さるゝ内、暫し内膳正を以て京都の事を司らしめ給ふ。上京の後參内の事有り。此禮儀御簾を半卷上げらるゝ例なれども、内膳正恐懼す

べき事なれど、天顔に咫尺し奉るの名有りて其實無し。御簾を高く卷上げられ候へ、と奏聞有りしに、尤なり、との勅にて御簾を高く卷上げらるゝ事内膳正一人なりしとぞ。其後又一萬石増し賜はり、下野の烏山の城主たり。重矩若きより詩歌に心を寄せ、學問を嗜み、熊澤伯繼が門人にて嘉言善行多かりき。京都にて加茂川洪水の時、白川より加茂川四條の間へ堤を築かせ、又鞍馬の往來市原といふ所に水流れ、往來の困なりしかば、田地を求め川筋を除き、山路を開かれしかば、内膳死後に及びて此地の百姓共仁徳を慕ひ、如意谷に内膳正の位牌を設け、跡を葬ひしとなり。

財寶を奪ひ取る者を昔より盗と名附く。我熟思ふに、大名に盗多し。下士民の善有るを擧げずして棄つるは、是人の善を盗むに非ずや。親族朋友にも善有るを稱せずして過ぐるは、是も人の善を盗むなり。中にも君たる人は下の善を擧ぐべき職に有り、是天より命ぜられたる任なり。人の善を盗みて天命の任を缺くは盗の大なる者なり。我若し人の善を盗まんやと是のみ心を盡すよ、と語られける。又伯父周防守が語りしに、人の生質様々有る中に、見たる處の憎き者有り、愛すべき人有り。此憎き人を見ては善言も悪様に聞きなすぞかし。况や直言を言へば愈憎む者なり。又愛すべき人の言ふ事は、善からぬ事も善く聞きなすものなり。是心得べき事なり、

と父なりし伊賀守常に戒められしは格言なりと。又語られしに、儉と吝と相似て、その本大に異なり。儉は事の費を厭ひて奢侈ならず、用ふべき事に財を用ふるをいふ。吝は是非の論無く一向に物を惜むなり。又戒められしは、我心に叶ひたる者の言ふ事は何事もよく聞え、行路のよからぬも心附かず。又我事を憚る所無く直言する人は、道理の至極せるをも外になし、其詞の無禮を罪とす。是皆事を過つての元なりと。其前一萬石の中甚だ貧しかりしに、新に儉約の法を定め、先自らの事を第一に守られし時の歌、

もとめなき心もこともおのづから任せて過ぐる身こそ安けれ

○毛利勝永大坂に入る事

關ヶ原亂の後、毛利森とも記、豊前守勝永は土佐へ流罪せられしに、大坂に事起ると聞き、或夜妻に言ひけるは、我罪有りて斯る所に居住し、汝にも斯く憂き事を見する事ぞとよ。されども我志有り、詞に表し難し、と語りければ、妻の曰く、世の變は如何なる人も計るべからず。斯く成り果てたりとも更に悲しむべきに非ず。妻は夫に従ふ道とこそ聞きて候へ。其御志を承らばや、といふ。勝永曰く、我武名を傳へて數世に及びぬるに、斯く沈み果てなん事口惜き事なり。

命を秀頼公に奉りてんと思へども、我爰を忍び出でなば、憂きが上にも猶憂き事や御身の上上添ふらん、と泪を落しけるに、妻熱と聞きて打笑ひ、弓箭取の妻となりて争でか斯る事をなれなんや。早此曉船に乗りて武名を潔くし給へ。君の爲め家の悦び何事か之に如かん。妾が事な思ひ給ひそ。如何にもなり給ひたらば、此島の波に沈み候べし。運命目出度く頼て逢ひ奉らん。急ぎ給へ、と言ひければ、勝永悦んで小舟に取乗り、大坂に至り籠城しけり。其後山内對馬守より豊前が妻を固く縛め置き、斯くと告げられしかば、東照宮聞し召し、勇士たる者の志感賞すべき事なり。豊前が妻罪する事有る可からず、と懇に仰せ有りければ、豊前が妻大坂の城中に入りけるとぞ。

一説に、父壹岐守勝信も土州に流されしが病死しぬ。勝永土州に在て年月を送りけるが、時其從子宮田甚三郎を大坂に遣りて、其從弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問はせけり。斯る所に大野より秀頼兵を起すの旨告げ遣りしかば、勝永、土佐守忠義を欺き關東へ忠を致すべし。先非を改め舊領に復せん志なり、と云ひて土州より船に乗らんとしけるが、甚三郎を呼びて、我大坂に著きたらば嫡子式部、次男藤兵衛ともに山内家より殺害すべし。如何す可き、と言ひしかば、宮田夜に入りて陸に上り、式部が乳母の子小原文右衛門と

相謀り、難無く式部、藤兵衛を連れて舟に乗りければ、勝永悦んで船を出し、共に打連れて大坂に至れりといへり。

○池田忠繼朝臣士を懐けられし事

池田左衛門督繼は、東照宮の御女北條氏直の北の方にて御座しけるが、北條家亡びて後國清公に再嫁有りて生れ給へりしかば、東照宮の御外孫なり。大坂冬陣には十六才なり。一旦和平に成りて師を返されし後、軍に従ひし士共寄り集りて物語する時、一人の云ふ、若き士の此度の軍は日比と大に違ひて、諸事の下知兎角いはん詞もなし。中にも今まで詞に出さぬ事一つあり。仕寄場にて寒氣烈しきにさぞ苦勞ならん、とて小き手樽に酒を入れて賜り、又綿入の肌著を賜り、此事努々人にな泄しそ、と仰せられし志の忝さ忘れ難けれど、語るなと仰せ有りし故今迄は泄さざりし、と言へば、一座十四人手を打ちて、我々も其通なりき。我一人のあひしらひなりと思ひしに、皆斯くの如きは例少き事なり、と感じ合ひけるとぞ。

○芳賀内藏允武者振の事

大坂冬の城攻に、興國公の攻口は天満橋の邊なりしに、先陣の士大將波多野掃部、須加左京竹把を附くるに、兵少くして、夜にならでは如何にも調ひ難く候。日の中とならば兵を増し給は候へ、と言ひしかば、其様を見て來れ、とて芳賀内藏允先陣に行く。芳賀は茜染の羽織著たり。先陣の兵共家屋の焼趾土藏の蔭に控へ居て、橋より上に標の杭の候。見られよ、と言へば、芳賀進み行く。芳賀、近頃寵せらるる者ぞ。武者振見よ、と言ひ合へり。芳賀馬より下りて徐に川岸を歩むを、城中より打出す鐵炮川水に響き渡れり。芳賀些とも騒がず足の數を數へて歸り、如何にも兵少くては叶ひ候まじ、と言つて旗本に歸る。此芳賀はもと祐筆なりしが、岐阜落城の日、國清公勝軍の書を芳賀に書かせられし時、麓に將机に倚りて御座す。芳賀其前に跪いて在りしに、城中の焼きたつる火鹽硝の庫に入りて、其音山嶽の崩るゝが如く、敵押寄するかと騒ぎしに、芳賀が筆把りて書きし様少しも駭く體無かりしかば、事に寄せて試みらるゝに器量大なりければ、頻に用ひられて祿二千石賜り、後國政を執りしに、度々直言を申し、諫め争ひて事よく治りけり。

○佐竹勢今福口を攻むる事並杉原常陸武功の事

大坂冬陣に、佐竹義宣今福口を攻むる。士大将澁井内膳先陣して柵の木を打破る。佐竹に附けられし軍の目附安藤治右衛門、屋代越中守先駆して、安藤爽に物具せしを、柵の中より鐵炮にて胃の上を打ちかする。安藤折敷きたれば、頻に打懸けて立上り得ず。屋代父子、伊藤右馬允馳來り、如何に安藤、日比は年若しとて自慢せしには違へり、と言ひて柵を打破る。木村長門守重成城より助け來り、柵を隔てて睨み合ひたり。木村は黒き平袖の羽織を著し、柵に取附きて、あはれ鎗にて叩き崩さばや、と云へども、鐵炮の足輕散り亂れて來らざりしに、井土忠兵衛といふ者、鐵炮持たせ馳來りければ、あの烏毛の羽織著たる敵は物師よ。打落し候へ、と下知して柵の木に鐵炮をもたせて、澁井が胸板を打通す。木村喚いて懸り寄手を追崩す。平塚五郎兵衛、澁井が屍を踏越えしを、木村が従者首を取らんとすれば、平塚、その冷えたる首何にせん、というて敵を追立つる。義宣使者を上杉景勝に遣はして加勢を乞はれしかば、杉原常陸桓合に兵を出す。杉原は大坂に師を出す時、吾物具以ての外古くて、日本國の弓取に笑はるべし、とて猿樂の半臂を用意せしが、其日物具の上に著て塵の絲を腰に結びてさけ、十百許を率ゐて川の中の洲に進みしかども、水深かりしかば、玉藥を惜まず、込替へく城兵を打白ます。軍兵を下知するに、進退思ひの儘なり。杉原が士卒を下知する有様を、諸將の陣鳴を靜めて見物す。

譬へば馴れたる雀の子を呼ぶに似たり、と言合へり。東照宮遙に杉原が立出を御覽じ、上杉が家は古風なる故鎧直垂を著たるなるべし、と仰せ有りしは、半臂を遠く御覽有りての事なり。其後上杉家の士大将に御感狀を賜はる。杉原御前にて謹んで上を包みたるを解き、讀み終り始の如く包み、本多正信の方を見遣りて感じ、仰せ候詞殊更に忝く覺え候。景勝武功を賞せさせ給ふ故に、陪臣まで斯る仰を承る事、謙信弓箭の遺風を天下に擧ぐる所に候、と言ひて退出したりけり。

○上杉景勝志貴野口合戦の事

志貴野にて上杉景勝先陣、柵を破り、井上五郎右衛門を始として數百許打取り、大和川まで攻め入る時、景勝直江を呼びて、城兵援來るべし。先陣は如何に、と問ふ。直江、先陣は士卒少く候へども安田上總介、二陣は隅田大炊介長則に定め候、と申す。否々隅田を先陣にして二陣を安田に繰替へよ、と下知せらる。是激の道なるべし。斯くて安田は、先陣を二陣に繰替へられ口惜き事なり、と齒嚙をなし、隅田が軍兵は、安田に蹶えて功名せんと勇み、兩陣とも勇氣倍しけり。二十六日曙に隅田押寄せ、多切豊後守眞先駆けて首を得、北條清右衛門等も討死し、遂に

打勝つて井上五郎左衛門を討取り、柵二重破りたりけるを、城中より大軍我先にと馳向ひ、大野修理治長、木村主計頭宗重、渡邊内藏助糺、竹田永翁等競ひ懸る。隅田は百挺の鐵炮を一の木戸口に立固め打ちたてさせられ共、城中よりの加勢眞黒に成つて切り懸るを、半時許支へて戦ひ、鐵炮の物主石坂新左衛門一足も引かず討たれ、終に押立てられぬ。一陣の安田は兼てよりの側に陣を押し出せし故、隅田が士卒、景勝の旗本前へ崩れ懸る。景勝三陣の士大將杉原常陸親憲、金の輪拔の立物打つたる冑を著、金の鎧の馬印を取りて、大將の仰ぞ。隅田人數兩方へ分れ候へ、と呼はりて馬印を打振りて下知しければ、隅田が兵忽ち兩方へ分れて引取りけり。杉原敵を思ふ様に近々と引受けて、前に立て並べたる鐵炮を雨の降る如く打懸けしかば、安田二町餘脇に控へたるが横間に鎗を入る。隅田も忽ち盛り返し、城兵を追崩す。隅田は初に討負けたるを口惜しく思ひて、從者五人にて敵の中に紛れ入り、首二つ取つて歸る。景勝進んで押詰めんと見えしかば、久世三四郎乗り來り、俄に城を攻めば死傷多からん。後陣の堀尾山城守忠晴と入れ替られよと仰せ候ぞ、といふ。景勝聞きも敢へず、弓取の先を争ふ時、一寸増と言ふ事あり。今朝より激しく軍して取敷きたる所を、人に譲りて退く事や候、とて少しも動かす。丹羽長重、景勝の陣に行きて見れば、景勝將机に倚りて城中をはたと睨み、物具もせずして青竹を杖につ

き、左右に軍兵三百許鎗を横たへ跪きて、紺色に日の丸の旗吡の文字の旗二本に、淺黄の扇の馬印押立て、静まりかへりて長重を見向もせず。長重も勇將なるが、後に人に語りて景勝を譽められけり。

○上杉家の士大將に御感状を賜ふ事

東照宮、志貴野にて功名せし景勝の士大將に御感状を賜はりしに、安田上總介は横鎗を入れて城兵を打破りし功大なりといへ共、直江と不和なりし故に其功上に達せず。御感状賜らざりしかば、其後人に向ひて、此度御感状を拜受し給ひて目出度候。上總一人は申し立つる人無くて、さばかりの武功空しく成りて候。然れども劣りし事は候はず。是程の事武功は申達する迄も無し。且殿の御爲に命を捨てて軍仕り候。露塵許も公方の爲にする事に候はず候へば、是より後殿をこそ大事に思ひ候へ。公方の御感状何條面目に存すべきや、と語りしとぞ。

○井伊直孝陣代の事

大坂の事起りし時井伊掃部頭直孝を召して、兄右近大夫直勝の陣代をぞ仰せ出されける。

直孝は直政の二男にて、母は松平周防守康親の從者の女なり。直孝六つに成りし時、母の方より直政に送りけるを百姓の許に置かれけるが、十三の時民家に盜の入りて騒ぐを聞き駈出て、暗夜の事なるに、盜山へ登りけるを追懸けて、高股を切つて落されけり。斯くて人數多來りて盜をば打殺しぬ。直政に申せば呼び寄せて、冬の事なるに、北に向きたる座敷の雪の入る處に跪かせて置かれけり。雪膝を降埋めどもちつとも動かす。直政悦んで呼び入れられ、犬の子を與へられけり。十四の時直政病重くて死に及ぶ時、その生先やしるかりけん、麾下に甲を添へて形見に與へらる。直孝は上州にて一萬石を賜はり、大番頭を命ぜらる。直政の長子父の跡を嗣ぐと雖も、多病にて公事勤勞し難しといへり。直孝暫く仰に任せず、先宿所に歸り、彦根の長臣を集め、仰せは云々なれども、各我下知に従ふべくば陣代を勤むべし。然らずば仰を固辭し申すべし。といへば、皆争でか下知に背くべき、と言ふを聞きて後、仰に任せて陣代仕り候べし、とぞ申されける。井伊の家に兵庫と言へる物師の年老たる有りしを、直孝呼出し、汝日比軍術に長せりと聞く。相傳ふべき事や有る、と問はるゝに、兵庫、年老候て今日を知らざる體、戰場に打出でざる事遺恨に候、とて懷より一卷の書を取り出し、大將たる人志を決斷して、狐疑無く下知有るべきか、と問ふ。直孝聞きて教

はいかにも、我思ふ處に他岐なく決斷すべし、と答へられければ、兵庫、臣が年比思慮せし處只是のみにて候。兩端を持して兵の道行はる可からず。外に申すべき言なし、とて其書を焚きけるとぞ。

元和元年の春、直政の領國直孝相嗣がるべき旨仰せ出さる。安藤帶刀をもて再三辭し申せども許されず。十八萬石を分ちて、直勝に三萬石、直孝に十五萬石賜はりぬ。其後五萬石増與へられ、台徳院殿、大猷院殿五萬石宛増賜り、中將に任せられけり。

○本多伊豆守出陣聯句の事

越前忠直大坂に師を出す時、士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり。將机に倚りて聞居りしが、勇將麾下無弱卒、といひしに、側より、高祖帳中有張良、と言ふを聞きて、門出の目出度さよ、とて打出でけり。

○東照宮御父子御陣替の事

大坂冬の軍に、東照宮は茶白山、台徳院殿は岡山に陣所を移し替へらるゝ事有り。諸將も城近

く陣を寄する時、若し騒ぐならば城より撃つて出づる事有らん。陣を整へ静り候へ、と五の字の御使番乗廻りて仰せを傳へし處に、井伊直孝陣所を替ふると、鐵炮を押並べ城中に打懸け、関の聲を擧げ、只今城に攻入らん體なりしかば、台徳院殿、直孝兄が陣代となり人そばへしけるよ、と怒らせ給ひ、本多正信を東照宮の陣に使を命ぜられけり。御前に参り未詞に出さざる處に、直孝は父の子なり。今日陣所を換ふる時、味方を競はせんとて鐵炮を打たせしよ、と仰せられければ、正信承り、斯くまで思召の同じきと申すも怪しき程に候。直孝が振舞感じ思召し、参りて其由を申せと仰せ候ひき、と申して出でにけり。

○後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事

大坂にて城兵千波を焼きける時、後藤又兵衛、備前勢必ず突くべし。若き人々待伏して功名有れ、と言ひければ、後藤が詞違はじ、とて待伏しける所に、敵つけ來らず。後藤が功名だて、と嘲りけり。後藤、積も時々は違ふ事有るものなり。備前勢附けざるは、花房助兵衛未だ存命へて居るならん、といふ。

按ずるに、此時備前は池田左衛門督領せさせ給ひたれば、花房が事を司る可きにあらず。若

しや花房をもて附給ひしか、その謂を知らず。

此時戸川肥後守達安を始として、烟紛に附けん、と言ひしに、花房聞きて、城中に後藤といふ功者あり、必ず兵を伏せ置きたるべし、と止めて附けざりけり。烟消えて見れば、花房が云ひし如く果して敵待ちかけ居たり。其後和平に及んで、肥後守が弟彌左衛門、後藤に對面し、様々の物語する時、千波の事を云ひ出し、備前勢の附けざるは如何に、と問ふに、兩人の計りし事更に違はざりければ、人々聞き傳へて稱しけり。花房助兵衛職之は秀吉の心に忤ふ事有りて、佐竹が許に流され居けるに、東照宮御心を附けられ、花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預け置きしを、後に榊原康政養ひて飛驒守といふ。助兵衛老衰、席上にも人に扶けらるゝ程なりしに、東照宮の仰にて大坂の軍にも従ひたり。乗物にて攻口に向ひ、軍急ならば吾乗物を敵に向つて棄てよ、爰を墓と思ひて出でたり、とぞ云ひける。東照宮御打廻の時、道の傍に乗物を置き、其中に躰居したりしを、戸川肥後守斯くと申せしかば、花房大事の時と思ひ、武を好む事老いぬれども志は衰へず。誠に大丈夫なり、と仰せられけり。

常山紀談 卷之二十一

○大坂にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事

大坂にて台徳院殿諸將の攻口を御打巡ありて、有馬豊氏が陣所にて井樓に上らせ給ふ時、御馬印を城中より見て、火矢大銃を打懸くる。井樓を下りさせ給へ、と申せども聞かぬ體にて座ます所に、水野日向守参りて、物見と巡見とは別に子細の候。陣々悉く御覽有る可ければ、一所にのみ座ます可き様なし。志貴野を御巡り然るべし、と申せば、則ち井樓を下りさせたまひけり。

○東照宮志貴野御巡見の事

大坂にて、東照宮志貴野を御打巡あり。上杉の攻口にかゝらせ給ふ時、鐵炮を並べ立てたるが、一同に城に向けて打掛けたり。大將巡見の時の故實なりと言へり。景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を洒ぎ、煌やかに掃除して、景勝、直江只一人打具して、平伏して御目見申したりければ、

東照宮、如何に皆骨折りたるぞ、と御訓を懸けられしに、童部争にて、骨折候事もなき日答へ申されけるとぞ。

○小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事

眞田が人を攻むる時、小田切所左衛門、

一説に、嘉兵衛といふ。後齋伊豆といひ、又道仁といふ。武者修行して名高し。長久手にて素肌すはだの働あり。松川まつがはの軍にも武功あり。加賀利常かがとしつねに仕へて大坂の軍にも従へり。

城際しろぎはに近く寄せたるが鐵炮てつぱうに當り、其玉たまを取出し、脇わきに並びたる平野彌次右衛門に見せて打笑ひ、物語する體てい平生へいせいの如し。又玉一つ額ひたいに中るを取出したれば、血流ちるゝに、胃いは大事だいじの物よ。此胃は信立公しんけんこうの許もとに有りしなり、と言ひて、少しもひるみたる色無かりしとなり。平野も小田切と相並びたる武者振を、敵味方てきみかたともに響合ひびあへり。平野が従者五右衛門といふ者矢面やおもてに立ち、鐵炮てつぱう頻りに打懸けしかば、かすり手十八まで負ひたる大剛たいがうの振舞ふるまひを、城中より高聲こうせいに稱美しょうびして、姓名を承らん、といふ。平野則ち五右衛門に吾氏わがうぢを譲り與へしかば、五右衛門大音ごいおんあけて、平野彌次右衛門が下人五右衛門といふ者、是まで附きたる褒美ほうびに、只今氏ただいまうぢを譲られて平野五右衛門と申

すなり、と名乗りけるとぞ。

○眞田が丸を攻めたる時の事

十二月四日雪深く、眞田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻寄せける事、軍令を背きたれば如何すべき、と台徳院殿仰せ有りしかば、先伺ひ奉り然るべからん、とて本多正信東照宮の御陣に参りけり。東照宮、如何に今朝は將軍にも悦びに有るべきよ。掃部頭堀際へ押詰め、敵に威を示して味方を勇め立てたるよ、と仰せ有りしかば、急ぎ返りて斯くと申す。頓て御本陣に御出あり。其道筋掃部頭陣を打過ぎさせ給へば、直孝出向ひたるに、睨みて通らせ給ひぬ。孕石備前に斯くと告ぐれば、孕石聞きも敢へず、其如く物に心得ざる大將は、此方よりも屹と睨み返すが然るべく候、といふ。程無く還らせ給ふ時直孝出向ひければ、今朝の軍賞譽の御詞有りて打過ぎさせ給ふを、孕石聞きて、合點ゆきたらんには其咎の事なり、と言ひけり。初め陣を移し替ふる時、井伊家鐵炮を打たせし事有りし時、本多正信申せし事と相同じ。一事を二事に云ひ傳へたるなるべし。

○塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事

大坂冬の陣に、塙團右衛門重之、阿波蜂須賀の陣所に夜討せんと計り、團右衛門は遠江横須賀の人なり。加藤嘉明に奉公して祿千石足輕を預りしに、關ヶ原の時嘉明塙に下知して、誘き來れ、と言はれしに、塙行きて見るに、諸將皆陣々を整へて控へ居たり。君命とは言へ共敵に後を見せん事口惜しく思ひ、種ヶ島の鐵炮を並べ散々に打立てて歸りければ、嘉明、汝は勇のみ有りて進退の理を辨へず。大將と成りて士卒を下知する事は思ひも寄らず。汝を遣したるは我過なり、と言はれければ、塙、敵弱ければ詮方無く、無理なる咎を蒙り候、とて夫より怨を含み、伊豫を出奔しける時、其家の中に、

遂不_レ留_二江南野水_一 高飛天地一閑鷗

といふ二句を大文字に書きたり。嘉明怒りて、塙が行先の奉公をかまはれしかば、塙所々にて落ぶれ、後には京の妙心寺大龍和尚の許に居て僧となり、名を鐵牛といふ。袈裟の上
に刀を横たへ鉢を招く。人或は憎み或は誹りけるが、遂に秀頼に招かれたり。
年十六歳已上五十已下の士八十人を選び出す。従者各一人と定めたり。塙と御宿越前と門口に

鎗を入れまじへて一人づつ靜に出しけるが、鎗を取るとて従者を呼び騒しければ、塙怒りて、刀にてせよ、何鎗取る事やある。首な取りそ、敵の旗を始として武具を奪ひ取れ、と下知し、嘯と押寄せたり。蜂須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を着、冑ばかり著て馳合せけるを、木村喜右衛門突伏せしに、稲田修理透間無く走り來り、木村と突合ひ、寄手駈集り防ぎ戦ふ。米田監物は池田左衛門督の陣所を押へ居しが、これも駈來り喚いて攻入りしか共、寄手追々に駈集りしかば引返す。生駒又右衛門首取りて大野主馬が許に持たせ遣り、猶進んで中村が倒れたるを見て、首を取らんとする所を、修理が子九郎兵衛十五歳なりしが、生駒を討取りたり。

此夜討の前、蜂須賀の士大將樋口内藏助、今夜夜討入るべし、といふ。若士共、如何して見定めたるや、と嘯く所に、中村右近、餅を焼きて振舞はん、とて内藏助を傍に呼入れ、何とて夜討有るべきや、と問ふ。内藏助、さればとよ。城の橋残らず焼落したるに、本町口の橋ばかり焼かざるは夜討すべき爲なり。今日狭間より外を覗き見る體見ゆる故、夜討入るべし、と答ふ。皆、さあらん、といふ。隣の陣小屋稲田修理に餅を振舞はんと云遣す。修理其儘來る。道は廻るなれば七八十間も有るべきに、疾く來られ候、といへば、修理、間の仕切の板ある所に藁を込み置きぬ。夫を外して來りたり、と答ふ。果して其夜半夜討入りたり。

右近眞先に出づる。修理押續き出でたり。右近は冑ばかり著たるに、従者物具を持ち來りて著せたりとも言へり。右近刀を振り廻し敵の鎗を切拂ふ。修理大音あけて、右近と共に働き、右近は鎗七八本にて突伏せたりといふ説もあり。右近が子若狹は阿波の留守に残し置かれしに、其宵に右近、修理に向ひて、若狹此度戰場に出でざる事を口惜く思ひ、度々來るべき旨言ひおこせしを、軍法を破る罪を恐れ呼び寄せず、と語る。修理、尤にてこそあれ。言ひ遣りて疾く來られよと告ぐべし、といふ。其處にて疾く若狹は陣屋近き邊に來りて匿れ居しかば、呼び入れて其夜手に逢ひたり。右近父は次郎左衛門とて、信長の屬從阿波守に附けられて、祿千石、士七十人添へられけるとぞ。

塙は兼て支度して、夜討の大將塙團右衛門、と書きたる木札を道々に撒せけり。和平の後今福口の南に、長二尺餘の木に塙團右衛門と書きて建てたりしを、人々怪み問ふに、塙、加藤嘉明我を憎み、探出して誅せんと言はれしと聞く故討手を待つ、といへり。塙が好有る面々數多訊ひ來りけるに、水野勝成の士黒川三郎右衛門尋來りしかば、過ぎし昔の交を思ひ出して來られしこそ悦びなれ。林半右衛門は日比親深かりき。如何にして一度の音づれもせぬにや訝しき、と言ひければ、黒川聞きて、林は池田の家に奉公して、今天滿橋の陣所に有り。斯くと尋ねて見ん、

とて歸りしが、林に云々と言へば、林、さればよ。我塙と相約せしは、假令大國を領すとも手づから鎗を提げ、思ふ儘に軍せずば男子にあらじ、と言ひつるに、塙夜討せし時、橋の上に將机に腰かけ、馬印押立て、魔を取りたりと聞く。年四十八、老たりと言ふべきにもあらず。昔相約せし詞に違ひたれば、使をも遣さざりき、といふ。黒川又塙が方に行き斯くと語りければ、塙、林が言ふこそ理なれ。されども我嘉明に、士卒を下知せんこと思も寄らずと罵られし事口惜しく、一度魔を取り軍を下知して、嘉明に知らせばやと思ひて、其夜も手づから鎗を横たへ、突いて懸度思ひしかども、さはせざりき。既に志を遂けたれば、重ねて軍の有らん時には、鎗刀の折るゝ程戦はん、と言ひしとかや。

○木村畑田屋牧野の四士武功の事

塙が夜討の時、木村喜左衛門、畑角大夫、田屋右馬助、牧野湖太四人鎗を合せしに、田屋は薙刀なり。田屋をば鎗と言ふべからず、と言ひしに、御宿越前聞きて、鎗も薙刀も柄は櫛の木にて、刃も同じ事の形の少し違ひたる故に、名は同じからねども、薙刀は短ければ、敵に近き事鎗より一等近し。鎗と言はんは何の子細の有るべき、と秀頼に申して、四人とも鎗を合せたる然状

を與へられたり。

○木村重成感状を辭せし説

大野主馬が組の士、此夜討に功名有り。木村長門守を頼みて感状を賜はらん事を申す。木村聞きて、上にもよく聞し召したれば、感状に於ては定めて下し賜はるべし。但感状を拜領して誰に披露せられんや。一本鎗の士ならば、又他國の主君に奉公せん時の眉目にすべし。大野兄弟は大坂の長臣たる身、君と存亡を共にすべき人の何の爲の感状ぞや、と言ひしに、主馬恥ぢて詞無かりけり。

○稻田九郎兵衛武功を語らざりし事

東照宮後稻田に御感状を賜ふ。太平の後御旗本の人々稻田に逢ひて、大坂夜討の時の事語られよ、と言ひしに、九郎兵衛聞きて、十五の年の事隔りて皆忘れたり、とて強ひて問へども一言も言はず。公方より賜りたる感状の詞を問へども、存寄らざる賞を得て深く藏め置き、再び見たる事無ければ、これも忘れたり、とて語らざりしとなり。

○細川三齋夜討評論の事

細川三齋病を養ふとて吉田に寓居せられける時、渡邊睡庵 勘兵衛 訪ひて物語する時、大坂にて塙が夜討せし時、蜂須賀の士に感状を賜はりたるは如何なる故にや。夜討は虚を見て討つ事古今同じ。虚有りて討たれしに、賞有りしは訝しくこそ、といふ。三齋聞きて、夏又事有るべきに、遠く慮らせ給ひて、諸將の軍兵を勧め勵まされんと、の故なるべきにや、と言はれけり。

○大坂城中軍評定の事

大坂和平破れて後、秀頼軍評定の時、第一坐に長曾我部、次に真田、其次に毛利豊前守列坐せり。秀頼、大野修理を以て、今度の合戦各所存を問はれけり。真田、先長曾我部に申され候へ、と辭し申しければ、長曾我部聞きて、真田殿ならで斯る圖を申出さるべき人有りとも思はれず。先づ申され候へ、と答へけり。真田、さらば申して見ん。去年の軍は城固く兵糧も又多かりき。日数を過ぎば必ず西國の内に心を寄する人も有るべきか。寄手の中に心替も有るべしと何れも存寄りたる處に、思の外に和平に及んで惣堀は埋められぬ。今度は守り遂ぐべき道有るべしとも

存ぜず。只打出でて軍する程ならば、君御出馬候ひて伏見の城を攻落し、即ち御上洛候て洛外をば焼拂ひ、宇治勢田の橋を引落し、所々の要害を固く守り、先洛中の政を御沙汰有るべし。其後勢によりて合戦の謀候べし。祝は申納めぬ。若御運盡きさせ御座しまし候とも、御上洛にて一度天下の主と號し奉り、洛中の御政務を執行はれんに於ては、後代の名聞是には過ぎ候まじ、と言ひしに、長曾我部を始として皆然るべしと同心しけるに、修理、秀頼公の御旗を出されん事、輕々しきに似たり、とて肯はぬ色を見て、修理が母を人質に出し置きぬ。如何なる所存にやと人々疑ひて、議決せずして止みけり。斯る所に修理が母の人質に出し置きたるも返し賜はりぬ。既に關東の人數伏見に著くと聞えしかば、秀頼又諸大將を集めて再び軍の評定に及びけるに、長曾我部また最前の如く真田に譲りければ、真田、駿河大御所の軍立常に早りたると承り候に、少しも違はず覺え候。其故は、昨今伏見へ著陣して軍兵の疲をも休めず。早や茶臼山に押寄すべきと申す沙汰は、早り過ぎたるに候はずや。伏見より大和路を押さば行程十三里なり。彌疲れ候べし。明夜は軍兵如何に存ずるとも、宵を枕として一睡せぬ事や候へべき。一夜討すべき圖に中りたると存候。左衛門佐罷向つて一舉に勝負を決すべし、と申しければ、後藤又兵衛、如何にも此謀然るべう存候。されども真田殿をもて夜討の大將とせん、萬に一

も討死有らん時人々力を失ひ候なん。今度國々の諸浪人馳集る事。偏に眞田殿一人を目當に仕候。夜討をば斯く申す又兵衛罷向ひ候はん、と言へば、眞田、兎角我罷向ふべし、といふ。後藤は有無に、後日の合戦大事なれば、眞田殿残り止られよ、と爭論して、終に一決せで止みけるとなり。

○堀直寄見切の事

大坂夏の軍に、水野日向守勝成に大和口先陣の大將を命ぜらる。堀丹後守直寄、松倉豊後守重政、大和口に向ふ。五月五日夜更けて、勝成、敵寄せ來ると見えて松明多く見ゆ。懈るべからざる由を諸將にいひ遣す。丹後守聞きて、日向守は物に慣れたると聞きしに、功者とも思はれず。寄來る敵何ぞ松明を多く點さんや。敵にはあらじ、といふ處に、日向守又使を以て、松明皆消えたり。敵にはあらじ、と告知せられたれば、丹後守、さては敵なり。何心も無くて火を點しつれたるが、功者有りて消させたるならん、と言はれしが、果して後藤又兵衛なりけり。

○山本權兵衛功名の事

松倉豊後守重政、後藤又兵衛が陣を切崩す。松倉が士山本權兵衛義安、十八歳にて鎗を合せ首を取りける隙に、鎗を敵に取られたり。其鎗標敵の中に見えしかば、今は是までなり討死せん、と云捨てて敵の中へ入り鎗を取返し、其鎗にて又敵を突伏せ、首を取りて歸りけり。

○毛利孫左衛門村山越中を詰る事

大坂冬の軍に、池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣に行きしに、村山越中、毛利に向ひ、我今朝より敵近く居て疲れたり。指物を散々鐵炮に打破られぬ、といふ。毛利、我五百人の士の中より撰んで母衣を許されたり。汝に誑れんや。汝竹把の外に出すと覺ゆ。指物の先のみ裂けたるは其證なり、といへば、村山答ふる詞無かりけり。

○井伊木村挑戰重成討死井伊家諸士功名の事

竝横田甚右衛門藤堂高虎を激す事

菴原助右衛門は、井伊家の士大將にて軍奉行なり。大坂夏の軍に、五月六日に道明寺に向ひて先陣たり。井伊家の士大將川手主水成次は、去年の冬より直孝を怨むる故有りて、討死せんと思

ひ定めたり。出でたちける日、父子最期の盃したりとかや。金の鬘口の指物にて真先に駆出づる。山口伊豆守重信、

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信、一男長次郎弘澄は御勘氣を蒙り、蟄居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出でたり。

遠山甚次郎、鷺坂彌五郎、満座七郎右衛門も、劣らじと先駆す。

一説に、内藤新十郎、佐久間藏人、山口左馬介、三百許面も振らず切懸り、井伊が先陣を押し崩す。此時井伊家の剛の者、晴なる鎧を合する士有りといへり。山口伊豆守は川崎和泉守を討取りたり。木村重成は田の中なる小高き處に控へて下知しけるを、山口目かけ畔を傳ひ寄りて、沼の有りけるに踏入れて、畑の上なる重成と鎧を合せ、山口爰にて討死しけるといへり。

木村長門守重成が一陣、鎧の錠を揃へて待ちかけたれば、川手を突伏せたり。菴原は堤の上に折敷きて居たるが、川手が倒るゝ時、腰に差したる金の磨、閃くを見、つと立上り、懸り候へ、と下知する詞の下より、八田金十郎走り出で、真先駆けたる味方の斬伏せられたる屍を踏越えて大音あけ、一番鎧と名乗り鎧を入れけるを、敵三十人餘取巻きたるに、えいゝと呼はり面も振

らず叩き合ひたるが、取巻かれ二十一ヶ所甲冑を突裂かれ、既に討死すべき所に、戸塚左大夫を始として冑の鍔を傾け、黒煙を踏みたてて、井伊が軍兵一同に嘯と押懸り、木村が陣を切崩す。菴原は十文字の鎧を横たへ、進んで木村を目にかけて立向へり。木村、菴原を二鎧まで突きたりしに、菴原鎧のしほ首を握り、珠数を手に懸けたるが、念佛を唱へて野猪の暴れたるが如く、木村が鎧の下に走り入りて突伏せたり。安藤長三郎駆來りて、其首給はらんや、といふ。菴原聞きて、大坂落城日有らじ。敵の大將の首取る事易からじ。與ゆるぞ、といへば、安藤、木村が首を取り、菴原、母衣かけたる武者を討取りて、其首に母衣絹添へて奉る事軍法なり。大御所の實檢に備へんに、母衣絹に包まれ候へ、とて母衣絹を安藤に與へしかば、菴原が従者母衣の出しにしたる白熊金のねち竹は、菴原が許に留めけり。

一説に、陣所に馬盗有るべしと兼て警めしに、安藤長三郎、不敵者にて用心もせず馬を盗まれ、翌日の軍に、井伊家の軍兵木村と戦ひける時後れたり。敵敗北に及びて長三郎走り附きたるを、助右衛門見て、あれに腰掛けたるは能敵なり。討取れ、といへば、長三郎、動かすして死人の如くなる者討つて功名にあらず、と答ふ。菴原強ふれば長三郎歩寄り、詞をかくれども、只首取れ、とのみ言ひて立上らず。長三郎則ち突伏せて首を取る。是木村重成な

り。長三郎を賞して五百石與へらる。此軍に千石の賞を與へらるる者有りければ、長三郎憤りて立去りけり。將の首を取りたれども、其法を知らざる故賞少し、と直孝語られしとかや。長三郎は安藤帶刀の從子なり。又後井伊の家に歸り仕へて、千石の祿を與へられけり。川手、滿座、山口は軍の場に死し、遠山は、敵の首を取りて菴原に見する、とて立ちながら死す。驚坂は小溝の中に倒れしが、口の中に暖り有りて、百姓の家に昇入れたりしが、息出でて助かりぬ。皆敵に逢ふ事早かりしかども、軍奉行の菴原が下知無き以前故に拔駈とし、八田を一番鎗に定められ、東照宮御感狀を賜はりけり。

金十郎は一番鎗を合するのみならず。山口左馬介、山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取りたりといへり。御感狀に黄金御馬を添へて下さるともいへり。木村が首を御前に出すに、髮に燻きしめし奇南香の薰せしかば御感あり。木村が冑は四方白にて鉄形の立物打つたり。

安藤を伏見に召し、青江の御脇差を賜はる。又一説に、台徳院殿、長三郎に黄金二十枚、時服三つ賜はるといへり。菴原が子の主税助、北ぐる敵を追駈けて組討しけるに、助右衛門馳寄りて、如何に主税心靜にせ

よ。爰にて見物する、と言ひけり。主税是に力を得、脇差を抜いて刺通し、弱る處に従者走來り、遂に其首を取る。横地修理、西郷伊豫是を見て、東照宮に主税が幼年の武功を稱し申しけり。後に人々、子の敵に組みたるに援けざりしは如何に、と問ひけるに、菴原、誰も子は可愛きものにて候、とのみ答へけり。

直孝、木村と軍する時中に堤あり。又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に、久貝因幡守、高安筑後使をもて、敵と味方の中に堤の候。是を取らば味方勝ち申すべし。疾く御旗本を進め給ふべし、と申す。東照宮怒らせ給ひ、之程の事思慮無くて、我先陣の大將勤まるべきや。敵堤を取らば、捨てて敵に與へてこそ勝つべけれ。高虎とも覺えぬもの哉、と仰せ有りし處に、小栗又市馳來り、直孝只今敵に懸り、堤の候に、此堤を取らば勝たんと勇み候、と申す。東照宮、さぞあらん。必定勝なり、と仰せられけり。又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ。渡邊勘兵衛敵と競合ひし時、高虎馬を御旗本に乗來り、御旗を寄せられよ、と申しも敢ぬに、横田甚右衛門馬上より大音あけ、御旗を寄せられよと申すは何者ぞ。あれ追散し候へ、と罵りければ、高虎馬を乗歸る。是も激勵の術なるべし。東照宮島山入庵を召して、關東の武者共軍に慣れて、物いふ詞の面白き、と仰せ有りしかば、入庵、只今の一言横田ならでは、

と感^{かん}じ申しけり。一説に、東照宮の御旗本へ藤堂高虎乗來りて、敵の大軍押出し候、と申すを、横田甚右衛門聞きも敢^{あへ}ず、何の御下知を待つことやある。疾く切崩して討取り候へ、と云ふ。東照宮、無禮なり、と怒らせ給ひ、高虎には能く見切つて、味方に手負討死無き様に計り候へ、と仰せらるゝを、甚右衛門大音あけて、敵を殺すに味方に手負死人無き事やある。疾く切崩され候へ、と罵る。東照宮、横田推參なり、と以ての外に怒らせ給ふ。高虎は我陣に乗歸る。和泉は見えぬか、と仰せの後、横田を御側近く召されければ、人々如何にと手に汗を握る處に、横田が耳に御口を寄せられ囁かせ給ひてけり。其後、如何に仰せけるぞ、と横田に問ふ人有りしに、和泉を汝再三罵りたるは一段然るべけれども、一戦を遂げよとは、遠き御慮、有りて仰せられ難きとの事にてありし由、語りけるとかや。

○脇五右衛門某氏三彌武功の事

五月六日井伊家の十脇五右衛門、今日の合戦は後より段々に押詰め來れば、大方の事にては功名遂げ難し。若き人々力の限り働かれ候へ、といふ處に、直孝の近習の士三彌といふ若年の士、首二つ取りて脇に見する。脇もまた二つ取りけり。翌七日三彌又首二つ取りて脇に見すれば、脇

もまた二つ取りたり。後に老功の武名の聞え有り。人々集りたる處にて、三彌何れも老功の人とて崇め、其身も泰なる體を振舞はるゝ事ぞかし。大坂の軍に事變りたる事も候はず。老功とて崇め候は何の故ぞや、といふを、脇聞きて、此度汝の功名の如くなる事度重りたる者ぞ、といへば、三彌、さては子細もなし。吾功名の如きはいと易き事なり、と言ひけるとぞ。

○増田兵大夫討死の事

増田兵大夫は長盛の子なり。大坂冬の軍に城中弱ると聞けば涙を流し、寄手の攻めあぐみたる、と人言へば大に喜びけるを、東照宮聞し召し、誠に長盛が子なりけり。豊臣家の恩を忘れざる志尤なり、と感^{かん}じ仰せられ、夏の軍に御赦を蒙り、城中に入り、秀頼より賜りたる赤地の錦の羽織を著、若江の軍敗軍の中に獨踏止り、澤田但馬が從者と引組んで組敷きたる處に、藤堂高虎の士母衣の者磯野平三郎走り寄りて討取り、其首を得たれども名を知らず。刀を分捕したるが、秀吉より長盛に給はりしもの故、兵大夫とは知られしとぞ。

○青木長屋生捕らるゝ事並井伊家赤備の來由

木村が一陣敗北しける中に、青木七左衛門黒母衣かけ、長屋平大夫は白母衣かけて、直孝の兵の中に紛入りしに、井伊家の赤色の物具に違ひたれば搦め取り、東照宮の御前に引参る。長屋は今福にて一番鎗を合せ、青木は今日西郡にて一番首を取りたり、と名乗り申す。其體天晴剛の者よと見えしかば、二人共救けられ、美濃にて各五百石の祿賜はりけり。

井伊家の赤き物具は、直政の時より始れり。甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵、皆一色に赤かりしを、東照宮御覽じて好ませ給ひ、直政に仰せられて、甲冑を始め旗指物鞍轡にいたるまで、皆一色に赤色なり。夫より後も斯くの如くなりし故、井伊の家は新に奉公する士有れば、武具奉行軍令を見せて、物具皆新に赤色にして、百石に二十兩具足櫃に納め、奉行の士受取りて城中の庫に入置き、其價は祿の内より返しけり。此故に井伊家の武備缺くる事なし。若去つて他國に行く士有れば、奉行の士武具を返し與へけるとなり。井伊家の軍令とて、赤色の武具の事録せる書も、今世に傳りけり。

○藤堂家合戦渡邊勘兵衛功名の事並渡邊始末の事

藤堂高虎の士大將渡邊勘兵衛了は

了は若き時阿閉淡路守に奉公し、十七歳の時一日に首六つ取りたり。阿閉の家にて剛の者と言はるゝ士、十幅一丈の鶴の丸を繪に書きたる母衣を懸くる者六七人有りしに、了に此母衣を許されけり。後中村一氏に奉公せしが、小田原の北條を攻めらるゝ時、山中の城を俄に攻落すべき様を見て、一氏を進めし頓て打破り、成合平左衛門に一氏の馬印を本丸の隅矢倉に押立てさせ、中村式部少輔一番乗と呼はりけり。秀吉錦の羽織を一氏に與へられしかば、我今日の功名は汝故なり、とて羽織を了に與へられしに、固く辭しければ、羽織の片袖を與へん、と言はれしを、夫をも辭しければ、蓮生院鹿毛といふ馬を了に與へらる。其後増田長盛に奉公せしが、關ヶ原の時は大和の郡山の城に在り。關ヶ原の軍破れて、郡山の城を受取らんと筒井伊賀守打向ふ。城代橋與兵衛、鹽屋徳順等了と共に城を守るに、了は三の廓を持ちとす。大將なれば、盜賊商家に入りて女童を惱す。了五百許の兵を打連れ打巡りて、盜を切殺し追散す。或夜盜賊城外の町家に火をかけんとせしを、了出て剩さず討取りしかば、これより盜來らず。敵押寄すると聞えしかば、城外の商家を焼拂はん、といふ。了、自燒は時あり、早まりて焼かば商賈騒ぎて狼狽へんも不便なり、とて止めけり。城兵雜人を合せて三千餘なりしに、士三十人、下部八百許駈落しけれども、了に従ひたる者

は一人も逃出でず。又城中の士百餘人、金銀を與へずば出奔せん、といふ。了大に怒りて、城中の藏に有る金銀は皆殿の物なり。殿の仰無くて争か出すべき。且此城を墓所と思ひ定めたる身の、金銀何にかはせん。出奔せんとの用意ならん。錢一文も分つべからず。斯かる者に兵糧米を費さんより疾く出奔せよ、と罵りて、三の廓より妻子を本丸へ入れければ、横卷儀右衛門も續いて然したり。藤堂高虎、本多正純、郡山に押寄せて、此時長盛は高野にて殺されしなど言振らす。大坂より馳來る士卒を合せて九千餘人有りしを、了下知して持口を配り、日夜打巡りて怠を戒む。凡將無くて楯籠るものは、各疑ひて心々に成る事常なるに、了が下知より鑿りて城に將有るが如し。長盛、高田遠江、山川半兵衛に書簡を持たせ、城に庫の物を添へて目錄を記し、藤堂、本多に渡し候へ、と命ぜられしかば、さらば、とて大手搦手の門の鑰を、高田寄手の士に與ふ。かれば奉行をもて門を守らせ、木丸までも入らん、と騒がしかりければ、了使をたて、城中より守るべき門々を、寄手より人を附けられ候事は僻事にて候、といはせ、了下知して手暴く門の鑰を奪ひ返してけり。城を渡せし時、外廓の柳町より奈良の方大安寺を指して靜に兵を繰出す。能く了が法令の嚴正なりしに依りて、一人も騒ぎし者無かりけるとぞ。了は跡に残り、鑰を取返しける時の寄手

の人々に向ひ、前の仕業無禮に似て候へども、武士の義理と申す物に候。若城中の庫の物一つも失ひなん時は、増出が士共は盜をして出奔したりと申されん事口惜く候て計ひき、と言ひけれども、答ふる人無ければ、鑰を了投出し返して大門を啓かせ、殿して城を出で大安寺に至り、夫より皆人々分れ去りけり。長盛高野にて了が下知せし始終の有様を聞き、九千の軍兵馬も凡八百匹も有らんに、能く下知したり、とて深く悦び、感狀を了に與へしとなり。了藤堂家に仕へて祿二萬石、子の長兵衛にも三千石與へられしとぞ。

新に奉公しけれども世に譽高き者なれば、高虎寵せらるゝ事大方ならず。舊臣共大に嫉み恨み合へり。大坂五月六日の軍に了は先陣の中の手なり。六日の朝道明寺に軍を進めんや如何に、と評定未だ決せず。了、矢尾平野は兵を下知すべき地利にあらず候。見て來らん、とて猩々緋の羽織を著鹿毛なる馬に乗り、千塚より五六町も打出でけるに、朝の物見堀與右衛門に逢ひ、如何に、と問へば、後藤又兵衛とおほしくて軍を出し、早水野日向守と鐵炮を打合ひ候、といふ。了聞きて、堀に士一人添へて返し、疾く旗を寄せられよ、と云ひ遣し、頓て片山まで乗行き西の方を見れば、八尾より若江まで大坂の軍押續き、しぐらうで東方の先陣に目をかけ、馬の鼻を揃へて進み來る。了さてこそと思ひ馬を引返し、道明寺を指して進む味方を押止むる。藤堂仁

右衛門、何故ぞ、と問ふ。了、あれを見られよ。手に取る程に近き敵を打捨てて道明寺に行く様
 や有る、といへば、仁右衛門も、尤なり、と同心しけり。高虎、何とて進む味方を押しむるや、と
 母衣の者をもて下知せらる。了頓て高虎の前に参り云々なりと申せば、高虎、如何せばや、と
 思慮の氣色なり。了、何の手段の候べき。懸り来る敵に辭退する事や候。相懸にして打破るの
 外道無し、といへば、さらば仁右衛門呼べ、とて下知せらる。了聞きて、此處泥にて足入なり。陣
 を備ふべき地無し。敵間未だ四十町もや候らん。横堤は是より十町許も有るべし。横堤まで細
 噺の道四筋見え候。南に向ひたる味方を西向に押直し、横堤まで進んで其處にて陣を整へ一軍
 せん。北二筋の道をば下知し給へ。南二筋の道を押行く味方は勘兵衛下知して、横堤にて押し
 め列を正し、南北一つに合せて候はんには、必定味方の勝なるべし、と云ひて、馬印は四五町
 ばかり後に控へさせ、細道を乘行きて、藤堂仁右衛門、桑名彌次兵衛等に斯くといへば、北より
 進む藤堂新七、同女番等一騎駈に馬を乗出し、我先にと西郡萱根を指して進み行くを、了見て、さ
 らば南の味方を押しめても何の用にか立たん。疾く懸られ候へ、と云ひ捨てて、了は山土阿野
 村に向ひけり。高虎の士大將、我もくと八尾道を西に地藏堂を見て駈行きしは、了、去年故有
 りて高虎に暇給はり候へと云ひし事の有りしに、今朝より殿の前に出て、勝敗の理己一人して

計りし憎さよ、渡邊に優る武功を立てん、とて了が詞を耳にも聞入れざるなり。長曾我部盛親
 は矢尾の堤森ある處に進む所に、朝霧の間切より物色は定かならねども、南の方より紺地の白
 きもちの紋附きたる旗差させて敵懸り来れば、堤の上狭ければ、旗を後の卑き所へ下して立つる
 を、敵は北ぐる、といひて仁右衛門先駈して馬に鎧を合して、駈行きしかば、桑名乗續きて、一
 陣の下知せられ候身に一騎駈は僻事なり、といへば、仁右衛門振顧りて、渡邊が己一人武勇に
 誇るが口惜さに、討死までよ、というて馬を乗放し、鎧を横たへ大音あけて懸りしを、盛親が
 兵鎗の鉈を揃へ堤に折敷きたるが、盛親、間遠なるに一人も立上るべからずと下知し、近々とな
 りける時、一同に立上り、えいくと聲をかけ鎧を並べて敵立てければ、仁右衛門其處にて討死
 し續いて懸りける。藤堂が軍兵働と崩れ、胃の緒を締めたる士六十三騎歩卒三百餘人討たれて、
 一支も無く敗北しけり。了は山土にて向ふ敵を追崩し、南を見れば先陣敗れて、旗を捨て我先に
 と逃ぐる處に横様に駈向ひ、盛親が亂足を追返し、仁右衛門等が討たれし地を踏敷きたり。盛
 親は矢尾一町ばかりの西に橋を後に當てて控へ居たり。了愈勇み切つて懸らばやとは思へど
 も、先に首取りたる者共皆旗本に行きて、了が左右三十騎許に過ぎず。斯る處に母衣の士山岡兵部
 已下七八騎馳來りければ、了頓て押寄せて盛親が陣に切つて懸る。山岡兵部、矢倉長藏二人は

南の方に懸離れ、思ふ程戦ひて晴なる討死をしたりけり。了が兵少ければ少し引退きて、畑の高く卑き地を便に兵を集め、盛親と互に間近く睨み合ひて控へ居たる處に、高虎使をもて、何故に引退かざるや、と七度まで下知せらる。了聞きも入れず。此一陣にて強敵を切崩し候。旗をだに押詰められれば、北ぐる敵を追つたて大利なるべし、と答ふ。高虎また使を立て、今朝死すべき所を遁れ、面目無くて退かざるやとて引返せ、と下知せらる。了聞きも敢ず、斯る廣き軍場にては、勝つも負くるも所々にて様々に分れ候。味方の物主軍の道を知らず。下知する業も無く、疎駆して敵に切崩され、多くの味方を捨殺し旗をも棄てて敗れ候を、殿には忠と思召候哉。心得難し。斯く申す渡邊は、今朝より敵に比ぶれば五分一又は三分一の軍兵にて毎度打勝ち、八尾にて味方を扶け横合に敵を破り候。渡邊無くば味方は泥に追入れられ、一人も残らず皆打たれ候べし。淺間しき味方の物主の有様に候。盛親僅の兵にて控へ居るを討漏さば、殿の弓箭の恥なるべし。疾く旗本を寄せ給へ。盛親を容易う討取り申さん、とて彌退く色は無かりし處に、直孝軍に打勝ち、赤旗押立て勇み進んで押來りしかば、盛親が旗本色めきけるを、了見て、時こそよけれ、と嘯と切つて懸り追立てたり。久寶寺より城兵も足を亂して敗北するを、剩さじと鐵炮を打懸けて追詰むれば、盛親が旗竿も悉く打折られたり。了は三百餘人の首を取り、平野まで進

んで取固めければ、道明寺口より敗北して城中に引入る。敵道を塞がれ詮方無くためらひ居しかば、了大に悦び、高虎の許に使を立て、敗軍の敵數萬の歸路を立切りて候。軍兵をだに賜はらば、疲れ果て氣おくれしたる敵を殘らず打破り、大坂の城をば藤堂一手の武勇にて攻落し申すべし。疾軍勢を寄せ給へ。平野を固く守り、敵を打破らん事掌の中にあり、と云ひけれども、高虎更に用ひず。使を立て、何とて引返さざるや、と怒らるゝのみなりしかば、了も力なく平野に火をかけ軍を返しけり。これも平野の煙にて城中に引入る敵を妨ぐるの術なり。此時高虎兵を進めば、眞田も毛利も城中に歸り入る事を得まじきに、と世に言ひしとぞ。直孝、高虎の陣所に行かれしかば高虎對面し、今日先陣におくれたる者の候て、同姓にて候物主數多討死し口惜く候、と語られければ、直孝、我敵に勝ちて北ぐるを追ひ候時、筵の差物差しして軍兵を下知せし士大將の候ひしに、強敵を切靡け軍兵を下知せし有様、天晴大剛の物主にて候。其人は如何に、と問はれしに、高虎物も言はず。其時了胃を脱ぎて進み出で、筵の指物差し候男は此勘兵衛にて候。天の冥加にて、今日の武功を井伊殿見届け給はり候、と大音に申せば、高虎愈怒り憎まれし程に、了終に藤堂の家を去つて京都に赴き睡庵と號し、寛永年中まで存命居たりしとなり。

○横田佐久間井伊家の陣へ御使に行く事

大坂の軍五月六日に井伊直孝打勝ちたりしかば、東照宮より横田甚右衛門、台徳院殿よりは佐久間將監を使に命ぜられ、直孝が陣所に行く。佐久間先に歸りて、直孝、今日の軍に打勝候へ共、川手主水を始めとして討死多く、明日の先陣如何候らん、と申す。東照宮聞召し、聞かぬ體にて御座します所に、横田歸りて、直孝大利を得て、明日も勝ちたる勢に乗りて、残る敵を剩さず討取るべしと勇み申す。と申せば、東照宮、さぞあらん、と悦ばせ給ふ時、横田進み寄り、爰に一つ思慮あるべく候。直孝が軍兵過半手負ひ死人も多し。如何に心早りて候とも、明日の先陣は繰換へられ候へ。直孝畏り候はずとも強ひて仰出され候へ、と申せば、東照宮、我も左思ひつる事よ、とて加賀利常、本多忠朝を先陣に命ぜられけり。陣中の使者は心得有るべき事にこそ。

○片桐丹後守一番首を取る事

片桐丹後守は越前忠直に仕へしが、大坂夏の陣に勘氣を蒙る事の有りしかば、先陣に忍行きて

控へ居たるを、本多伊豆守見て、片桐は必ず討死すべし。あはれ赦され候へかし、と申せば、忠直、片桐呼べ、とて使番須田長左衛門先陣に乘行き斯くと言へば、片桐、忠直の前に参り、胃を脱ぎ涙を流し謹んで居たり。忠直其時、汝が日比の罪許し候ぞ、と詞をかけらる。片桐、今の時に至り斯る事こそ心得ねと思ふ色顯れ、忠直の方を屹と見て馬引寄せ打乗り、先陣に向ひて、軍始まると胃首を得たり。越前の一番首なり。

常山紀談 卷之二十二

○松平助十郎先登戰死の事

大坂五月七日の軍に、水野隼人正が組の松平助十郎秀信、今日の一番は他人に先を駆さすべからず、といふ。水野丹宮、口廣き事な言ひそ。誰か汝に劣らん、と争ふ。助十郎、各よく聞かれよ。今度朋輩に一番の馬は吾馬なり。上田吉之丞が弟子にて、馭は許印可まで極めたれば、誰か先を争ふ者の有るべき、といひしが、果して一番に乗り出し、敵に向ひて討死したりけり。

○安藤彦四郎討死の事

安藤彦四郎重能は帯刀の子なり。成瀬豊後守が組にて台徳院殿の御小姓組なりしに、武士長生して諸方の事に逢ひ武功多く、死なずして世を送るは、さまで勝れたる勇士とは云ひ難し。只潔く討死せんこそ本意なれ、と常に言ひけるが、大坂五月七日に、一番首といはば彦四郎、一番に討死といはば彦四郎と思ふべし、といひて、しなひの指物を巻きて井伊直孝の先陣に行き、

菴原助右衛門に向ひて、是非懸れ、と言へども、助右衛門同心せず。待ち受けたる箭先に如何にして懸るべき、といふ。彦四郎、其箭先へ懸りてこそ勇士とはいふべけれ、と言へども同心せず。彦四郎、さらば懸りて見せん、といふを押止むれども少しもためらはず。敵の中に駆入りて討死しけり。帯刀馬上に塵を取り軍兵を下知しける時、従者彦四郎が屍を引退けんとするを見て、犬に喰せよ、というて乗廻る。北ぐる味方を立直せしが、軍終りて後犬に愁傷の色現はれしとぞ。

○本多忠朝討死の事

大坂冬の軍に、東照宮、本田出雲守忠朝に、京口に行きて川水を見來れ、と仰せらる。忠朝歸りて、水の勢甚だ強く候、と申す。又井伊直孝に見て來れ、と仰せられしに、直孝歸りて、水淺く渡り易けに候、と申すを聞召し、出雲は父に劣れり。川水は女童も知る所なり。出雲に見せしむるに及ばず。出雲を遣りしは心有りての事なるを知らざりしよ、と仰せられけり。物見の詞は子細の有るべきに、心附かざりしにや。是に依りて忠朝、口惜しき仰をも受けぬるかなと思ひて、夏の軍に必死を期して、我と同じ枕に死なんと思ふ者は起請文を書け、と言はれしに、加

藤忠左衛門、大屋作左衛門、藤井次左衛門、臼杵七兵衛等起請文を書きたりけり。小野勘解由は、士の軍に出でんに命惜む人やある。とて嘲笑ひて打立ちけり。斯る所に五月七日天王寺口の先陣を忠朝に仰せ出されければ、忠朝大に悦ばる。時、小野進出で、明日一の幸にて討死、二には一番鎗、三には高野に入らん、といふ。忠朝打領きて居られけり。茶白山の下へ進んで毛利豊前守勝永に向ふ時、小野、斯る足輕の並居様は忽ち破るべし、といふ。忠朝耳にも聞入れず。小野、口際の黄なる殿の何を知り給ふ、と嘲る時、加藤も進み出で、足輕の並居候有様は軍には見ず。只大多喜にて鹿狩にはよからん。彼に見ゆるは忠左衛門が足輕なり。誠に戦に向ふ有様なり、と打笑ふ。忠朝、憎き詞かな、とて眉尖刀を提けて懸られしかば、小野、只今討死して殿に見せ申さん、と言ふ儘に眞幕に馳行く。加藤は眉尖刀の罅にて敲かれて是も乗出す。忠朝は百里と名附けたる馬に乗り、一文字に進む所に、小野敵に取巻かれ鎗玉に上りて討たるを見、本多出雲守ぞ。續け者共、と大音あけて呼はりけるを、毛利に附けられし秀頼の物頭雨森傳左衛門以下七八人、透間も無く懸りければ、忠朝持鎗續かざりしによりて、數鎗を押し突伏せ突伏せ戦はれしを、紺の羽織著たる足輕二間はかりに詰寄せ鐵炮にて打つ。忠朝の胸に中りしかども、忠朝ちつともひるます馬より飛下り、其敵を只一太刀に切殺す。口取に兼て持たせら

れし鐵の筋金入りたる鼻ねちを左に持ち右に刀を提げ、敵七八人切伏せ、多兵に取巻かれ散々に戦ひ、痛手二十餘ヶ所負ひて討死せられしかば、大屋は其屍の上に取り附きて切死にしたり。藤井、臼杵を始として皆同じく討死す。忠朝の首は雨森取りたり。後家に仕へて六千石與へらる。

○孕石備前廣瀬左馬助討死の事

大坂夏の軍に、東照宮は伏見に御座しまし、井伊直孝は、宇治の北六地藏より軍を出して大坂に打向ふ。

東照宮は伏見船入の矢倉より、行軍の有様を見物して御座しませしとなり。宇治より伏見にかゝる道にて旗を張立てず。直孝、般若野宮内を便にして旗奉行孕石備前、廣瀬左馬助に、何故ぞ、と問ふ。二人承り、旗の事は此二人に任せられ候へ、と答へて押通る。直孝怒りて又使を立て、是非張立てよ、と下知すれども聞人れず、伏見を過ぎて旗を張立てたり。此は宇治より伏見に行く道、東照宮の御座します所に向ひ奉るが故に、斯くはしたりしなり。五月七日、直孝御旗本の先陣として、天王寺の東北にて大坂七組の敵に向ひて相戦ひ、軍危かりしかば孕石廣瀬に向ひて、我年七十五、又恥を雪ぐべき時なし。討死せんと思ふなり。疾く引退れ

よ、と言へ共、廣瀬、士の恥は同じ事よ。孕石を捨殺し逃げたりと言はれん事こそ口惜けれ、とて二人共に旗竿に手をかけ討死しけり。廣瀬をば青木が組の稻葉伊織討取りけり。廣瀬は美濃が子、孕石は主水が子にて、共に甲斐の武田の家の士なり。

○廣田圖書が事

廣田圖書は水野勝成の士にて、大坂五月六日の軍に功有りしかば、明日は殿の馬前にて相働かん、といへば、勝成悦ばる。明石掃部が陣を打破る時、廣田鐵炮に玉薬を込み、一放と思ひて打つたるに、立消しければ、鐵炮を投捨てて鎗を取り、築瀬又右衛門といふ敵に渡合せ突伏せられしを、勝成走寄り、築瀬を討取られけり。後に鐵炮を見しに、火蓋を切らで有りしとなり。廣田人に語りて、事の急なるに臨みては、思ひの外に慌つるものなり。我既に先駆殿數多して自負せしかば、殿の前にて鎗脇を打たんと思設けしに、斯く狼狽へぬ。天晴すべきと工みたる事の斯くの如くなれば、まして不意の事をや。能く思慮すべき事ぞ、と語りけり。

○毛利勝永軍配相違の事

大坂五月七日、毛利豊前守勝永は軍を押し出せしが、住吉の松蔭に白旗見ゆれば、此駿河の大御所なるべし。一文字に切つて懸り、討死せんと志して兵を進むる所に、白旗見えざりしかば、長井傳兵衛、水野伊右衛門に見て來れとて遣りけるが、暫く有りて乘歸り、住吉に白旗は見えず、と言ひけり。此は東照宮御旗を俄に巻かせ給ひ、茶臼山の後に控へさせ給ひける故とかや。勝永は小倉の城主豊岐守が子なり。勝永が子を式部といふ。父子共に秀頼に従ひ、齋田矢倉に籠りて自害せり。

○伊藤武藏守馬驗を拾ふ事

同じ日秀頼は樓門に打出でて、瀝金を緋威にしたる物具著て、太閤の時より傳へられし金の切さき二十本、茜染の吹貫十本、玳瑁の千本鎗を並べたて、太平樂と名附けたる七寸有りし黒の馬引立てられし所に、先陣皆敗北しけると聞えければ、今は是迄なり、敵の中に駈入り討死せん、と進まれしを、速水時之、今打つて出でたりとも勝利候まじ。疾く本丸に人らせ給へ、とて引返す。斯りければ士卒散々に成りて馬標を棄てたりしに、伊藤武藏守後れて歸り入りしに、是を見て、朝鮮迄聞えし豊臣家の馬標を敵拾ひなば、大坂城中に男子は一人も無きと日本國中の

物笑とならん、と言ふ儘に、手づから振りかたけて、城中千疊敷に歸り入りけり。

○郡主馬が事

郡主馬良利は秀吉の臣なり。石田権威を恣にせんと計り、人を馴けん爲に公用に金銀を出す事あれば、必ず其半を分けて密に私に與ふ。郡にも斯る事有りしに、争ふならば禍に逢はんと思ひ、辱き由石田に謝して、其金は大坂の庫に納め置きけり。夫より病と稱して出仕もせず。後に旗奉行たりしかば、大坂落城の日千疊敷に歸りて床の上に旗を置き、去年の冬藤堂高虎天王寺に押入りし時、速水時之と謀を合せ夜討すべきを、寵臣に妨げられぬ。住吉平野の陣所に忍を入れ、火を懸けて不意に一軍せんと言ひし謀も用ひられず。運盡きぬると思へば口惜し、とて從者に、此小脇差は黒田長政我に贈られし時、用ふる事有りて功を立てんと言ひし詞ある故なり。よく長政に言ひて返し候へ、と遺言し、其子兵藏と共に自害す。行年七十一歳とかや。秀吉の時より黄母衣許されたり。

○野村越中才覺の事

大坂落城の日、興國公隆朝臣は城の北に陣し給ふ。兼て、下知無き前に軍を進むべからず、と仰せ出されしかば、陣を整へて御下知を待つ所に、寄手門々に押寄せしと聞えしかば、野村越中に、見て來れ、と仰せらる。野村馬を早めて行く所に、城より煙燃上りければ、寄手攻入りたりと思ひ、先陣伊木長門、池田出羽が陣に馬を駈寄せ、疾く川を渡して攻入り候へ。仰ぞ、と言ひければ、先陣即ち攻め入りて、首六百餘を得しは野村が功なりけり。

○長曾我部盛親生捕らるる事

長曾我部盛親は大坂の城落ちしかば、落行きて葭の中に潛まり隠れ居て、其臣中内惣右衛門飯を持ち行きけるを、蜂須賀の士長崎三郎左衛門が足輕、もと土佐の人にて中内を見識り居しかば、斯くと告げて遂に二人共搦められけり。盛親捕れとなりて後藤堂高虎と軍せしに、井伊の赤旗に妨げられ、高虎が首を見で口惜き、とて齒嚙しけるとなり。此は高虎使を直孝の許に遣りて援を乞はれしに、直孝も木村を切崩し、追討になりて士卒散々なれば、詮方無く、戦は一手切、と答ふ。高虎の使木俣清右衛門に逢ひてけり。木俣、彼に見ゆるは伊達政宗にや。疾く行き援を乞はれよ、と言ひしかば、使道遠き所に狼狽へ行く武士や候。歸りて軍に會はん、とて

馬を引返す。木俣、さらば、とて赤旗を進めけり。

一説に、盛親を生捕り、伏見に参り御立關に到る。井伊直孝、安藤對馬守、土井大炊頭列座し、軍の事を問はるゝに、盛親申しけるは、六日の晩必死の軍すべしと存じ極めたるに、赤旗の横合に來りて候を見て、疲れたりし軍兵故打負けて候、といふ。格子の内に台徳院殿の御前に侍臣二三人立ちて、其陰より盛親を御覽有りしに、盛親も是を察しけるにや、其方を吃と見て居たりけるとぞ。中内は主君の此期に及ぶまで附従ひたりし忠節を感ぜられ、蜂須賀に賜はり御許されを蒙りけり。一説に、長曾我部を生捕りて繩二筋附けて白洲に引据ゑたり。台徳院殿御側の士を以て、數千の大將たる身自害をすべき事なるに、さは無かりしは如何ぞ、と御尋ねあり。盛親臆れたる色も無く、朝の軍に打勝ちたれども後の軍に赤備の軍兵に打合ひて、味方數多討死し敗北せし事は非なき次第に候、と申す。又討死するか自害するか、二つの志も無かりし事返すぐも不審なり、と再び御尋ね出されしに、長曾我部承り、盛親も一方の大將たる身に候へば、葉武者と同じく輕々しく討死すべきに候はず、と申す。再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外に顯れたり。さて其後引出して警固し居たりしに、飯をうづ高く盛りて長曾我部に据ゆる。盛親警固の士の中温順しやかに見ゆ

る人を呼びて、昔より名將も搦め捕らるゝ事例多ければ、露ばかりも恥と思ふ事なし。然るに斯る賤しき食物を据ゆる禮儀やある。疾うく首を刎ねてこそよけれ、と云ひける時、井伊掃部頭側を打過ぎ之を見て、法も無き振舞どもかな、と大に怒り、御厨に下知して潔く料理を調へさせ、繩を解かせ座敷に長曾我部を招き入れ、いと懇に勞れを休め給へ、と言はれしかば、長曾我部、是こそ禮儀を知りたる武將の道よ、と悦びて、始終少しもひるめる氣色は無かりけるとぞ。

○大野道軒生捕らるゝ事

大坂落城の後大野道軒或は生捕り、二條の城の駒寄に括り附けたるを、立寄りて見る者夥し。皆いふ、道軒は聞きしよりも大男なり、といふを聞きて、さすがに士たる者とも覺えぬ詞かな。兼て我を斯く縛めし如く、汝達を一々搦めんと思ひしに、運命盡きぬれば口惜き事なり、と少しもひるめる色無かりしとかや。

○渡邊内藏助が子城を落ちし事

大坂落城の時、渡邊内藏助は矢倉にて二男三男を刺殺し、乳母に、嫡男を連れ来るべし、と言ひけるに、乳母、心得候。白き帷子を著せ參せ申さん、といひて其場を遁れ、澁帯に包み繩をもて堀下にさけ落し、其身も遁れ得て彼子を市中の廁に隠し置き、日數経て逃去らんとせしを、關東の軍兵に捕へられぬ。色々責問ひたれども、渡邊に從へる士水谷清兵衛といふ者の妻にて、我實子に紛れ無し、とて其餘の事を言はず。彼子も僅六歳なりしかども、如何に責められけれども、内藏助が子たる事をいはず。さらば金二兩出さば助くべし、と言ひしかば、乳母則舊郷渡邊に到り百姓に頼みしに、さすが舊好を思ひ、且は乳母の忠義を感じ金二兩授けしかば、則ち彼小兒を乞ひ得て京都に赴き、南禪寺の喝食となしぬ。十八歳に及ぶ時、細川越中守忠興、一柳土佐守末榮など縁の方より還俗させられしかば、程經て文照院殿甲府に御座しませし時、此事を嘆きて遂に甲府に仕へ、渡邊權兵衛とて五百石賜りける。内藏助は大野に、秀頼公の御命別儀なく御座さん様を計り見よ。時を待つべし、とて江州に落行きけるが、秀頼自害の由を聞きて、立ながら腹を切つて死したりけるとぞ。

○齋藤織部落武者を助くる事

大坂落城の日、興國公の士齋藤織部、黒母衣かけて西國道に落行く敵に追附き、すでに討取らんとせしに、彼敵ふり顧りて、落武者の首取られたりとも、さばかりの武功とも言ふべからず。如何に助けられんや、といふ。齋藤、從者に差せたる相印の腰指を與へて、疾く落ちられよ。見咎むる者有らば、池田が内の齋藤織部といふ士の從者ぞと言はれよ、と教えければ、忝き由謝して落ち行きけり。歸陣の後齋藤が友來りて、大坂にて落武者の中に我縁の者の候が、助け給ひて相印まで與へられし故、遁れ出でて密に參りて斯く申せし、と言ひけり。齋藤後人に語りて、我其時此武者を討たんは易し。されども落武者の降參するを斬りたりとも、母衣懸けたる我に如何許の功名とかすべき。今は却つて奥深く覺ゆ。猥に人數を殺すのみを武と思へるは、大なる僻事にてこそあれ、と言ひしとぞ。

○澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

明石掃部頭全登大坂に籠りしが、落城の後討死しけるや落行きたるや定ならず。明石が士澤原孫太郎一説に孫を牛捕りて明石が行方を問はるゝに、知らず、といふ。さらばとて拷問に及びけれ共更に言はず。あまりに厳しく責められて涙を流しければ、行方を言ふにこそあれ、とて、如

何に、と問ふに、澤原言ひけるは、關東の兩御所の運強く御座しまし候を感じ奉りての事に候。士たる程の者骨を刻まるゝとも、主君の行方を申すべきや。此度大坂軍に勝たば、兩御所落行かせ給ふべし。其時御邊達を搦めて、今我を責められ候如くならば、主君の行方をも白狀すべき心なればこそ、斯く我を責めらるゝならめと思ひて、覺えず涙の流るゝと申しければ、人々詞無かりけり。東照宮聞し召し、類無き忠義の士なり。能く勞り候へ、とて御赦有りけるとぞ。今細川の家に其子孫あり。又池田の家にもあり。澤原は備前磐梨郡の村名なり。孫太郎が一族此村よりの出でたりといふ。掃部が居城の跡、備前和氣郡和氣村の東の山上にあり。

○丹羽左平太才覺城を落つる事附左平太初陣義氣の事

丹羽左平太は織田信雄の小姓なりしが、後秀頼に仕へ、大坂落城の時泉州貝塚まで落行きしに、野伏道を遮り取巻きければ、丹羽、我を殺さんとや、又甲冑を奪ひ取らんとや。著たるもの剥かれなば恥なり。我既に日本國を皆敵にしたれば世にあらんとも思はず。出家せん。僧一人呼びて給はれ、といへば、野伏僧を連來る。丹羽、さらば、と言ふ儘に立寄る體にて僧を袴と押へ、刀を胸に當て人質にしければ、野伏等も詮方なく、何方迄も送り申さん、といふ。夫より紀州和

歌山に縁の人有りけるに告げ遣りて、迎の人來て紀州に匿れ居たりしが、程なく赦を蒙りてけり。

左平太長久手の軍には小牧に残されしが、朋輩の石黒八十郎に、年幼しとて旗をだに見ざるは口惜し。後の咎は有りともし、と言ふより馬に乗り、長久手指して駈行く時、石黒丹羽に向ひ、今日の敵は池田ぞかし。池田の士に叔父の善内といふ母衣の士あり。行會ふならば如何にせん、といふ。丹羽、人々君の爲とは言へ共、叔父を討たんも如何なり、など言ひて後には駈離れしが、軍既に終りて落行く武者有りしに、丹羽追附いて馬より突落せしが、母衣懸けたる敵なれば、名乗れ、といふに、石黒善内と答ふ。丹羽聞きて、云々の故ありとて、落ちられよ、と言つて馬に搔乗せたる處に、高木筑後守走來り、何とて敵を落すぞ、といふに、丹羽子細を答ふ。高木、幼年の働といひ其志を感じ、後に東照宮に其由を申す。小牧にて信雄の陣所に渡らせ給ひ、勝軍の祝に酒宴の有りけるに、左平太事を問はせ給へば、只今給事せし小姓なり、と答ふ。今日斯る事の候、と仰せられしとかや。其後秀頼に仕へて大坂の軍の前關東に使せしかば、之に乗りて奉公せよ、とて馬を賜はりけるとなり。

○大坂御陣中御支度の事

大坂冬の軍に諸軍に兵糧を賜ふ。凡そ三十萬人、一日に千五百石なり。遠國の兵には一倍を増賜りけり。夏の軍に東照宮松下淨慶を召され、大坂の賄支度膳米五升、干鯛一枚、味噌、鰯節、香物、少しばかり用意せよ。其餘に及ばず、とぞ仰せられける。されば厨の入用、只長持一棹にて事足りぬといへり。

○本多落合功を論ずる事

大坂夏の軍に、越前の士大將本多伊豆守富政が一陣に、首百七十三取りたりければ、我に優れる首数は有らじ、といふ處に、落合美作守、我こそ増りたれ、といふ。伊豆、何故ぞ、といへば、落合聞きて、本多には、組に附けられし士の祿凡七萬五千石に及べり。斯く申す美作は一萬石の祿にて、首四十八取りたり。祿の多少にて士卒の多少ある事は言ふにや及ぶ、といへば、東照宮の使番諸星金右衛門、柱に倚りて居眠りしが、目を開き、落合の詞尤理なり、と言ひしかば、本多詞無くて止みぬ。

○後藤又兵衛が事

後藤又兵衛政次、秀頼に招かれて大坂城中に有りけるが、夏の軍評定に、政次、國府越くらがり嶺に打つて出で、地の利に據りて軍するの外道無し、といへば、則ち大和口の先陣して平野に打出でし處に、東照宮より相國寺の瑤西堂を便にて、關東の御味方に參らば、播磨國を賜はるべき由なり。政次、仰せ誠に忝しと申せども、御味方仕らん事思ひも寄り候はず。今大坂の勢強く關東危く候はば、別に存する旨も候べし。今大坂の運傾きて、秀頼亡びん事近きに候。其を見て二心を抱かん事は弓矢取道にあらず候。此由を申されよ。是は物語にて候程によく聞かれよ。今日本國に弓取多しと言へ共、政次に優れる者有りとは覺えず候。其故は、去年より政次を頼み思召候は、高麗まで攻められし豊國明神の嗣にて候。また政次内通せば、天下分目の軍容易く破るべしと仰せられ候は、徳川殿にて御座しました候。天下の勝敗を政次一人が身に懸けたるは思出ならずや。死しても冥途の面目なり。政次生きて候はば、一日に破るべき大坂も十日は支へ候べし。政次死したりと聞えなば、百日守るべき大坂も一日の中に破れ候ひなん。政次疾く討死するを、徳川家の恩に報ゆべき志と存する也、といひけり。

後藤は元黒田長政の士大將なり。長政或時物語の序に、今我に代りて軍兵を下知し、大功を立つべき者我士大將の中に誰ならん、と言はれしに、菅政利、人々各其器量有りと申せども、又兵衛に肩を並ぶべき者は候はず、と答ふ。長政飽まで勇將なりしかば、政次が武略を妬まれし故氣色悪く見えけり。政次豊前の小熊の城に在りて、隣國細川忠興と中悪かりければ、實は小倉の防なり。故有りて政次が子隱岐追出されしを呼び返し給へ、と長政に申せども、聞入れられず怨むる時、政次が二男又市を長政寵せられしが、博多の祇園の宮にて猿樂の有りし時、鼓を打て、といはれしかば、小熊に行きて斯くといふ。政次怒りて、父子共に出奔しけるを、忠興鐵炮二百に士を添へて迎寄せられしかば、長政と既に軍に及ぶべく成りしを、江戸より和平せられ、政次をば何方になりとも送り候へ、となりしかば、忠興、政次を餞して酒宴あり。松井佐渡、有吉頼母並び居たりしに、忠興、我黒田の家と不和なれば、之より後の事計り難し。長政の軍だて能く知つたるらん。如何にして討勝ち候べき、と問はれければ、政次、兩方に加勢も無くて軍あらば、國の大小と申し必定甲斐守打勝ちなん。され共容易く勝つべき計の一つ候。甲州は人に越えたる勇將にて、いつも先を駆けられ候。鐵炮に優れたる士五十人許擇みて、鎗の合ひ候時五人討取りなば、其中に必ず甲州有る

べし、と答へて出でしを、さばかり長政を恨みて出奔せしに、今長政の武勇を譽揚けつるぞかし、と感ぜられけり。政次、安藝に船を停めし時、正則福島丹波をもて招かざしかば、三萬石の祿にて仕ふべし、といふ。正則、いや、丹波を始として皆二萬石與へしに、政次に三萬石過分なり、とて聞かず。丹波、今政次に三萬石與へられれば、政次だに三萬石なり。丹波も他の家に行かば四萬石なりと人申すべきにて候。是臣等が武名を揚ぐるにて候、といへども、正則同心無くて、丹波行きて斯くと傳ふ。此より前關ヶ原の軍に、浮田秀家の兵七八十人亂れ足に成りて、正則の軍の前を落行きしに、丹波卑き地に有りて知らず。正則の旗本より告知せければ追駈けたり。此時政次丹波が前に來り、引後れたる敵あり。などに追討たざるや、といふ處に、首數多取り來りしかば政次大に譽めて歸りしが、丹波は政次に教へられしと世に言ひあへり。丹波心に怒りを含み居たりしかば、此時語り出し色を變へて、我に教へたりと世に言ひ振れられしや、と言ひけるに、政次打笑ひ、器量の小さいよ、我と足下と武功相同じ。我足下の下知を受くべきや。足下又我に教へられて功名すべきや。人の言へばとて怒られけるこそ可笑しけれ、と答ふ。丹波詞無くて歸り、政次は我に大に優れり。及ぶべきにあらず、と譽めたりけり。

○古田重勝滅亡大河内元綱先見の事

古田織部重勝は太閤の家人、若き時より茶事を好きて千利休が門人にて、此事好む人は重勝を一世の師匠とす。元和元年夏兩御所京都を打立たせ給ふを待ちて、天子を取り參らせ二條の城を攻取り、京中焼拂ふべし、と大坂に心を合せし事顯れて、父子とも誅戮せられけり。此織部正は古き珍器の全きをば好まず。されば書畫様の物も彼處を切りこまを裁ち多く損ひて、さて補ひ綴りて用ひしを、世に興有る事と思ふ人、多くこれに效へり。松平伊豆守信綱の父大河内金兵衛元綱人に語りて、此古田は必ず禍にかゝりて死すべき者なり、と言ひしに、果して違はざりければ、人々、争で斯くは相しける、と問ふに、元綱、されば古の寶器と聞えし物世の亂に失ひて、今残れる處の物は皆神の護持にてこそあらめ。それを己が目を悦ばしめんとて一人の好に任せ毀ひ破る事、神明必ず惡むべしと思ひし故、其人の身も全うして終る事を得じと言ひたりき、と答へしかば、聞傳へて名言とせしとぞ。

○石川重之功名並隱遁の事

石川嘉右衛門重之字丈山は清和源氏にて、八幡太郎の第五男石川義時の末なり。世々徳川家の臣として、十六の時東照宮の御旗本に召出され奉仕したり。幼少より剛雄の人にて非常なりしかば、七歳の時父、此男は必ず日本第一と世に言はるべきにや。若然らずば日本第一の悍惡の人となるべし、と語られしとぞ。大坂夏の陣に丈山傷寒を煩ひ重かりしに、其母本多氏江戸より文して、汝世々御旗本に仕へ奉り、此軍に武功無くば又對面せじ、とぞ勵されける。丈山人に讀せて是を聞き、涙ぐみて物も言はず。五月五日東照宮既に二條の城を打出させ給ひしを聞き、其日は病殊に重く前後を忘れて有りしが、強ひて助け起され、駕籠に搔乘せられて東寺を打過ぎける時に御覽あり。怪ませ給ひ、田上右京に仰せ有りて問はせ給へば、見て歸り、石川嘉右衛門にて候、と申すを聞召し、彼は病重くて死すべきと聞きしに、と仰せあり。丈山八幡に至りて水を三酌掬ひ飲みて、胸の中の苦を頓に忘れけり。其夜は東照宮河内の星田に御陣あり。丈山を召していと懇の御詞をかけさせ給ふ。六日に大坂に押寄せ給ひ、拔駈を禁じ給ふ處に、七日の曉丈山眞先に拔駈して加賀利常の先陣に至り、御使なり、と稱して大軍の中を押抜け、岡山にて敵を討取つたれども、味方其首を奪はんとせしかば打捨てて黒門に打入り、佐々十左衛門と名乗つたる敵を討取り、又敵一人打取つて從者に首を取らせ門を出づれば、馬に乗りたる武

者に行逢ふ。遠藤但馬守が士池田勝兵衛といふ者にて有りしが、丈山の功名を感じければ、我は石川嘉右衛門なり、と名乗つて、池田も首一つ得たり、といへば、丈山其姓名を刀の鞘に刻み附けたり。加賀の大軍押續き来れば、又御使なり、と呼はり、押分けて利常に行逢ひ、討取りたる首を見せ申して打過ぎたり。其夜木多安房守丈山と縁有りければ、筑前守利常を證にせよ、と勸むれども、我利名の爲にするに非ず。先祖を辱めざる志のみなり、といへり。此軍に御近習の士首を得たるは、丈山と間宮權左衛門、豊島主膳と三人ばかりなり。丈山御軍令に背きける故賞に及ばず。是より前丈山駿府に有りし時、清見寺の僧説心に禪理を聞きたりしが、出陣の時暇乞とて寺に至り、此軍に御近習の士首を取りたる人三人ありと聞かれなば、其一人は必ず我なりと知られよ、といひたるが果してしかり。東照宮未だ御旗を駿河に返されざる中に妙心寺に隠れたり。是より學文の志厚く、日夜となく書を読み經史に通じ詩を善せり。丈山三十三の時とかや。其後板倉内膳正重昌丈山の流落を傷み、淺野但馬守長晟に語りしかば、長晟賓客の遇にていと懇にせられしかば、安藝に行く。老母孝養の爲となり。母終りて後寛永十三年、五十四にて藝州を去つて京師に隠れ居しに、板倉重宗京都に有りて丈山を勞る事大方ならず。諸侯貴人の會する時丈山を座上に招きて、此老は文武の道に達せる人なり、と敬禮せらる。

其後比叡川の麓一乗寺に隱遁の地を設け、詩仙堂を作りて詩人三十六人の像を壁に畫き、書籍を友として閑居す。後光明帝御即位の時、松平伊豆守信綱賀使として京都に参られしに、丈山と親戚たるゆゑ、度々閑居を訪はれけり。承應元年七十歳に及びて、三州泉の郷は其故郷たる故、歸るべき志あり。板倉重宗に斯くといへども許さざりしかば、今よりは京都へ再び出じ、さらば其許へも参らじ、とて和歌あり。

わたらじなせみの小川は浅くとも、老のなみそふかけもはづかし
 後光明帝、丈山が隸書に能きと聞召し、高木伊勢守守久、勅命を傳へければ、八卦の字を書きて奉る。上皇も又隸書の大字を書かしめ酒肉を賜はる。寛文十二年壬子五月二十三日、一乗寺の閑居に終りたり。九十歳となり。其詩を覆醬集と名附け、今世に行はる。

一乗寺の閑居、今は尼持ちたる寺になりぬ。されども詩仙堂は残れり。繪像も廢せず。丈山の物具鎗、又如意几なども有りといへり。

常山紀談 卷之二十三

○直江山城守閻魔王に書を贈りて訴訟人を斬る事

上杉家に三寶寺何某といふ者、下部の罪有りて誅せしを、其一族大に怒りて、死したる人を歸し給はれ、と直江山城守に訟へけり。其下部の罪死に及ばざる事にや有りけん、直江白銀二十枚與へて、跡をとへ、と宥めけれども愈用ひず。是非に歸し給はれ、と直江を催促しけり。直江種々にいへども兎角聞入れず。其時直江、然らば訟の如くせん、とて一族三人捕へさせ、地獄に行きて迎へ來れ、とて書簡一通封じて、使に往け、とて首を刎ねさせたり。其書簡に、云々の子細候て三人迎ひに參らせ候。疾く歸し賜はり候へ。慶長二年二月七日、閻魔王冥官披露直江山城守兼續、とぞ書きたりける。

○安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事

安藤帶刀の子を飛驒守直治といふ。成瀬隼人正正成、或時直治に紀州にて鍛ひたる刀を乞ひ得

しが、後に成瀬彼刀の事を語りて、尾張にて死罪人の有りしを試みたるが、快く切れざりき。能出來たるに殘多し。又鍛ひ直させて給はり候へ、といふ。安藤、安き事なり。紀州にて心よく切れたりき。怪しき事よ、と言ひしに、成瀬打笑ひ、紀州にて心よく切れたりき。然らざるは、尾張の人骨堅き故ぞ、と戯れしに、安藤聞きも敢ず、いやく尾張の士の腕の弱き故なり。鉛刀にても紀州にては能く切れ候、と答へたり。

○土屋數直執政の事並土屋忠直成立の事

土屋但馬守數直執政たりし時、金座の者共相謀りて、金に銀を入れて吹き替へられなば、日本國の金甚だ多くなるべし。金の色の損ずるのみにて莫大の利なれども、但馬守用ひられじ。但馬守だに此事を聞入れられなば事行はるべし、と言ひけるを、數直に申す人あり。兎角の答無くして打過ぎられしかば、又人をして問はせしに、但馬守、是は邪なる業なり。金を以て天下の寶とするは純物なるが故なり。其寶を悪くせんをや。思ひも寄らぬ事なり、と言はれけるとぞ。數直、大猷院殿の近習に仕へ申されし比、故有りて咎を蒙り引籠りて有りしに、大猷院殿上京ましくけり。數直密に上京せられしを、親族家人相止めけれども聞入れず。京に著きて傍な

る所に隠れ居けり。或時、云々の事を数直に謀らすべし、と仰せ出されしかば、皆駭きて、數直は江戸に在り。如何に、と申しければ、聞し召し、尋ねて見よ。居ざる事はあらず、と仰せられける程に、此處彼處探しけるに、東の京に隠れて有りしを頼て召出して、仰に、汝能くこそ來りたれ。來らずばよかりなんや。とて命ぜられける事どもあり。泰平の時と言へ共千里の行程容易からざる事なりと思ひて、後の咎を顧みず忍びて上京有りしに、必ず斯くあらんと知し召されし、明智の遠慮君臣水魚の遇、季世に有り難き例なり。此數直は甲州武田家の士大將土屋忠兼、昌恒が孫なり。勝頼亡びし時宗藏が子の二歳になりしを、駿河の富士の裾野の寺に、土屋が相知る僧有りて隠して育てけり。東照宮御狩の時彼寺に立寄らせ給ひしに、御茶を獻けて出でけるを、此子が面魂、唯者にあらず。父は何者ぞ、と御尋あり。住持の僧、氏も無きものにて候、と隠し申しけれども、再三詰り給へば、御敵をなしたる者の末にて候、隠し頼まれて哀に存じ、密に育てて候、と謹んで申しければ、出家させんよりは我に得させよ、と仰せありければ、今は包みて悪かりなと思ひて、これは武田勝頼が供して、天目山に死したりし土屋宗藏が妾腹の子にて候、と申しければ、さる義士の子なりけるよ。眼ざしの並々ならぬと思ひたるに、果して違はざりけり、とて召具せられ、後民部少輔忠直と言ひしは此人なり。數直は忠

直の次男なり。

○塚原卜傳劍術鍛煉の事

塚原卜傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。卜傳劍術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源院殿の師たり。其後上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり。上泉は新隆、卜傳また上泉にも學びたり。卜傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授流の妙手也。卜傳また上泉にも學びたり。卜傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、彼弟子或時、道の傍に繋ぎたる馬の後を通りけるに、彼馬跳ねたりしに、ひらりと飛退きて身に中らず。見し人さすがに、塚原が弟子の中にも勝れたるよと言ひしに違はず、と譽めて卜傳に語りけるに、卜傳大に驚きて、さては一の太刀授くべき器にあらず、と言ひけり。諸人此事を不審して、試よ、とて類無き跳馬を道の傍に繋ぎ、卜傳を招きて側に隠れて見居たりしに、卜傳馬の後を除けて通りし故、馬跳ねんともせず。人々謀りしに違ひければ、後に斯と語り、さて、彼弟子の早業を譽め給はぬは如何、と言ひければ、卜傳聞きて、さればとよ。馬の跳ぬるに飛退きたるは、業は利きたるに似たれども、馬は跳ぬるものといふ事を忘れて、うかと通りしは怠なり。飛退きたるは仕合といふものなり。劍術も時により、下

手にても仕合にて勝つ事あるべし。それは勝ちたりとも上手とはいふべからず。只先を忘れず機を脱かぬをよしとするなり。一の太刀の位に及ばざる事遙なれば譽めざりき、と答へしとぞ。

○東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事

東照宮御病氣重きに及びて、台徳院殿も側に御座します。鈍帳の際に松倉豊後守重正、市橋下總守正總、堀丹後守直倚、桑山左馬助、別所孫三郎を召され、此五人忠ある者なり。且大坂大和口にて武功あり。能く將軍に仕へ奉れ、と仰せられしかば、皆涙を流して只兎角の詞無かりける時、又、別所は祿少けれども、此後も取わけ忠あるべき者なり。大和口にてやさしき言をいひたり、と仰せければ、別所泣沈みてけり。此は大和口にて城兵引返すを追討たざりし時、別所諸大將の前に馬を乗廻し、先年筑紫にて、島津が退口を尾藤が慕はざりしを太閤怒られき。只今追駈くべき圖を外す事無念なり。斯く申す孫三郎は馬一匹故齒を嚙むばかりなり。如何に人々、斯くは腰の脱けたるや、と大音に呼ばはる。此事を聞召しての事なりけり。

○鮭延越前組下に慈愛ありし事

鮭延越前は最上義光の長臣、祿一萬五千石なり。最上の家亡びて後流落しけるに、固より家人に慈愛深かりし人にて、士二十人附従ひ、各乞食して養はん、といふ。土井大炊頭利勝五千石與へければ、二十人の士に五千石皆與へて、各二百五十石なり。其身は二十人の許に一日がはりに養はれて、一生を終れり。越前死すれば、二十人の士大に愁傷して一字を建立す。今下總の古河城下の鮭延寺これなり。

○烏丸光廣 卿行狀の事

烏丸光廣 卿は、常の居間に書物を繕きならべ、四枚の襖二枚開き、机一脚に硯有りて、三本人の扇子箱に筆あり。其間に年月経ても人の入る事無し。故に座したる跡ありて其外は塵滿ちたり。公宴參内の時も扇子箱に硯石を入れ、手に携け乘輿に入れられけり。この卿江戸に召されて三年御座しけり。高倉屋敷に、斯くて歸京あるべき由きこえけるに、兼ねて座敷の前に庫有りしを、留守に置かれし雜掌言ひけるは、公久しく江戸に御座して、廣き所に慣れ給ひ、歸京の後、此庫目前に有りて悪かりなん、とて壊ちたり。庫には、數十年諸家より贈りし物を積みたるなり。其物は書院に並べ、詳に書記して家人に分ち與へけり。斯くて光廣卿歸京有りて、

程經しか共、庫の事は言ひ出されず。雜掌、庭の様の異なるにや、と言ひしに、實にも廣くなりぬ。庫は如何にしたるや、と問はれしに、云々したり、と申す。内の寶物は如何にしたる、と有りしに、皆配り與へて候、と申す。それは誠によりけり。汝は何を得たるや、と問はれければ、いや一種も取らず、といへば、無調法の事かな、と打笑ひて取合へもせられざりしとぞ。君臣禪理を好まれし故なりとかや。

○中院通村公江戸にて和歌を詠給ひし事

大猷院殿の御時、中院内府通村公御不審の事有りて、江戸南光坊に閉籠りて三年御座しましけるが、秋月を見て、

ゆくかたに身をばさそはで夜な夜なの袖の露とふ武藏野の月

と詠せられしを、僧正感吟に堪へずして大猷院殿に申されしかば、三年の逗留旅情さぞあらん。今は歸京候へ、と仰せ出されて、内府京都に歸られけり。

○本多忠義書籍評論の事

本多能登守忠義、或時近習の人に、近き頃世にもて囃す書の事を問はれしに、平家物語評判の事を申す者あり。それは誰が著したるにや、と問はる。由井正雪が作り候、と答ふ。忠義、凡書籍は賢人君子の著す處なる故にこそ崇む事にはあれ。正雪は大惡逆の賊なり。よも正しき事は有らじ。其書籍聞くも穢しく覺ゆ。人を以て言を捨てずといふ事のあるれども、斯る凶賊の何條善き言の有るべき。汝等よく心得よ、といはれけり。

○義經の鞍の事

蜂須賀阿波守至鎮古戦場の事跡を尋ね、古き物の廢れしを求められしに、八島の軍に義經の土佐藤繼信を葬りける時、最愛の大夫黒といふ馬を賻にせられし。其鞍志渡の寺に有りしを、彼寺の破壊したるを修補して鞍を乞得たり。其後年久しくなりて庫を司る人、詳しく其事の由を知らず、他の鞍の中に雜へ置きたり。程經て上田半平安重とて聞ゆる馭法の上手あり。其比類無き惡馬の有りて人々乘煩ひしに、上田、此馬にはよい鞍置いて乗りたらばよかりなん、と言ひしかば、數多の鞍を出して見するに、上田、いと古き鞍を取出して、是こそ、とて彼馬に置かせけり。上田を嫉む者、何條鞍に故あるべき。いざ見よ、とて集りけるに、三浦次郎右衛門と

いふ鐵炮を預りし人年老いたるが、此を見物に出て、久しき名物の判官の鞍を見たるよ、と言ひしかば、其故を問ひて驚きけり。悪馬も固より乗得ければ、上田が馭法愈名高く成りにけり。

○根來法師賞功の定竝大澤仁右衛門が事

紀伊國根來谷の法師は昔より武勇を好む。定りたる法有りて、第一の功名には、感狀に玳瑁の鎗三本銅錢三十貫、其次感狀に鎗二本銅錢二十貫、其次には感狀に鎗一本銅錢十貫文。根來の内に大澤仁右衛門といふ者一番鎗を合す。感狀に鎗銅錢をも添へて受け得しが、大坂にて秀頼に従ひ、城落ちて後九鬼の家に有りしが、大坂籠城の人禁錮せられしを、土井利勝密に養ひ置かれけり。

○大音主馬助先登を論ずる事

加賀利常に仕へし大音主馬助に、若き人々數多、如何に大音心は猛く候はん。されども今は走る事叶ふまじ。麒麟も老いぬればといふ事思ひ出され候、といふ。主馬聞きて、五町十町駈走りても、敵の眞中に只一人駈出る事なり易き事にあらず。早く走りたればとてさのみ益なき事なかりけり。

り。先に駈行く人有りて後に續くを待たれば、此老人も續くべし。鎗間は僅六七間に過ぎず。主馬が如き老衰へたる身も、其時心剛ならば後れまじ。五町十町走る事は若き人のなし易き事なれども、六七間の際に至りて箭玉烈しければ、若きとて走られぬものなり、と言ひしに、皆詞無かりけり。

○永田治兵衛功名の事附樫井合戦の事

永田治兵衛は平生多病なりしかば、何の用に立つべき、と人のいふを以て、下部こそは健なるがよけれ。士は義と勇とにあり、といふを、人々、詮方無くていふ詞なり、と又嘲りけるに、泉州樫井にて淡輪六郎兵衛が首取つて旗本に行く。平生多病の男斯る振舞し候に、無病の人達今日功名無く候や、といふに、答ふる人無かりけり。又上田主水は宗古といひしが、石田に興して淺野幸長に預け置かれしが、茶の湯を弄びける故、殿の國こそ大きなれ。一萬石の茶湯法師を召置かれたり、と譏りけるに、幸長聞きて、上田に脇差を與へ、汝を誹る者有りと聞く。必ず大切の時に功名する心得有れかし、と詞を懸けられしかば、上田、事に臨みて刃に血を染め申さん、といひしを、又、鼠の血ならでは附け得じ、と言ひけるが、樫井にて目を驚かす軍して討取りたる

首を提げ、幸長の日出の王子の陣に至りて、士弊と幾らも並居たる處にて、茶湯法師に劣られし人々よ、と言ひけるに、兎角いふ人無かりけり。

櫻井の軍は大坂夏の事にて、大野主馬大將にて、塙團右衛門先陣して和泉に攻入りけり。岡部大學塙が武功を嫉み、拔駈して阿部野を和泉路に指して進み行き、四月二十八日夜明けて、國府の東の山に烟の立つを、岡部が士共、すはや相圖の火の見ゆる、と勇み、蟻通明神の北より貝塚指して進み行く。淺野長晟は信達に陣せしに、大坂より大軍寄すると聞き、櫻井に引返すを、塙、我行きて敵の體見て來らん、とて唯一騎、淡輪六郎兵衛といふ案内者を引具して馳行く處に、岡部を見つけ、塙馬の上より、拔駈したりしよな。今朝よりの軍を聞かん、と罵る。岡部、敵無ければ功名も無し、といふ。互に相罵りけるが、彼なる安松を焼拂ひたらばよかりなん。又蟻通の松原に伏兵有らん。覺束なきに後陣の續くを待たん、とて物見を出す。長晟の士大將淺野左衛門佐安松に來りて、龜田大隅に、疾く兵をあけられよ、といへり。又塙が物見乘歸りて、敵近く候、といふを、岡部聞きて、胃を取りて著、馬に諸鎧を合せて駈出す。塙、如何に後陣を待たれよ、といへども耳にも聞入れず。塙怒りて、汝に先を駈させんや、と言ひて是も馬を乗出す。龜田は殿して引退く處に、

透間も無く追懸けたり。大隅は討死までよと思ひ定めて、石橋によりて十文字の鎧を横たへ待ちかけたりしに、淺野左衛門見て、何とて軍したる、くせんといふ事ぞ、とて、引退かれよ、といふ。上田主水は櫻井の家の中に隠れ居て左衛門を遣過し、後に残り居しに、淡輪眞先駈けて馳入る處を、永田治兵衛討取りたり。斯くて大坂方馳寄する處を、上田主水鎧を提げて散々に相戦ひ、山掛三郎左衛門と引組みたり。横井平左衛門、横關新三郎駈寄りて山掛を討取りぬ。龜田を始として、殿の者共、面も振らず喚き叫んで相戦ひしかば、大坂勢敗北す。塙は田子助左衛門が射ける箭に痛手を蒙り、十文字の鎧を取延べ、田子が弓の弦を突切る。八木新左衛門透さず走り寄りしかば、塙家の壁に凭れて、思ふ程働きて終に討死す。大野は貝塚にて先陣の戦を聞き駈向へば、櫻井の軍散じけり。又一説に、淺野但馬守長晟紀州を打立ち、五千の兵にて泉州市場に著く。大坂より四萬にて向ふと聞き、淺野左衛門、敵何方に向ふとも市場表にて一戦せん、といふ。龜田大隅、後の勝こそ大事なれ。四萬の敵を五千にて支へん事地利に依るべし。一里引退きて、蟻通明神の松原を前に當てて安松に先陣を押し出し、敵を引附け八町噓を繰引に、櫻井にて戦はん。此松原有りて敵に見透されず。八町噓は雙方深田にて、一騎打なれば多兵懸り難し。然らば一騎合の勝負にて必

定味方の勝利なり、といふ。浅野聞きて、敵の旗をだに見ずして北けん事然るべからず。龜田は引かれよ。我は引くまじき、といふ。龜田、我此所にて功名を遂げずば討死せん、と誓言して出陣したれば、榎井に於て一番鎗を合するか討死か、二つの中を出でず。此所に一戦せられよ、必ず敗軍なるべし、といふ。浅野怒りて、物前に不吉の一言なり、と罵りけるを、浅野左近取扱ひ、所詮但馬守の下知に任せよ、とて前田越前を以て事の由を申す。長晟、兩人の存する所尤なり。龜田は度々武功譽の物師なれば、先陣五千の下知は龜田心の儘にせよ、と下知せらる。前田歸りて斯といへば、龜田涙を流し悦びけり。軍兵を安松に引取る處に、浅野左近、同日向、安井喜内、田子助左衛門、伊藤金左衛門等従ひけり。安松の長瀧村に陣す。市場に残る浅野左衛門、同大炊、仙石因幡、三木小左衛門、未明に安松まで兵を引取りけれども陣すべき所無く、榎井に入りて半ば河原に陣しけり。大坂の軍は瓜生野にて勢揃し、先陣塙園右衛門、二陣岡部大學なりしが、二人不和にて塙真先に進み行き、四月二十九日、泉州貝塚にて兵糧遣ふ。大野主馬は酒宴して打立たず。其時塙は三百許の兵にて安松に馳入り火を懸くる。龜田は蟻通の北へ物見に出づる所に、浅野左衛門乘來り、汝が謀りし所甚だ感じ入りたり、といふ。龜田、物前の積り論ずる事は珍しか

らざる事なり、といふ。旗本の旗色しどろなり、直されよ、といへば、左衛門、心得たり、とて乘戻る。斯る所に上田主水來りて、今日の合戦如何に、といふ。龜田、昨日計りし如く榎井にて軍すべし。兎角旗本の旗色悪しく見ゆるなり。乘歸りて直されよ、といふ。上田乘歸ると旗色犇々と直りたり。龜田其後上田を感じけるは此事なり。龜田は南の町端に、左の池の堤に、鐵炮五十挺伏せ馬より下り立ち、敵を待つ處に敵駈來る。龜田思ふ程に引附け、下知して鐵炮を打するに、生死は知らず。騎馬の兵三十騎許打落す。敵是にためらふ隙に、鐵炮に撃込みて一町許も引取つたり。斯の如く三度繰引にして榎井の町に引取り、馬を立並べて休み居たり。斯る處に敵味方は知らず、東の河原より歩立の弓の者を率ゐたる大將馬にて乘來る。龜田河原へ乗出し、是は大坂にて誰の陣にてか候、と問ふ。岡部大學、と名乗つて馬上にて鎗だけに成りし時、大學馬を引返して北に向きて引退く。龜田、穢し返せ、と呼はり、一町許追捨てて榎井に歸り、此所にて討死までよ、と獨言して石橋に腰かけ、十文字の鎗を取り、鐵炮の者を集むるに、散々になり唯三人残り止りぬ。三人龜田が前に來りて、腰抜共足纏になり候。落ちたるこそよけれ、とて少しもひるまず。龜田大に賞する處に、上田一騎乘來り、先に鐵炮の音しけるに、早くも引取られたるよ、といふ。

龜田聞きて、我と御邊と二人討死するならば屍の山をなすべし。但州公は琵琶が嶽を越させ給ひ、自害ありしといふは誠なりや。敵進み來るともまた一時は有らん、といふ處に、一騎は赤く鎧ひ、一騎は二三間後れたるが黒く鎧ひたる者駈來る。赤き物具は塙、黒き出立は塙が手の者なり。塙は龜田に向ひ、塙が從者は上田に向ふ。龜田立上り飛出でて鎧組みたり。敵の鎧龜田が胃を二打三打うつ處を、十文字の鎧にて、胸板又左の脇を突いて突伏せ、龜田が土菅野兵右衛門來り首を取る。敵伏しながら菅野が足を切拂ふ。菅野加右衛門助け來り、塙が上に乗りかゝり兵右衛門に首を取らせぬ。上田は鎧を打折り無手と組みたる處に、上田が手の者二人助け來りて敵を討取る。上田は痛手負ひけり。龜田は猶進み出で、十文字の鎧を足にて踏直し居たる處に、又敵一騎突きかけ來り鎧を合す。菅野加右衛門鎧にて脇壺を突く。須田作兵衛其首を取る。差物に谷下吉左衛門と書きたり。此時敵一人來りて龜田に向ふを、突拂ひたり。大坂方疎駈して、先陣の大將討たれしかば敗北しけり。東照宮も龜田が此日の軍を殊に譽めさせ給ふといへり。龜田は父を溝口半左衛門とて、柴田勝家に仕ふ。大隅若き時は半之丞といひて、十六の時初陣なりしが、柴田伊賀守に屬して、越前白鬼戸女河原にて、一本に馬上の敵を打取り、柴田父子感狀を與へらる。又越前丸岡の城へ

一揆押寄せたる時も功名あり。賤ヶ嶽の軍にも良い首取りたり。後淺野家に仕へ、小川原山中、武藏忍、岩槻の城攻にも度々功名したりければ、秀吉是を賞せらる。文祿年中朝鮮蔚山にて敵六騎と馬上にて太刀打し、一騎斬つて落し其首を取りければ、幸長感狀を與へらる。慶長五年濃州合渡にても功名し、瑞龍寺二の丸に先登し、度々武勇譽れ高かりければ、京都にて台徳院殿御前へ召し出され、龜田が勳類稀なり、とて御腰物を賜り、上田も同じく賜物有りて賞せられけり。龜田後安藝東條の城主となり、一萬五千石を幸長與へらる。子細有りて淺野家を去り、高野山學侶花王院の許に隠れ、寛永十年八月十三日卒しけるとぞ。

○於萬の方塙團右衛門を扶持せられし事

紀伊大納言頼宣卿の母君をばお萬の方と申す。駿河にて塙團右衛門は名高き大剛の士なりと聞きて、お子達に太刀刀を進するは常の事なり。大將の寶といふは士に過ぎたるは無し、とて鏡臺金とて毎年五百兩賜はりける中を、二百兩分ちて塙が流落せし内は與へられぬ。事有る時は剛の者一人にても愛しき子に參らせん、と言はれしとかや。

○奥平家の士の妻髪を切りて節を守る事

奥平の長臣奥平源八傳八父の讐同姓隼人を討ちしに、相與せる士多し。源八幼くして奥平の家を立去りしに、一味の面々も皆立去りて源八が成長を待居ける。其中に一人の士、妻は稻葉丹後守正通の家の士の女にて有りけるが、父の許に預け置きしに、頓て讐討つべきに及びて、妻の許に行きて、存する旨のあれば離別するなり。何方にても嫁し候ひて、親の苦勞に成り給はざれ、と言ひければ、彼妻聞きて、年久敷隔てなく過ぎ候ひしに、俄に斯く仰せ候は定めて故有るべし。然らずして暇給はりては、親に向ひて如何にいふべき詞も候はず、といひければ、今は包み難くして、誠は云々の子細にて讐を討つに組したれば、其時は討死するか、又は公の咎に依りて殺さるか、二つの間に有るべし。御身は年若き人の我死後に艱難すべければ、いたはしくて斯の如く言ひつるなり、と語りければ、彼妻元結の際より髪をふつと切り、讐打すまじ給うて相見ゆるまで、此髪いろひ申さじ、と誓言して別れけるとなり。其後讐討おほせて、彼士も散々に働き助太刀して、彼妻の許に行きて對面しけるに、元結の間より髪の長く出でて、元結は其儘有りしとぞ。

○優婆塞の馬の事附信玄馬を擇ばれし事

越前忠直叛志有りと世に聞えし比、加賀の前田利常は隣國なれば軍の支度せられしに、物具著て乗るべき馬を擇ぶに、加賀の領國の中二千疋に餘れる中にて、富田越後が馬を擇出す。鹿毛にて二寸五歩、飽まで駿馬なり。大庭に旗數百本立並べ、伏せつ立てつして、金鼓を鳴し鐵炮を打つに少しも驚かず。名をば優婆塞と附けられけり。今一匹とて擇はれしに、似たる馬も無かりけり。

凡大將の馬を擇ぶに心得有るべきにや。甲斐の武田の家にて米澤といひし者、奥州に行きて馬を求むる時、信玄一首の和歌を書きて與へらる。

上駟の中のかんこそ大將の乗るべき馬としれやものものふ
 信立五十疋の馬の中に、軍に乗られし馬四足栗毛中段とて只二疋あり。甲斐山梨郡とし野
 といふ所の百姓此四足を養ひ置きしを、米澤見て、又無き馬なり、と信玄に申して、五十
 貫の地を與へて此馬を信玄に奉りぬ。今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく、益
 なき觀の美に黄金を費す事には成りぬるなり。是皆上より下に至るまで軍旅に明ならざ

る故なり。

○森寺藤左衛門池田家興立の事並森寺政右衛門武勇の事

池田の長臣森寺秀勝は伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが、伊勢の國司に攻め落されけり。藤左衛門秀勝其比幼かりしを、母抱きて落行き、尾州織田信秀の許に隠れ居たり。護國公輝朝臣の乳母を出せしに、信長、護國公と同年なれば、遊び相手となりて年を送れり。故有りて護國公出奔し給ふ時、森寺も同じく打連て、赤堀に匿れ居る事五年に及び。斯くて信長星崎の城を攻めらるゝと聞きて、森寺商の體にもてなし、清洲の城の厨に行きて、物具を求むべき支度せばやと存すれども、金も銀も候はず。あはれ少し許給はり候へ、と護國公の母君に潜に言ひければ、我も金銀の有らばこそ。此なりとも、とて綾の小袖三つ出して森寺に與へらる。森寺急ぎ出て銀錢六十に換へたり。古き物具を買ひたれども、冑無ければ茜にて染めたる布を鉢巻にして、星崎に向ひ給ひしかば、信長悦びて護國公を元の如く使はれけり。藤左衛門子を政右衛門といふ。勝れたる荒者なり。政右衛門忠勝十八歳の時、何れの所にて有りしや知らず。護國公

の前に有りし時、稻葉伊豫守一徹の許より、備前の陶とて徳利を贈られけり。政右衛門見て、是は贗物なり。あらぬ物を謀りて豫州さぞ笑ひ候べし。悪き奴にこそ候へ。あはれ伊豫守が目の前にて打碎きたらば快く候べし。といふ。護國公、汝が詞無禮なり。豫州が目の前にて碎くべくば碎いて見よ、との詞を聞くより座を立ちて徳利を懐に入れ、伊豫守の方に行きたり。斯る事とは知らず對面せられしに、政右衛門徳利を取出し、備前にて焼きたる物には候はず。贗物なれば返し申す、と言ひも敢ず、柱に中てて打碎きつと走り出でければ、一徹、それ留めよ、と下知せられしに、駈延びて歸りけり。護國公は、政右衛門が面魂、一定伊豫守の許にて打碎くべし。危き事なり、とて門内に待ち給ひし處に歸り來り、云々せし證は此なり、とて徳利の缺けたる口を取出し、見せ申して後申しけるは、凡そ君となる身は一言も謹あるべき事に候。先に申せし詞は無禮なれど、碎くべくば碎いて見よ、と張合をかけられ、若き男の骨を刻まるゝともさて止むべきや。遁れ得て歸りしは幸なり。已後を謹み給へ、といひけり。政右衛門美濃の竹が鼻に居し比、木全又藏といふ士、縁有りて森寺が許に居たり。又藏が父は五右衛門とて大剛の者なりしが、或時野伏一揆しけるに、木全山の中に分入りしかば、それは如何に、と問ふ。中へんに構へ候、と答ふ。程なく一揆の打通りける所を、山

の上より嘯と喚いて突いて懸りしかば、小勢を大軍なりと思ひ、一揆散々に敗北しければ、木全が鎗にて中へんに構ふると世に言はれし人なり。

政右衛門、又藏に心を合せ、同國高木何某を討たんと計りけり。又藏竹が鼻の竹林に隠れ待ちしに、高木夜中に打過ぎける處を、走り出でて唯一鎗に突殺し、從者共を追散してけり。高木が子二人父の仇報いんと聞えしに、政右衛門或年江戸に行く時荒井に宿せしに、敵道に待つと聞きて舞坂に行く。道の程三十間許も隔てて、凡そ八百人許待ちかけたりしに、政右衛門靜々と乗通りしに、敵更に取合はねば、政右衛門從者五六人にて馬を引返し、仇の前に乗行き、是に待ちたるは高木に候や。斯く申す森寺を仇にて討たんとや。唯今何とて討ち候はぬぞや。さらば参り合はん、と大音にいへども物いふ人無し。政右衛門嘲笑ひ、など討候はぬぞや。此後我を討たうとは存じも寄り候はず、と罵りて打過ぎ、江戸に赴きけり。高木は訟へて政右衛門を討たん、と申しければ、何方にてもあれ討候へ、と許されしが、又政右衛門にも嚴しう防ぎをして、仇に討たれざるをもて勝にせよ、との事なりければ、常に鐵炮五挺に火繩に火をつけ、弓十挺に箭を關ひ、鞘外したる鎗五本、士三十人打連れけり。秀吉の時出仕しけるにも斯くの如し。刀をも殿中に携へよ、と許さる。伏見の城を築かれし後、諸大名出仕有りしに、政右衛門に、今

日は出仕すべからず。仇の必ず窺ふべき、と言ひしかども、政右衛門、苦しうも候はず、とて出仕す。秀吉の居間の次まで刀を毎日携へけれども、其日は從者に持たせ置きて、廣間に仇の有りける中を打通りて、事故無く退出しけり。後慶長四年四月に参河にて病死したりけり。

○伴玄札殉死を止る事

國清公 池田三左衛門 世を下らせ給ふ時、伴玄札は寵臣なりしかば必ず殉死すべき者なり、と人も言ひけるを、興國公 隆朝臣 聞き召し、よく心を附けよ、と侍臣に仰せられけり。御柩に納まらせ給ふ日、其次の間なりし襖を開きそれに入り、又閉ぢけるを怪み行きて見れば、脇差を早や腹に突立てけるを抱起し、人多く重りて押留め置き、斯と申しければ、興國公急ぎ御出有りて、玄札如何に、と仰せられしかば、玄札承り、御恩深く蒙り候へば、御供仕りなん志にて候に、見附けられしは口惜しく候。御許れをもて快く死出の道に赴き申すべし、と申上げけるを聞召し、さもあるべき事なり。されども我士の主には成難きを見捨てて先代の供したらんには、人思ふ様も、玄札は先殿の志をも知り、寵愛に遇ひたる身の熟々今の嗣は劣り果てたる故、供して死したるならんと言はんには、今迄の士一人も我に心附する者あらじ。我は獨夫と成り果

てん事目前なり。我を獨夫にしなして、其を忠とも義とも思ひなんには、疾く死して御供申すべし。強ひて我押留むべきや。我は汝が死するに依りて士の主には成る事能はじ。只疾く死ねよ、と仰せられければ、立札涙を流し、存じ寄らぬ仰を承り、誠に進退究り候、と申しければ、興國公、疾く死して我を獨夫にして先代への奉公とせよ、と再三仰せられしかば、立札兎角言はで暫有りけるが、仰の趣承り候ひぬ。士程の者が、刀を腹に突立てながらさて止むべきには候はねども、只今の御詞によりて恥を忍びて、人に後指を指され候とも存命へ罷在るべし、と申しければ、さては我士の主になる事を得たり。汝が忠義比類有るべからず。能く勞りて、と仰せられ、内に入らせ給ひけり。

○番大膳二條城へ使に參る事

池田の家の士大將番大膳景次は、父を藤左衛門景元といふ。尾張智多郡荒尾といふ所の人なり。大坂冬の軍、尼ヶ崎の城にて片桐が兵共討たれしを、援はざるにより二心有りと東照宮疑ひ思召す由聞えしかば、其子細を申述べんが使使を參らすべきに、誰かよく使せん、と各使を擇び、其姓名を書きて出すべき旨興國公の仰により、數百千の士半を過ぎて、大膳が姓名を記して出

しけり。公自ら記させ給ふも同じければ、さらば、とて西宮の陣所にて大膳に仰せ附けらる。

大膳、公の御前を退き出でける時、長臣達を始として、いやが上に重りたる所を通らんとするに、伊木長門、大膳に向ひ、今度の使は大事なり。能く心得られしや、と言ひしに、大膳不才の身、粗仰の旨は承り候ひぬ。此を、と言ふ儘に懷より九寸許の匕首の氷の如く見ゆるを拔出し、至つて業物にて候。大御所の御座近く参りて申候より外は存じ候はず、と言ひければ、長門、尤なり。我行くべしと思ひしに、斯の如くなればいふべき事なし、といひけり。

二條の城に参りければ、東照宮の御前に召されて子細を糺させ給ふに、一々道理明に申したりしかども、猶聞し召し入れらるべき氣色無かりければ、尼ヶ崎の地圖を取出し、武藏守露塵許も二心無き由を申せしかば、其時疑ひ思召さざる由仰せ出されて退出しけり。人々再三押返し諍ひ奉りて、武藏守罪なき由を申せし有様、類少き者なり、と感合へりしに、東照宮も其後大膳が事を、由々しき者なり。誠に豪傑とは大膳なるべし、と仰あり。

大膳は揉髭ありて容儀由々しき人なりしかば、退出しける時、髭よくも言ひたり、と仰せられ、其座に有りし人々も御立關に出でて送り、且知る人になりたりとなり。番後祿千石の賜はり、其後千石の祿を増賜はり、芳烈公光政朝臣の時に至りて政を執りたり。

寛永十三年七月六日病んで死す。

常山紀談 卷之二十四

○熊澤了介の略傳

池田の家にて政を執り、四海に譽高き熊澤次郎八伯繼了介は、本姓野尻なり。加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて、外大父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす。守久初は喜三郎といふ。喜三郎父を平三郎とて尾張の人なり。東照宮に仕へ奉り、三形原にて討死しけり。守久其後福島正則に仕へ、正則安藝備後を削られ、信州川中島に流罪の時、正則の江戸の屋敷を圍みて、若し仰を背かば忽ち討滅さん、となり。正則の士大方出奔しけるが、士只七人残り留りし中に、半右衛門も留れり。正則江戸を出て川中島に赴く時、途にて殺さるべし、と云ひ振らす。守久節を守りて附従ひ信州に参りければ、正則日比寵愛の淺かりし事を悔まれぬ。後水戸の威公に仕へけり。一利は後鍋島に仕へて、島原の城攻に武功あり。延寶八年八月二十三日備前岡山に卒し、蕃山に葬りぬ。次郎八、寛永十一年十六歳にて備前に來り、芳烈公に仕ふ。十三年島原一揆の亂起りし時、公江戸に御座しまし、仰を奉りて岡山に歸らせ給ふ。此は一揆猶落城せずば、師を

出されんが爲なり。此時次郎八未だ元服せざりし故、江戸に留置かれしが、自ら元服して密に岡山に歸りたり。十五年岡山を去りて近江の桐原に隠れ居たり。二十四の歳、高島郡小川村に往きて中江惟命を師とし、道を問ふ。歸りて又高島にゆく。其時父野尻氏仕へを求め江戸に赴く。次郎八に母妹を添へて、東近江の人遠き所に殘し留めたりしに、家甚だ貧しくて、江州の賤しき百姓の食するゆりのこ雑炊を飯とし、糠を食して魚肉酒茶の味を知らず。やうく番子を著て寒を防ぐ事五年、相識る人、母妹の在りて餓死せん事を憐ぶばかりなり。中江、王陽明の書を讀みて、良智の旨を次郎八に語り示す。芳烈公伯繼が王佐の才有る事を知召し、京極主膳に就きて、復來り仕へなんや、と度々問はせ給ひければ、正保二年再び備前に參りて仕へけり。祿三千石を賜はり政を執りたり。和氣郡八塔寺は、備前、美作、播磨、犬牙の如く入交りたる地にて、次郎八請取口とす。和氣郡の中便宜の地に因りて田を墾き、士數十人を土著とす。此時伯繼を助右衛門と稱しけり。公の參勤に従ひて江戸に往く事度々に及べり、世に名譽高く其道を慕ふ人多し。紀伊大納言頼宣卿、松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗、久世大和守廣之、板倉内膳正重矩、松平日向守信之、堀田筑前守正俊、其餘の大名數を知らず。大猷院殿其人となりて深く信じ給ひ、召して尋ね問るべき處に、慶安四年かくれさせ給ひて謁見し奉らず。承應三年備前大に水出で、明

曆元年飢饉の災あり。次郎八日夜國中を巡り撫育に心を盡す。伯繼日比儉にして、家中婢女寡く營む事少し。唯客を愛して、組の士朝夕となく來りて相詰る。伯繼水理を論ずる事妙を得、國中水を通し沼を作り、旱魃の防をなすに、皆馬上より打詠めて其利害を定め論ずるに、數十年の後其言皆中らざるは無しといへり。明曆二年、和氣郡木谷の狩に山より倒れ落ち、此より脚を惱めり。斯くて和氣郡寺口村は其祿地なれば、落山と名を更めて世を遯るゝ志あり。

筑波山は山しけ山しけけれど思ひ入るにはさはらざりけり
 といふ和歌の心にて名附けしといへり。病により明曆三年祿を辭し京に赴く。其道を慕ひて門人となりし人々は、中院大納言通茂卿、同通躬卿、野々宮中納言家縁卿、野々宮中將定基朝臣、清水谷大納言實榮卿、押小路三位公起卿、久世中將定清朝臣、久我右府廣通公、油小路大納言隆貞卿、中御門大納言資照卿、伏原三位宣業卿を始として、數多伯繼を仰とし賞び給へり。此時所司代牧野佐渡守親成、人の讒言を信じて伯繼を憎む。又其才を妬む者あるによりて、世に種々言振す事共ありて、寛文七年四十九にて大和の芳野に匿れ、

この春は芳野の山の山もりとなりてこそしれ花のこころを
 と詠めるは芳野にての事なり。

又山城の鹿背山に引籠り、又播磨の赤石に移り居る。延寶七年六十一歳にして、大和の矢田山に隠れけり。赤石は松平日向守信之の領地たるが、日向守領地を大和の郡山に移す故なり。貞享四年八月、常憲院殿の仰により下總の古河に行く。日向守領地を古河に移す故なり。日向守深く伯繼を尊信せられたり。同年の冬封事を江戸に奉り、政事を更正すべき旨を申すにより、大に旨に忤ふ事ありて、永く閉籠置くべき由仰せ出されけり。此後人の來て物語するに、もし國政の事に及べば、傍なる筈を執り吹きて一事も言ふ事なし。元祿四年八月十七日古河の城頼政邸に病死し、城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ。歳七十三なり。伯繼の學朱子王子によらず。別に一種の學を成すと云へ共、文學に短にして、政事の才其長ざる處自著せし書に見えたれば、爰に詳にせず。

○小櫃與五右衛門會津神公を諷諫せし事

會津中將保科正之は、台徳院殿の第九男にて御座せしが、殊に豪氣なり。近習の人に向ひて人々の樂む所を尋ねられしに、小櫃與五右衛門と言へる者、臣が樂む事二つ有り。其一つは、家貧しくて奢といふ事を知らず。天より命ぜられし貧を樂む由を申す。其一つを問はるゝに、是は憚る所の候、とて言はず。強ひて問はれしかば謹んで申しけるやう、大名に生れざるを天の冥加

と存じ樂む處なり、と答へければ、その子細を問はるゝに、大名は天性賢く御座し候ても、臣下之を馬鹿に取成し候。祿少き身は其師や朋友惡き事を戒め諫め候故に、其身を省みて馬鹿に成らず候へども、大名はさはなく候。臣たる者兎角忤ひては、身の爲善からじと存じて、其主の善き事有れば山の如くに譽め申し、種々の惡き習しを附け候程に、何時となく恣に成りもて行き、夫よりは一言の諫をも申難く候。如何に聰明にても、學問も無く教といふ事を知らず、善事を辨へ給ふべき様なき故、馬鹿に成果て候は口惜き事に候はずや。臣大名に生れざるを樂と存候は、此子細に候、と申せば、中將熟く聞召して、能くも言ひたるかな。尤も至極せり。今より馬鹿に成らざる思慮すべきよ、とて賞美のあまり、即ち二百石の祿を増與へられけり。夫より山崎嘉右衛門を尊信し學問を嗜まれ、後神公と諡せしは此中將の御事なり。

○水戸義公御事業の概略

水戸中納言光圀卿は、頼房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寛永十年威公の嗣未だ定らざりしかば、嚴有院殿の仰にて中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三つに成り給ひしを見て、斯と申上げて嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる處あり。是嗣は兄の頼重立

給はん事なるに、斯く定まりつれば、長子の方に家を譲るべき志此よりして起れり。是より又學問を好み給ふの志篤し。明曆三年より大日本史を撰び始めらる。神功皇后を帝紀を黜けて后に列し、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と立てらる。皆此君の義烈なり。寛文三年頼房卿卒去あり。葬禮僧家の法を川ひす。瑞龍山に葬り威公と諡し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士有りしに、自ら其家に至りて止めらるるに、其理正しき故に殉死を止りしかば、此事聞えて、殉死天下一統停止の旨仰出されしは此君の故なり。又兄の頼重卿の子松千代綱方を、強ひて養嗣とせられん事を乞ひて、若聞入れられずば世を遷るべき志なりしかば、頼重卿許諾あり、松千代の弟采女綱條をも引取り養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜といひし文學有る者、清朝の粟を食せじとて日本に渡りしを、筑後柳川の文學女東省庵、其俸祿の半を分けて養ひ置きしを、召して師とし給へり。綱方病によりて卒去有りしかども、弟綱條を養ひ置かれし故、即ち世嗣になし給ひぬ。延寶元年孔子の堂を水戸に立て給はん爲、江戸駒込の屋敷に假の設をなし給ふ。日本古よりの假字の文章を編みて三十卷となしたるを、天聽に達し、後西院の帝名を扶桑拾葉と賜はり、即ち獻じ奉り給ふ。天和二年朝鮮の使臣江戸に來り、三使進物の目錄禮儀を失せる故、三條の疑問有りしに、答ふる詞無かりしとなり。後西院の帝の勅

命により、鳳足といへる御硯に銘を作られしかば、宸筆を下し給はりて賞美せさせ給ふ。其御詞の中に、備武兼文絶代名士といへる句有りしを、印に彫らせられしとなり。元祿三年領國を綱條卿に譲り給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて、歌に、

位山のほるもくるし老の身はふもとの里ぞ住よかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給ひしに、山莊の有様萱をもて葺き門垣には葛蔓ひかまり、只竹垣一重にて池に蓮を植ゑ、西山のほとりに桃數百株あれば、川の流の橋を桃源橋と名附け、鹿を放ち鶴を飼せ給ふに、よく馴きけり。瑞龍山に壽藏を設け衣冠を埋み、碑陰の銘を自ら作り給へり。久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂を建て、頼義、義家の神主を置かせらる。又攝州湊川に楠正成の墓を修し、碑を立てて碑面に、嗚呼忠臣楠子墓、と自筆し、陰には舜水の撰びし讚を彫らせられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、其文集を輯して、門人源光圀と稱し給へり。彰考館を作りて和漢の群書を集められしに、遠國他郷に學士を遣し、半番一行の反故をも見るに隨ひ拾收め給ひける程に、色々の書ども編集有りけり。中にも禮典類聚五百卷は日本古來よりの寶典と稱すべしといへり。寛文五年領國中の淫祠三千八百毀ち捨て、新地の寺院九百九十七除かれ、多珂郡にて庶野有りしに、馬を放ち牧となし給へり。地の利を盡す術に心を

盡され、海參白魚昆布をひ沼が浦に撒き、海に蛤を放ち、是より海物多く出づ。山には漆楮多く植ゑさせ給ひけり。元祿十三年西山に逝去あり。義公と諡せしとなり。

國初より已來の諸侯の中に、會津の神公、水戸の義公、備藩の芳烈公、三公の如きは寔に非常の君と稱し奉るべし。神公の事詳なる事を知らず。義公の一世の事跡西山遺事に審に記したれば、只一二の大なる事を記せり。吾藩の芳烈公の學校を作り賢才を招き、禮を以て度となし給へる、異國をいはば衛の康叔武公、燕の昭王の如き君を并せて芳烈公に比倫すべきや。予別に記せる物あれば、此篇には詳にせず。

○渡邊數馬報讐始末の事

渡邊數馬弟源大夫が仇河合又五郎を討ちけるは、寛永十一年十一月七日の事なり。もと數馬は松平宮内少輔忠雄に仕へて、忠雄備前岡山に御座しける比、寛永七年七月二十一日、城の大手にて踊興行ありけり。其夜數馬は妻の父津田豊後が方に行きけるに、河合又五郎數馬が宅に來り、心易かりしかば、源大夫と物語しけるが、如何なる故にや主従四人にて源大夫を切殺し、又五郎は脇差の鞘を落して行方知れず成りぬ。折節踊見んとて群集しけるに、數馬が下部岩佐作兵

衛煩ひ居しが、外の騒を聞き出でけるに、路次の内より刀を提けたる者に出會ひ、何者なれば士の家に刀を抜きて入りしや、と詞を懸けたる所に、徒目附の遠山才兵衛も來り合せ、彼者を切止めけり。

一説に、歩行の十三村孫右衛門通りかゝり、内の騒を聞き走り入りて是を聞き、又五郎を追駈けんとする處に、何者とも知らず女關に走り入る者あり。孫右衛門を見て逃けんとするを切伏せたり。之は又五郎が下人に言ひ附けて、源大夫に止を刺させん爲に戻したるなりと後に聞えしとなり。

源大夫は深手負ひて、又五郎相手なる由いひて死しぬ。豊後が方に告げければ、數馬も豊後も又五郎が父半左衛門方に行き、對面すべし、と言へ共、門を固く鎖して入得ざりける。中に長臣荒尾志摩、忠雄の近習加藤主膳駈來りて、半左衛門は二人して受取りぬ。忠雄、半左衛門をば菅權之介に預けられけり。半左衛門初は安藤對馬守重信に奉公せしが、故有りて忠雄懇にせられしに、半左衛門口論して相手を斬り、出奔して渡邊數馬が許に來りしを、潛に匿して祿を與へられし身なれば、又五郎を出して、腹切すべきものと忠雄思はれしに、半左衛門は更に其志に非ずして、又五郎江戸に行きけるを、安藤治右衛門匿し置かれけり。久世三四郎、阿部四郎五郎

兩人 忠雄の許に年久しく來れる人なれば、治右衛門に斯くと言はれけるに、治右衛門申しけるは、半左衛門を渡されなば其儘又五郎を出すべし。との事にて、此旨を兩人忠雄に告ぐれども、尙も覺束なき體なれば、兩人、慥に又五郎を請取り出すべき、との起請文を忠雄に出す。さらばとて、半左衛門を江戸に召下して取替ふべし、との事に及びて治右衛門朋輩共申す旨あり。仲間を除くべき故是非に及ばず、と忠雄に申す。忠雄其欺く事を怒りて、忠雄一族の人々心を合せ、押寄せ奪ひ取らんと支度あり。

伊達政宗は、論ずる迄もなし。踏潰して奪ひ取るより外無し、と言はれしとなり。三家の御方和平の取計ひ有りけれども、未だ事遂げず。半左衛門は池田備中守長幸の許にあり。斯る處に忠雄痘瘡を病みて卒去あり。弟の松平石見守輝澄、同右近大夫輝興、三家の御方に訴へ申す旨ありけるに、長幸も卒去ありて、半左衛門は松平阿波守忠英請取りて、阿州に赴く道にて死す。安藤を始め咎を蒙り、閉門仰せ附けられけり。寛永九年七月、備前因幡國替を仰せ出さる。此時數馬立退きて備前の兒島にあり。又五郎が行方を尋ねれども知れず。數馬が姉婿荒木又右衛門大和の郡山に在りけるが、又五郎が伯父河合甚左衛門も同じく郡山に在りて、暇を申して奈良に出でける故、又五郎が行方を聞かん爲に、數馬、又右衛門が方に行きしに、又右衛

門、數馬一人しては危し。助太刀せん、とて明くる年の三月迄荒木が許に止め置き、三月又右衛門暇を乞得て郡山を出でにけり。是は甚左衛門が悪口しけるに因れりともいへり。さて數馬、又右衛門は攝州丹生の山田に妻子を預け置き、四月に江戸に赴き、所々搜りけれども行方を知らず。甚左衛門をば時々見かけしかども、誠の仇にあらざれば打過ぎけるを、甚左衛門は嘲りけるとかや。斯て又丹生の山田に歸り、明くる寛水十一年大猷院殿御上京により京都に赴き、方方尋ねけれども行會はず。又丹生の山田に歸り、其後又五郎有馬に行くと聞き、有馬に行けども行會はず。奈良に甚左衛門が妻子在りければ、十月朔日奈良に行きて潛に聞くに、甚左衛門が方に又五郎匿れ居て、十一月六日江戸に赴く由なれば、其夜押寄せすべきとせしが、奈良は商家の事なり。途中にて討つべし、とて數馬、又右衛門主従四人、甚左衛門が邊に立明しけり。六日の朝、先は甚左衛門、中は又五郎、其跡に櫻井半兵衛、是は又五郎が妹婿なり。弓、鐵炮の上下二十人なり。七八町許も續きて行くに、又五郎其日は伊賀の島が原といふ所に宿す。四人見知られてはと裏の道も無き所を踏破りて、三町許も行過ぎ宿を借らんとすれば、怪しみて、島が原へ、心得られざる人こそ四人宿を借りつれ、と告遣す。其由を又五郎が旅宿へ知らせたり。數馬も又右衛門も、敵に覺られじ、と夜深く出でて、山籠りして伊賀の上野小田町に暫の宿をか

り、最期の酒宴して待ちかけたなり。肴は無しや、といへば、是をなりとも、とて鱒を三つ出す。皆頭無し。數馬、目出度し、といひて、主人に酒の價を、とて金子二十兩許投出し與ふれば驚きたり。是を限なれば何の爲にせん、といふ處に、主人の女房經節を出す。數馬、心の附きたるよ、とて頂きけり、又右衛門著たる羽織を脱ぎて主人に與へ、庭に飛出でて躍上りくしたる有様、健なる男の、今日を限りと思ふ氣色めらはれて、只鬼なども斯あらんと見えし、と人後に語りけり。七日の朝又五郎島が原を出て上野にかゝる。又五郎は思ふ仇なれば、數馬、討留むべし、甚左衛門は又右衛門立向ふべし。半兵衛は又右衛門が若黨武右衛門、數馬が若黨孫右衛門兩人懸合ふべし、と相定の、間近くなりければ、又右衛門眞先なる甚左衛門に詞をかけ飛懸り、一説に、又右衛門、如何に甚左衛門日比のどうだぬきを見ん、と言ひも終らず、一刀に切るといへり。

馬より切つて落す。甚左衛門刀半抽きかけしを、二の太刀にて討留めたり。半兵衛は鎧の上手と聞えしかば鎧を取らせず。馬より下りんとする處を、武右衛門一太刀切つたりけれども、淺手にて下り立つたり。從者鎧押取り、半弓をも射かけ、透間無く切つて懸りしかば、二人爰を最後と相働さける所に、又右衛門駈來りて多勢を切りまくり、半兵衛に渡り合ひ終に切伏せた

り。此時又右衛門刀を打折りけり。其刀伊賀守金道が作なりけるとぞ。數馬、又五郎と切合ひける處に、又右衛門は從者を追散し駈寄りて、數馬よくせよ、助太刀はすまじきぞ。叶ひ難くば代らん、と詞を懸けければ、

一説に、又五郎が後へ廻るといへり。數馬飛込んで又五郎を討止めたり。斯る處に、藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野に在りけるが、數馬が親類なりしかば駈來り、其外上野の士數多集り、數馬、又右衛門主従とも嘉兵衛方に引取りぬ。又五郎、甚左衛門は其場に死し、半兵衛は息かまり居けるを、引取りたれば程無く死す。數馬十三所手負ひ、武右衛門痛手にて其夜半に死す。孫右衛門手十所負ひたり。斯くと藤堂家に聞えて、三人は嘉兵衛方に暫く有りしが、藤堂式部が許に年月を送る。式部死して藤堂出雲に預けらる。寛永十五年六月江戸より仰出さるる旨ありて、數馬、又右衛門も藤堂家に下し賜はりけり。斯て江戸の彦坂平六郎、數馬が一族たりしが故、藤堂家に申乞ひて松平勝五郎光仲の許に貰ひ賜はりたり。因幡に赴くにより同年八月七日上野を出る。藤堂立藩、弓五張組の騎士二十人、立藩が騎士五人、藤堂出雲、外に母衣の者組の騎士四十人、彦坂嘉兵衛、鐵炮頭三人、鐵炮九十挺、弓頭二人、弓四十張、田中源兵衛歩行の士二十人引續きて、伏見因幡の屋敷に贈ら

れしかば、請取の爲に因幡の士横川治大夫父子鐵炮二十挺、渡邊越中鐵炮二十挺、伊吹源太兵衛父子鐵炮三十挺、宮脇半太左衛門弓十張、伊賀の者五人、片上彌二兵衛父子鐵炮二十挺、松尾惣左衛門父子伊賀の者六人、福田權兵衛歩行の士二十人、宮脇德兵衛、田中六郎右衛門其外弓の者二十人出逢ひて因州に赴く。伏見より川舟にて下り、海上の船は備前芳烈公の許より出し給ひ、松平輝澄の方よりも船を出し、大小三十艘播州坂越より陸路を經、地主より馳走の士出迎へて草深き所を荊らせ、道筋山々遠見を出し、夜は篝を焼かせ、鳥取の城まで、三泊にて引取らせられけり。仇討ちける時、數馬二十七、又右衛門三十、河合武右衛門四十、岩本孫右衛門三十八歳とぞ。

○多賀孫左衛門同 忠大夫仇撃の事

京極若狹守忠高雲州松江に在りし時、出雲隱岐二州の主なり、其上に箕浦備後、内藤兵庫、多賀孫左衛門といへる者あり。備後が末子與四郎といひしは容貌美麗にて、兵庫が子八左衛門と情交淺からず。孫左衛門が子孫兵衛斯くとも知らず、與四郎に心をかけたりに、會し無二に言ひ交したる者あり、と答ふ。夫れまでにては浮の空なり。名を聞きて止みなん、と重ねて言ひしかば、名を

聞かば若し其人に害やせん、と密に八左衛門に告げて、孫兵衛、備後が宅に時々來るこそ幸なれ、とて或夜與四郎が部屋に呼入れ、遇し、酔の後八左衛門出逢ひて、孫兵衛を刺殺し、止を刺し足の裏を割きて、屍を城下の鹽津川に捨てたり。夜中知人無し。鹽津川の下に屍の流れ寄りたるを見て、誰が仕業とも知られざれども、自然に箕浦、内藤に指さす人も有りければ、孫左衛門聞きて、證據なしと言へ共、斯る類は天命にて虚説無き物なり、僉議を遂げられよ。沙汰に及ばずば備後、兵庫を相手なり、と訟に及ぶ。忠高目附を以て密に聞けば、果して實なり。多賀が訟理なれば棄置き難けれども、内藤、箕浦兩人忠ある舊臣なる故、立退け、と密に知らせ、箕浦父子、内藤八左衛門雲州を出奔しけり。孫兵衛に兩人の弟有り。此時十三歳に十一歳なり。兄は後父の名をもて孫左衛門といひ、弟は忠大夫といへり。忠高卒去、刑部少輔忠知に六萬石賜はり、播州立野へ所替あり。多賀其比京極の家を出て兄の仇を討たんとす。されども幼かりし時の事故内藤を見知らず。父孫左衛門が介抱し置きたる浪人間市大夫、恩を報せん事此時なり、とて附従ふ。孫兵衛が妹の子三田右衛門八も相加はれり。備後は土井大炊頭に奉公しけるが年老て死す。與四郎は二十にて病死す。八左衛門は小笠原信濃守忠修に奉公し祿五百石與へられ、仇ある故他所へ遣されず、勤勞も無くたゞ在らん事快からず。人並の奉公を許されずば

永く暇を給はれ、といふに依りて、江戸の供の列に入れられたり。若し仇に討たれば、とて小笠原家高天神にて走廻りよかりし者の子、其外徒の者六人、内藤に自然の事あらば助けよ、とて附置かれぬ。或時内藤、土井大炊頭の許へ使者に行く。多賀聞きて、歸るさに途中に出迎ひたり。八左衛門人数多く引連れ馬上にて來るを、問、あれこそ内藤よ、と教ふ。若し打損じたらんに馬上にて馳脱けんも計り難し、とて孫左衛門、市大夫前より、忠大夫、右衛門八後より懸り、其間近くなりて孫左衛門編笠を脱ぎ、覺えは無きか八左衛門、と詞をかけ、頭を額へかけて切る。忠大夫二尺七寸の刀を以て飛懸り切る。切られてその様に踏み出したる鎧、忠大夫が拳に當りて、指の骨白く出でたりとなん。さて内藤落つる處を孫左衛門たゞみかけて切り、忠大夫馬の下を潜りて切り止めたり。孫左衛門始め向より太刀附けしかば、内藤が從者幾刀となく切りけれども、さのみ深手ならねば散々に切合ひたるを、内藤が從者幾刀をもて右の肩より腕にかけて切りしかば、左の手に刀を取直したる處を、薙刀にて袖口を左右へ刺貫く。孫左衛門が刀間近くなりしかば薙刀を捨てたり。薙刀はかせになりぬ、數ヶ所の疵は蒙りつ、遂に倒れて立上らず。忠大夫、右衛門八、市大夫、内藤が從者數多切伏せ追拂ひ、忠大夫馳寄りて孫左衛門が頭を抱き、如何に、と問ひければ、思ふ仇討ち果せぬれば思ひく事無し、とて息絶えた

り。内藤を始として其場に七人一二町逃けて、倒れ死する者二人、多賀兄弟、三田、間四人が手に掛けて都て九人を切殺しけり。忠大夫疵三ヶ所、三田、間も手負ひぬれども三人とも死なず。孫左衛門が面に編笠をかけて息つき居たるに、邊の人出合ひ奉行所へ連れて行き、御法の帳面に記して討たざる趣を尋ねらる。忠大夫、固より承り及びたる事ながら、萬一それ故に事洩れに討漏らさん計り難し。本望遂げなば何の身命の惜しかるべき。御法に背きたりとして刑罰に逢ふとも、附届に及ぶべからずと、必死に兄弟共思ひ極めて候、と少しも屈せず申述ぶる。又三田は近き親なり。間が助太刀は如何、と問はる。間承り、浪人なりしを、多賀が恩を以て年月を送りぬ。孫兵衛殺されし時兩人の弟幼少にて、仇を見知らず候故、手引して討たせ候。多賀が多年の恩を報い候へば、如何に御咎を蒙り候とも厭ひ申さぬ志にて候、と申述ぶる。何れも申す處尤至極せり、とて歸されけり。孫左衛門三十三歳、忠大夫三十一歳、右衛門八十八歳、市大夫、孫兵衛死後二十一年の後、寛永十八年辛巳、江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるは是なり。其比土井大炊頭の邸に近きを以て、一橋を大炊殿橋と言ひけるとなり。多賀忠大夫後に難栖と號す。右衛門八後茂左衛門といひ、老年の後茂入と稱し、正徳二年九十歳餘にて讚州丸龜に病死す。此始終は、忠大夫が物語したるを書記しぬるを傳へて此處に記せり。

○大久保家の婢女主の仇を撃ちし事

大久保長門守一本松平周のりひろの内に奉公せし女中老、或時心得過ちし事有りしを、女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ。中老、親にも叩かれし事は無きものを、と獨言して部屋に歸り、文書きて下女に持せ、親の許に遣りぬ。二人の女房、一人は残りなん、といふを、大事の事いひ遣る文なり、とておして二人とも出しぬ。道にて、怪しき事よ。常に二人一度に出されし事も覺えず、顔色も只ならず有りし、とて文を披き見るに、云々の子細にて自害するなり、と書き載せたり。さてこそ有るべけれ、とて、一人のはしたものは、疾く行かれよ。我は歸りて押しむべし、とて急ぎ歸りて見るに、早自害して有りしかば、夜の物打懸け小脇差の血を拭ひ、我懐に差して、さあらぬ體にて年寄の部屋に行き、語り申度事の候。只今部屋に來られよ、と言ひしに、程無く行くべし、と言ひければ、歸りては又行き數度に及びしかば、年寄來りて夜の物を上ぐれば、朱に染みて中老は死してあり。其時女房、是は今日の事にて、斯は自害に及びたるなり。主の仇よ、と言ひも敢ず小脇差を抜いて刺殺しけり。兩人を殺したるならんと捕へて糺し問はるゝに、懷より文を取出し、證據はこれにて候、と始終を詳に言ひ述べて、主の仇をば討留めつ、思ひ置く

事も無く候、とて騒ぐ色もなし。長門守女中を残らず並べて、彼中老の下女の事如何思ふにや、と尋ねらるゝに、忠義といひけなけなる事と言ひ、驚き入りたる由口を揃へて言ひければ、さらば如何せん、各存する旨を申候へ、となりしかば、いかで存じ寄りたる事の候べき、と申す。さらば此度の次第譽むるに詞も無しと言ふべきなり。年寄の死して事も缺けぬれば、則ち年寄に取立てて然るべからん、とて呼出して賞せられけるとぞ。

○林田左文劍術妙手の事並馬爪源五右衛門先見の事

松平筑前守忠之の士に林田左文といへるは、戸田流劍術の妙を得たり。足輕の卒二十人預り居たりしに、或時足輕六人人を殺して出奔す。左文は折節馬に乗りて有りしが、告來るを聞き則ち馬にて追附けたり。足輕之を見て、立向ひ追附かれたりとは他國に參りて申すまじ。之より歸られ候て然るべからん、といふ。六人、敵對せば容易く切勝つべし。今日迄頭たる者なれば切るまじいと心なるべし。林田靜に馬より下り、六人同じく人を殺したれ共、必ず其罪の中輕重有るべし。さらば残らず罪にすべしとも思はれず。我此處に來るは其是非を糺し明にせんとなり、とて歩み寄る處を、一人、謀られじ、と言つて刀を抽いて懸る。林田刀の柄に手を

も懸けず。足をも動かさず。卒爾なり過すな、と言ひて間近くなる時、無分別者かな、といひひひ刀を抽くや否や手の下に斬り倒し、皆静りて能聞け。敵せし故斬りたるぞ。敵せずば何とて切らんや、といふを、又一人斬つて懸れば、愚なる者共哉、死狂ひをするか、とて態と後退りにしざる。蹈込む處を飛違へ一太刀に斬伏せたり。皆氣を寛め一度に斬懸らせじが爲に斯して二人斬倒しつ。残る三人ばかりけ肩かはと思ひて、又一人斬伏せ、一人は手負せ一人は蹴倒し、手負せたる者と蹴倒したる者とは、其帯を以て縛り馬に打乗せ、先に立てて歸りたり。これ程の者なれば筑前一國の士多く林田が劍術の門人なり。馬爪源五右衛門は、鐵炮百發百中の妙を究めたる者にて、武藝を好みしかども、林田が劍術を學ばず。其故を問へども打笑ひて答へず。林田後咎有りて死罪に行はれけり。馬爪親しき友に、林田は姦邪なり。何事を仕出さんも計難しと思ひたりき。劍術を學ばん事は我も好み望む處なりと雖も、已に師弟となりて後難に臨みて、坐ながら見ては有るべからず。其姦邪に黨せば士の道に背くべし。兼てより交を結ばざるに如じと思ひたりしが、愚者も千慮の一得なり、とぞ語りける。

常山紀談 卷之二十五

○石井兄弟報讐の事

青山因幡守宗俊の士に、石井字右衛門政春といふ者あり。因幡守大坂御城代の時字右衛門も従へり。赤堀遊閑といふ醫ありて、其従子源五右衛門を養子にしたるが、石井に縁有りて頼みたりしかば、心得たり、とて天満の傍なる寺に置きて、常に宇右衛門が許に來り、親しくしたりしに、年経て赤堀、鎗を弟子に教へて彼方此方せしに、源五右衛門が鎗未だ精練ならず。人に教へんこと覺束なし、と石井言ひけるを、赤堀用ひざる止ならず、石井に立合はれよ、といふ。石井、汝が爲にこそいへ。老いたる身の立合はんも無益よ、と言へ共、赤堀怒りて止らざれば、いざ、とて立合ひけるに、手もなく石井勝らたりしかば、赤堀口惜き事に思ひ、延寶元年十一月十八日の夜宇右衛門が出でたる隙に忍びて來り、匿れ居て掛けたる鎗を盗み出し、宇右衛門が歸るを待ちて戸の内に入らんとせしを突通す。刀を抽いて鎗をたくりけれども、十文字の横手にかゝり深手にて倒れ死す。従者、何者ぞ、といふを、一太刀斬つて源五右衛門は逃げ去りけり。石

井が嫡子三之丞は番にて有合はず。次男彦七郎は臥居たるが、出でんとすれども部屋へやの戸を源五右衛門掛け置きたれば、踏破ふみやぶりて出でけれ共源五右衛門行方知らずなりぬ。三之丞暇いとまを申して彦七と共に青山の家を出で、源五右衛門が行方を尋ねれども、更に何方いづかたに有りとも聞えざりしかば、源五右衛門が父遊閑いづかんも同意どういにてやあらん。此者を討たば源五右衛門隠れ居らじ。とて同年の冬江州大津にて遊閑を切殺し、夫より京五條の橋、伏見の京橋、大津の町に札を建て、重恩ぢゆうおんの人を殺し逃走にげはしりたるは士の法に非ざる故、大津にて父遊閑を殺せり。汝が爲ためにも仇あかなれば逃廻にげめぐらん事を止よ、首を刎はぬべし。赤堀源五右衛門へ、とて石井兄弟が姓名を記しけり。されども源五右衛門出會いであはねば、所々を尋ね廻れども見出さず。美濃室原村の犬飼瀬兵衛の妻は、三之丞彦七が叔母おばなり。是を便たよりにして爰こゝに有りしに、彦七は犬飼が一族に睦むつしからず、遂に我一人仇を討たんとて室原村を出でにけり。延寶八年の冬瀬兵衛が妻死して、其翌年正月三之丞、従者孫助を安藝へ使に遣りて、唯一人犬飼が家に有りて湯浴しける處に、源五右衛門忍しのび來り、其戸の側かたはらに隠れ居て一刀に三之丞に深手を負せけり。頃は天和元年正月二十八日の夜の事にて、暗さは暗し、二の太刀に三之丞が刀持かたもちたる右の腕うでを打落す。三之丞伏しながら脇差わきざしを抜いて、左の手にて赤堀が股ももを突き其處そこにて死しけり。座敷に犬飼が甥なまこの茂七といふ者來り居たるに、赤

堀飛懸ほりこひかりて一太刀斬つたり。犬飼聞附きこひつけて十文字の鎗やりを取り赤堀に突ついて懸る。赤堀側わきなる塀へいに寄添よきぞひて刀を提さげ、後の塀へいを破らんとするを、犬飼見て鎗を取直し、後に廻らんとせし透間すきまに飛出とびいでて犬飼が眉間まゆけんを切る。犬飼年老いたれば重手おもてにて倒れしかば、赤堀を討漏うちもつせり。一族相集あひあつり松明たいまつを燈し、追駈おつかくれども行方を知らず。犬飼は、赤堀が大坂にて宇右衛門を闇打やみうちにしける時、十文字の鎗にて突殺つぎころせしかば、其鎗にて突殺さんと思ひけれども、所狭ところせまくて物に障さへられ討漏せり、と悔くやみけるとぞ。従者孫助其明る日歸りて此を聞き、齒齧はがりて自害じがいせんと言ひしを、様様に言ひ宥なだめけり。彦七も此由このよしを聞き、彌怒いよくいり悶もえしが、伊豫の親類しんるいの方かたに行くとて、海上かみじゆうにて風に遭あひ溺死でせししけり。赤堀は夫より尾張おわりに行き、伊勢の龜山、板倉いとうら隠岐守おきのしの土青木安右衛門は親類しんるいなれば、忍しのびて行きたりしに、頓つがて板倉に告つげて祿百五十石與あたへて、赤堀を狙ねらふ者有るべしと其用心こころ甚だ嚴けんなり。他國たこくより來る者は一夜の宿をも禁制きんせいし、見知らざる者をば城門しろかどの内うちに入いれず。赤堀名を改めて水之助と稱しょうす。宇右衛門が三男源藏、友時四男半藏吉政とて、兩人皆幼少みなえうせうにて安藝の松平安藝守の土田中左近右衛門、石井九大夫迎へとり、丹羽三入夫が許もとにて養育やしよくす。三大夫が妻は石井家より嫁せし故なり。我男の身みならば赤堀を捜さがし出し首を刎はね、此鬱胸うつせうを晴はすべきに、女の身年老おおいて志を遂とげざる事言ふべき詞なし。二人恙つがなく人と成りて、疾はやく父の仇を討

ちて黄泉の怨を散ぜよ、と日夜に語り聞かせしかば、二人遊び戯るゝに心無く、只管に仇を討つべき志一筋なり。従者孫助は石井家の恩を請けし身なれば、赤堀龜山に在りと聞きて、様々に身を震し魚を賣り、或は鏡磨となりて龜山に行きけれども、宿とるべきやう無く城内に入り難ければ、時々陰際に佇みけるを人怪み、赤堀が用心彌嚴なり。天和二年源藏龜山の有様を傳へ聞き、我既に十五に及べり。龜山に行きて父の仇を報ゆべし。徒に遠方に有りて月日を過さん事の口惜き、とて一族様々に押し止むれども聞入れず。忍びて廣島を出づる時思ふやう、龜山の士如何ばかりか有らん。殿の仰にて赤堀に心を合すべし。天運強く父の仇は討ちたりとも、争ひか遁れ得ん。萬死の中に一生も無き身なれば、幼少より育はれし伯母は母の恩よりも深し。人に知らせずして最後の盃をせばや、とて物語の序に、近比身も壯になり、酒も嗜みて候へども、思ひ立つ志のある身は少しも飲み候事もなし。今日幸に外より來れる酒少し賜はらんや、といへば盃を出す。押戴きて覺えず涙の落ちけるを押し止むる袂に秘して、遺書をば婢女に授け置き、舟に乗りて備前岡山に至り、田上某が許に暫居て、天和三年大坂に赴く。半藏は十歳なりしかば廣島にありけり。斯て源藏夫より旅人の體をして龜山に行き、又京に歸りて、或は關坂の下に赴きて、二年が間龜山に入るべき謀をたくみけれども、中々思ひも寄らざりしかば江戸に赴き、

隱岐守の屋敷の下部に奉公せんとすれども、此も屋敷の法嚴にて力及ばず。又龜山に行き、又常州、上總、下總までも其便を求めて奔走す。其艱難誠にいふに詞も無かるべし。兎角して廣島を出でて七年過しぬ。始は甚だ行路に行惱みけるが、天の護にや有りけん、程経て後は寒暑をも能堪へ、雨露に立濡れ風氣に冒さるれども、藥をも服せず、其身愈健なり。或は野山に打伏し或は飢渴に及べども、志したる一事は膽を大にして妙ともひるまず。半藏は、今暫し成長して、と一族押し止むるをも顧みず。元祿元年廣島を出でて兄と一所になり、龜山に入らん謀をなす。斯て板倉隱岐守卒去有りてければ、江戸の屋敷より取入らん手立せん、とて半藏江戸に赴き、日備となりて屋敷に時々行きけれども、其便を得ず。

従者孫助は年老病重かりしかば、藝州に行け、と言へ共、何の面目有りてか仇を討得ずして廣島に歸るべき、といふ。源藏、汝辛苦に病附きたり。未だ敵討つべき時の至らぬにや、斯迄心を盡せ共、其甲斐無きこそ口惜けれ。されども親族達の見つき給はるも一日の飯料米一升ぞかし。價にすれば僅に一日四分にや當るべき。日々馳廻り、口に食し肌を蔽はんとするに足らざるは言ふにや及ぶ、草履の價も其中よりこそ出せ。又手よりを求むるにも費無きにあらず。斯る艱難の有様も細やかに安藝の一族に語り聞かせよ、とかき口説き語りけれ

ば廣島に行きぬ。下部の身として、年久しく命を塵芥より軽くして附纏ひたる志を勞りけるが、終に病重くて、元祿十年廣島にて死しけるとぞ。

源藏江戸に赴きて、半藏が手段に心を合せ又上方に歸り、兄弟往還誠まことに織おるが如し。或時は僅わずかの商人となり、又或は近江の茶賣となり、或は伊賀の山家の者と偽り、詞使身の振舞、夫々に似習はんと心掛けたりけり。斯て元祿九年、半藏板倉の士平井才右衛門が許に下部となりて奉公する便を得て、龜山に平井歸りしかば、半藏も供して龜山に入る事を得たり。源藏は上方に赴き伊勢に行通ひて、人目を忍び半藏に逢ひて、仇の有様を傳へ聞く。平井病みて死す。平井と赤堀と親み有れば、其弔に來る道にて討たんと計りしに、如何にか有りけん。赤堀來らで其手段も空しく成りぬ。其明の春半藏に暇を遣りしかば、又龜山の辻四郎兵衛が許に奉公す。辻江戸に赴く。半藏江戸に供せんは志にあらず、と言へ共、龜山に居らんには所の人請人に頼むべき人無ければ、辻が供して又江戸に赴く。源藏目を病みて久しく療養に日を過せしうちに、半藏江戸より又龜山に歸り、忍びて出逢ひて仇を窺へ共便を得ず。半藏又江戸に赴きしかば、源藏も又江戸に行きて、町奉行川口攝津守の許に參りて仇討つべき願の書を出す。是元祿十一年十一月十六日なり。半藏は何とて來らざるや、と問はるゝに、弟は所々志し候所を立巡り候中に、煩ひ

出し候旨を申す。仇討たんと志し候は年久しく成りぬ。如何に今迄は申出でざるや、と問はるゝに、源藏聞きて、兄弟とも幼少にて敵の有家を存せず。近頃承り出したる事の候て申出でたるに候。又承り出さざる前に申出んには、外へ泄聞えて仇の彌いやく匿かくれ候ひなん事を恐れての事に候、といへば、尤なり、とて帳に記して、さて攝津守聞届けられぬ。江戸御城の下馬の下にても見附けたらば討止めよ、と許されしかば、辱かたじけなくき由一禮して、又松前伊豆守の許に至りてければ、攝津守より言送られし故帳に記して、疾く首尾よく仇討たれ候へ、と色代す。其より源藏は龜山に歸り奉公せんと便りを求めけれども、假令金銀を惜まず賄賂すとも、他國より來る人の奉公すべき請に立つべき人は思ひも寄らず。況や一金の貯へなければ、源藏も如何とも爲すべきやうなし。元祿十三年源藏又江戸に赴きける處に、周防守の許に夏目八兵衛といふ者あり、元上總の人なり、下部を召置かんとせしかば、半藏使有りて夏目に告げて、駿河の者にて候が、伊勢の大神宮に參りたき志あり。給金は給はらでも奉公せん、と謀りければ、夏目、さらば、とて源藏を下部にしたりけり。半藏此時は下村一學といふ者に奉公し、兄弟共に龜山に赴く。是より兄弟日夜に隠れ忍びて心を合せ仇を伺ひけるが、其後に石黒仁右衛門が下部に、至つて實儀なる者あり。源藏が心直實なるを見て甚だ心安かりしかば、請人を頼みて事よくなりぬ。斯て鈴木柴

右衛門といふ者に奉公しければ、夏目、此人は勝れたる者なり、と詞を添へたり。半藏も下村に仕ふる事並々ならねば、主人勞る事大方ならず。其父に祿増されしかば、半藏を若黨にして、刀に衣服を添へて與へたり。兄弟今は龜山に在りて時を待つ處に、赤堀が當番の歸路を討つべしと定めて、元祿十四年五月にも成りぬ。八日は赤堀が番なれば、午の刻に代りて歸る處を討たんとせしに、疾く歸りて志を空しくす。さらば其明くる朝の歸路を、とて各用意したり。源藏は殊に下部の爲べき事多く、更に暇無し。宵に少の間暇を乞得て町に出で、夫より龜山の八幡宮は道の邊なれば、立寄りて心靜に著込を著、神前に向ひ、今日必ず父の仇討たせ給へ、と伏拜み、宮を出づれば夜は明けたりしかば二の丸に行き、空眠のみして半藏を待居たり。半藏は出んとせし時主人の用有りて遅く成りたる處に、友達の來りければ、著込著る間も無く、主人より貰ひたる刀は懸け置き、隠し置きたる刀を取り、飛出でて二の丸に行けば、兄は半藏を遅しと待居たるに、來りければ心の内に勇みけり。斯て赤堀其日は唯一人廣間より出でて歸りしかば、兄弟打連れて二の丸の外なる石坂門を打過ぎける時、赤堀が後より駈抜けて前に立塞り、石井宇右衛門が子源藏、半藏なり、と詞をかけ、源藏拔討に赤堀が眉間を切る。赤堀我刀の柄にて受止めたれ共、二の太刀透さず切附けたる處に、半藏駈來り赤堀が頭に深々と切附け、倒るゝ處を覺み

かけて切りたりしかば、立も上らず死したりけり。源藏乘懸り刺貫きて止を刺し、従者をば追拂ひつ。兄弟は、初赤堀が父を打ちたりしより仇を報ゆる次第記置きたるを、常に各一通帯の中へ入れたりしを取出し、赤堀が袴に挟みけり。所は長臣板倉奎右衛門が宅の邊なり。我も我もと馳集るべし。年頃日頃思ひ暮せし赤堀をば討止めたり、今は世に心に懸る事なし。刀の目釘の續かん程切合ひて屍の山をなし、年久しく赤堀を警固せられし恨を晴さん、と兄弟言交し、追ひくる人を待てども更に來る人なし。半藏其時、爰にて切死せんより城外に出て追手を待ち死狂せん。さらば京都にも聞え旅人の往來に聞えて、安藝の一族達にも兄弟本意を遂げし事を知るべきなれば、城門を謀りて遁れん、と言ふより早く半藏先に立ち駈出るを、源藏後より詞をかけ、汝が用の事急ぐと主人の言はれしぞ。疾く急がれよ、といひく、打連て城門を出づれば、番人も聞咎めず。黒門を遁れ出でて京口に至り、龜山の西のこの茶屋に至りければ、追來る人無ければ、さては遁れ得ん事も難からじ。されども馬に乗りて追來らんに、兄弟走りて息切れたらんには、思ふ程切合はれじ、と靜に關川を涉り、山に登りて見渡せども追來る人無ければ、龜山の西南一里半許行きて小家に立寄り、草鞋を買求め、津の城に行く者なり、とて道を問ひ、童を案内者にして、十町餘りも過ぎて椋本の松原見えしかば、童を返し、又道を引違へ

て北なる野に懸りて、食物を認めて、行く／＼小川を渡りしかば、口嗽ぎて太神宮に向ひて、幼少より思ひ入つたる仇を撃ちたる事の忝さよ。廣島を出でしより存命ふべしとは努々存も寄らざるに、爰まで遁れ出たるは神の護と伏拜み、伊賀の上野に出で、夫より山城の笠置の道を問ひ、伏見に赴き京に至り、諸國の一族の許に龜山にて仇打つたる由書記し言送り、岐曾路より江戸に赴き、五月二十六日、町奉行保田越前守の許に行きて仇討ちたる由を申せば、尋問はるゝ事ども有りて越前守自出で、兄弟に始終詳に聞き勞らるゝ事大方ならず。饗膳給はりて夫より松前伊豆守の許に至りしに、過ぎにし年逢ひたりし人々出て悦び合へり。青山の藝州の屋敷に行きて石井清大夫が許にあり。青山下野守の嫡子筑後守此由を聞き、即ち使を以て兄弟を引取られけり。其後下野守の領地其比濱松なりしかば遠州に至り、兄弟共に寵せられ、源藏後重き職を命ぜられけり。

○尼崎幸右衛門が女親の仇を撃ちし事

讚州丸龜 京極備中守高豐の弓足輕尼崎幸右衛門といふ者あり。同じ弓足輕岩淵傳内といへる者、幸右衛門が妻に心をかけ、幸右衛門が在らざる時様々に言ひたりしに、中々受引く氣色も

無く辱しめけるが、又或夜來りしに肯はずして有りし處に、幸右衛門外より歸りて此由を見、傳内無禮者、と怒りしかば、叶はじと思ひ刀を抜きて、幸右衛門を一刀切つて逃ぐる。女房は小女を抱き居しが、其處に棄てたる夫の脇差を抜いて、傳内が逃ぐるを追駆けしかども、逃延びしかば脇差を投附けたりしに、傳内が右の肩に少し疵附きぬ。冬の末夜にて雪は降りぬ、終に行方を知らず。女房立歸り見れば、幸右衛門深手にて死したりしかば、嘆き悲しむ事大方ならず。傳内は重罪の者として尋ねられしかども、行方を知らず。幸右衛門妻は、妹の夫なる關根元右衛門といふ者の方に月日を送れり。只朝夕に夫の最後の有様口惜く思ひつゝ、歎きの餘に病附き、翌年二月に死しけり。三歳になりける女は叔母の養育にて十三歳になりて、名をりやといふ。元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに、或時細やかに父母の事ども語り聞かせ、汝が母は我爲に姉なるが、せめて此子が男なりせば、仇を討つ事も有るべきに口惜やと、明暮嘆きて空しく成りぬ、と語りけるに、りや大に驚き、今まで夢にも知らざる事どもなり。御勞により斯様に人と成りぬる事の忝き由言ひて、潜々と泣くより外の事なし。さて十六歳に成りける時兩人に向ひ、江戸に参りて奉公仕らん。父母の爲に諸國の觀音にも參詣せばやと存するなり。萬に一つも仇討つべき憐をも神佛に祈らばや、といふ。兩人色々止むれども中々止るべきに有らざれ

ば、京極家の侍村瀬藤馬といへるが、江戸に赴くに頼みて差添へ遣す。りやは江戸に赴き、番町の永井源介と言へる御旗本の許に奉公に出づる。源介は劍術の弟子數多日毎に来る。りやが勤むる有様、殊外心を附けて奉公するに、誠に珍しく思ひ、如何なる者の子にや、と尋ねらるるに、りや、詳に事の子細を語り、父の仇を報い申さん志に候由涙を流し答へければ、源介つくんと聞きて、女なりともなとか父の仇を討たざるべき。まづ我劍術の弟子となれ、とて教へ試むるに、才氣有りて思ひ入つたる志なれば、劍術も程無く進みけり。夫婦彌勞り愛せり。二年に及びて主人いへるは、爰にのみ居たらんより、主人を數多取換へて仇を尋ねよかし、と様々に心を附けたりしかば、夫より此處彼處奉公せしに、既に十二年を過ぎて主人七十人に及びり。其後本庄なる坂部安兵衛と言ひし御旗本の家に奉公せしに、小泉文内とて五十餘なる男の有りけるが、平生酒飲にて、壯年の事共何くれと語り出し大言せしが、若氣にて人の女房に心を懸けたりし事により、其夫を切つて棄てたりしが、昨日の様に思へども早く月日も過行きけるよ、と物語せしを、りや聞きて、如何様にも似たる事も有るよと思ひ、たしかに聞届けん物をと心の中に思ひて、夫は噓なるべし、といへば、争でか偽を言ふべき。今迄人に言ひつる事は無けれども、年月は過ぎつ、國は隔りぬ。委き事いざ語るべし。我は元讚州丸龜にて京極家の者なり、とて

有りつる次第を言ひて、幸右衛門に子有りつるが、女なりと覺えたれば懼るゝ事も無し、とて肌を脱げば、聽て母の投附けたりしと聞きし脇差の痕も見えつ。りやは只今爰にて討ちなんと立上らんとせしが、もし討損ひたらば如何すべきと思ひ返して、何となく其坐を立ち、其明の日永井の許に行きて斯々と語りければ、源介大に悦びて、則ちりやを打連れて京極家の村瀬が方に行き告知せたりければ、則ち備中守に申して公に訴へたり。坂部の許に公より糺さるるに、彌紛るゝ事無かりければ、文内を京極家に渡し給はりぬ。まづ文内をば獄に入置き、鳥越の下屋敷に虎落を結び、日を定め文内を獄より出して、勝負の場に出されたり。村瀬、りやを連れりぬ。肌には鎖の著込を著、白縮緬の鉢巻して、一尺餘の小脇指に二尺三寸の刀差し、虎落の内に入る。村瀬、りやに、用意せよ、といふ。其時りや、如何に文内、汝が手に懸けたりし尼崎幸右衛門が女なり。今更出合ひたる事天道の冥加なり、と詞をかくれば、文内、汝に語り落されて、古き事を明したるは無念なれども、此刀にて父も子も手に懸けん、とて三尺許の刀を抽いて切合ひけるが、横に拂ふ刀に肋を切られ、二の太刀面に當りひるむ處を、りや踏込んで乳の下まで切下け、押伏せて靜に首を切り、二十餘年の間志したる仇只今討つて、父母に手向候、と檢使に言ひたりしを、感ぜざる者なし。備中守も悦びて、俸米輕き身の娘なれども、孝行けなけ、さばかり

の士にも争でか劣らん、とて息女に附けられけるとぞ。

此物語、讚州に行く人ありて問聞きしに、更に虚ならず。尼崎が居たりし所は、丸龜の風袋町といひし處とぞ。

○伊丹康勝格言の事

伊丹播磨守康勝は、寛永年中御勘定頭三人を置かれし時、其第一に撰ばれ、農を勤め商を通じ、民と俱に利を同じくしける譽高し。其比商人の運上金を公儀に獻け奉り、甲斐國より出づる鼻帯を一人して商ふ者有りけり。然るに又富める商人有りて内々告げて、今迄の人の奉る處の金に一千兩増して、運上を奉るべし。某一人に帯商ふ事を許し給ふべき由を申す。此事尤然るべし。と議定有りしに、播磨守一人、其心を得ず、とて聞入れず。執政の大臣達にも此由を告げて乞ふ事止まず。三年の後執政の人々、播磨守に云々の事請ふ者あり。同職の人許すべしと言へ共、獨用ひられぬと聞くは誠にや。天下の富を以て見る時は千兩の金は少きなりと言へ共、是を以て國用を足すに資け無しとは言ふべからず。如何に、とありしに、播磨守承り、今より盜賊の起らぬ道だに候ひなんには、如何にも許し申すべし、と答ふ。人々、如何なる子細ぞ、と問は

るゝに、播磨守、日本の唐より優りたる物は紙にて候。中にも鼻帯と申す物は、貴賤一同に一日も無くて叶はぬ物にて候。其價の賤しければこそ世の助とはなり候へ。望み請ふ者、今まで商人の奉りしより千兩の金を増しなん事、此千兩は何處より出すべき。此紙を商ふに價を増して商ふを、又そを買ひて商ふ人幾何も候はんには、是等も同じく利を得て商はんと思はせんに、此處に加はり、彼處に増して、後には價甚貴くなりなん。凡一帖の紙價一二錢を増したらんには、富める人の憂とするには足らず。貧賤の人一日に得る所の利誠に少し。僅に一二錢を累ねて妻子をも養ふ。斯くあさましき者とても、今日迄は鼻帯やうの物を常に用ひ來れり。價忽に増したればとて、更に何物を以てか此に換ふべき。然らば是等も又己々が商ふ物にてもあれ、其價を増して、其得る處の利を以て鼻帯を買ふより外の事候はじ。凡一物の價増す時は、萬物の價同じく貴くなる事、皆定れる事なり。價貴くなるに至りて、求めんとしても得ざれば、或は飢ゑ或は寒ゆるにも及ぶべし。飢寒迫れば必ず死す。死すれども守る處を失ひ候はぬは、士より上つ方の事にこそ候へ。下様の人は飢ゑて死し寒えて死す。盜しても死す。死は一定なり。同じく死する命、如何にもし一日も世に在らまほしく思ふは、賤しきが習なり。さてこそ盜賊は起る事にてこそ候へ。これは只農と商との事のやうに候へども、士の召仕ふ奴婢等も、物の價貴くして求得ね

ば盗む事同じ。斯く盗の世に盛に成りなん時に至りては、如何なる政事をもて之を停め給はんや。是等の盗は貧より起る事にて候。夫よりも又民に許して利を争はしめ、其利上に歸するやうにし給はんには、天下其風に靡き従ひて、良き人々共に利を争ひ、各其欲する所を得んと思はん。是等は盗せぬ盗人にて、其禍盗するより増りてこそ候へ。天下を保たせ給へば天トの寶悉く御寶なり。且上の費をだに省かせ候ひなんには、一年の中に積む所の御寶幾千萬兩の事にて候べき。夫に僅千兩の金を増さんとして盗賊起り、世の風みだりに成り候はん事、身の肉を切りて飢を救ふに、腹に満つる時身終ると言へるに同じかるべし。大略物の價の貴くなり行く事は、國郡に運上の多きが致す處なり。某既に年老ぬ。頓て死し申すべし。相構へて此後も斯る事申す者ありとも、人々能く心得給へ、と言ひければ、人々感じ合へりけるとなり。

○佐藤直方直言の事

佐藤五郎左衛門直方は、學問にて世に聞えけり。酒井忠清賓客の遇に禮せられて終りけり。井伊掃部頭の許に招かれて、未だ掃部頭の前に出でざる中、長臣と物語せし時、直方が云く、大事は論なく候。聊の業も傳授習と申す事の候て、師に就きて學び稽古し、思慮をも盡して後こそ得る

ものなるに、日本の人々は大事の事に學ぶといふ事なく、傳授稽古といふ事も無く、自己の料簡にて事を濟しぬる事あり。各達は存候にや、と問ふ。皆々、如何、と問ひければ、されば國家の政にて候。萬民の命に懸り、一言にても國の安危に候ふ至極の大事故、聖人の教へ置かれたる萬世の鏡有りと雖も、今の大名君臣共之に心附かず。只自己の思慮にて、思ふ儘に政を爲すは危き事の至極なり、と語りけり。直方が論まことに格言といふべし。予筆を此處にとゞむるは意なきにあらず。後の此書を讀む人之を察せられよとなり。

常山紀談跋

湯常山先生錄勝國以來事蹟爲紀談若干卷。蓋先生之意。謂文武之道一已。出將入相。古之君子皆爾。岐而二之者。後世之爲也。夾谷之會。仲尼奪萊蕪之膽於立談之間。魯郊之戰。冉求折齊人之衝於用矛之末。其他禹湯文武之誓。周禮大司馬之所職。可以徵也。夫一治一亂。天之數也。不通文武者。非全材也。白面書生。不知軍旅。拱手讓諸武人。俗士寔可憫也。兵家者流。生長太平之世。目不見兵革。耳不聞金鼓。朔々然徒欲以空言取信於一世。亦可憫也。故當今欲講軍旅以備不虞者。無若熟知戰國事情。熟知戰國事情。而後甲兵可試也。軍旅可明也。先

生之有紀談蓋爲之也。先生學綜古今。抱文武之大略。在治則臯陶伊
 傅。在亂則管樂張葛。何所不可爲乎哉。雖然時命難遭。屢起屢躓。終不
 能用牛刀於一時。抑又堂々之陣。正々之旗。風雨雲雷。交發而竝至。龍
 蛇虎豹。變幻而出沒者。人不及見之也。則我獨憾。先生之志大。而不能
 敢用矣耳。一生精力。半在茲書。先生嘗云。

明和庚寅冬

赤穂 赤松 勳 謹 跋

大正十五年八月二十日印
大正十五年八月二十三日發

刷 有朋堂文庫 (非賣品)
行 常山紀談

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

岡山製本

終